

図4 - a

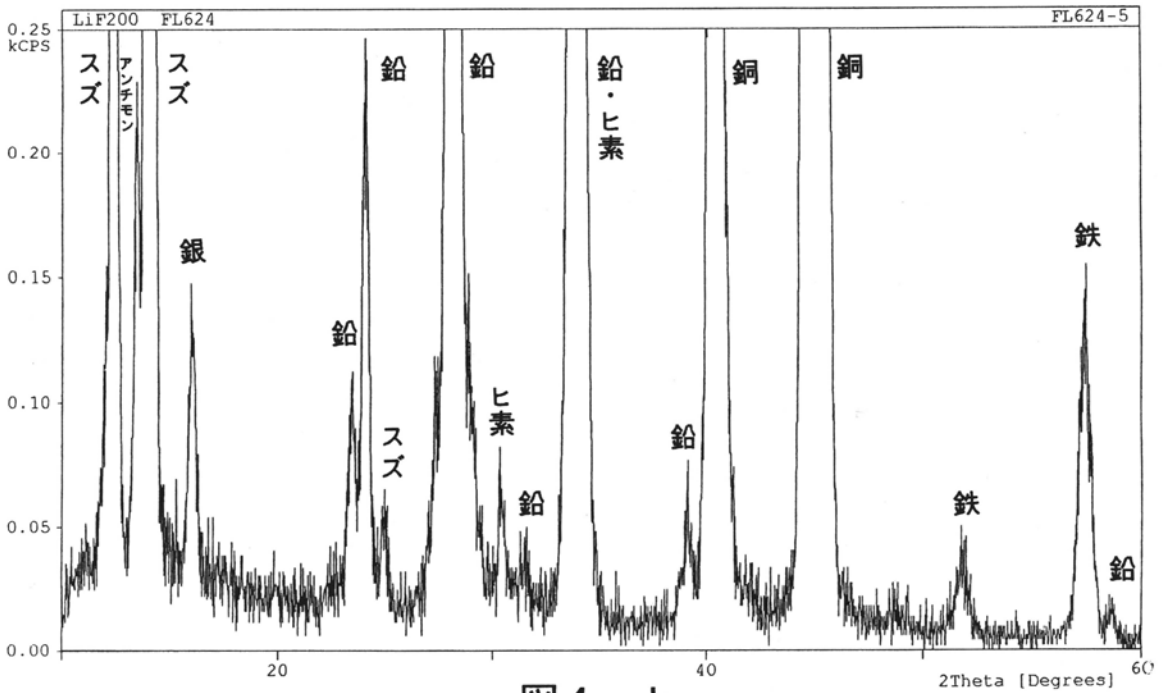


図4 - b

図4 有馬遺跡出土銅釧4個体(4-1)の蛍光X線スペクトル図

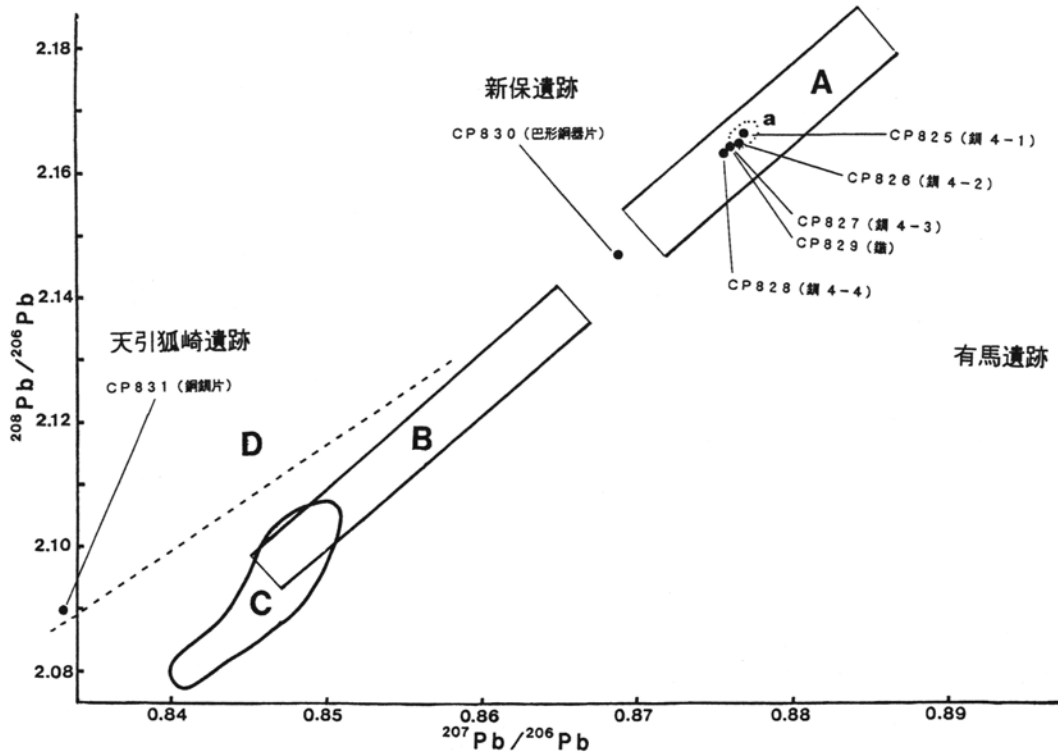


図5 測定した資料の鉛同位体比の分布 (A式図)

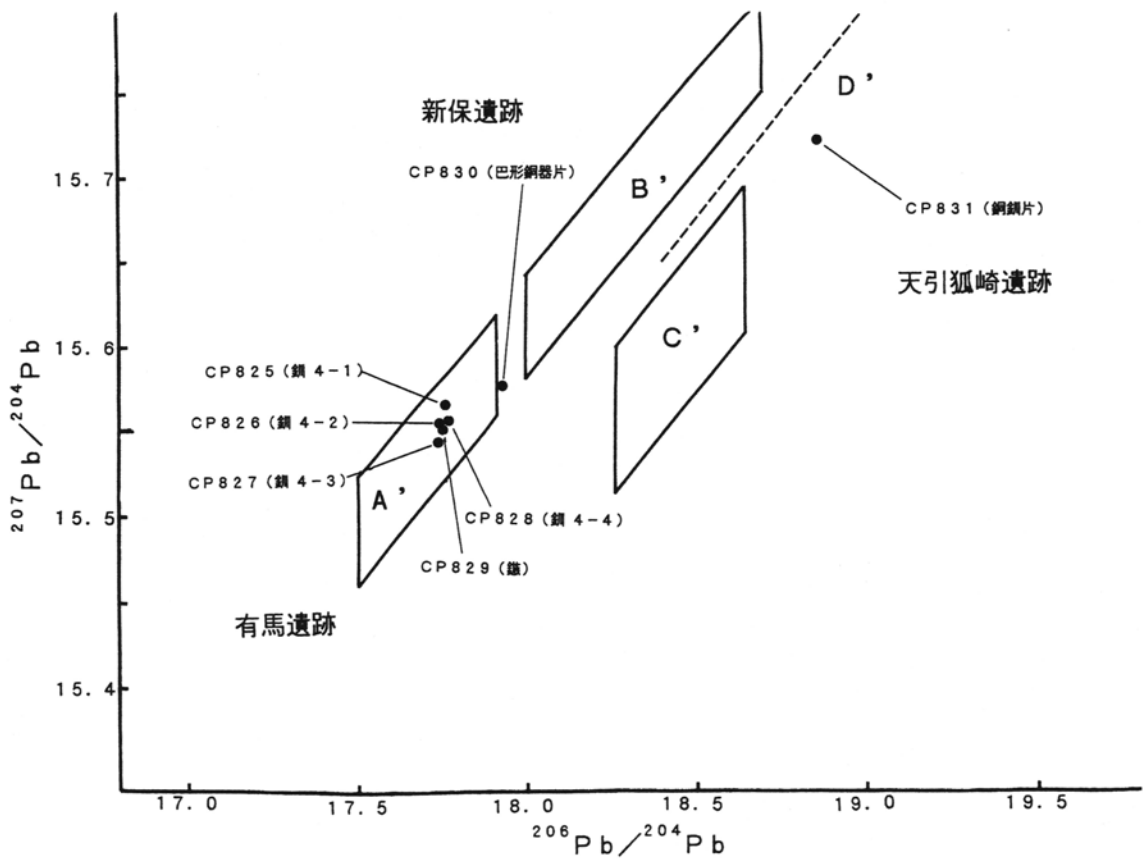


図6 測定した資料の鉛同位体比の分布 (B式図)

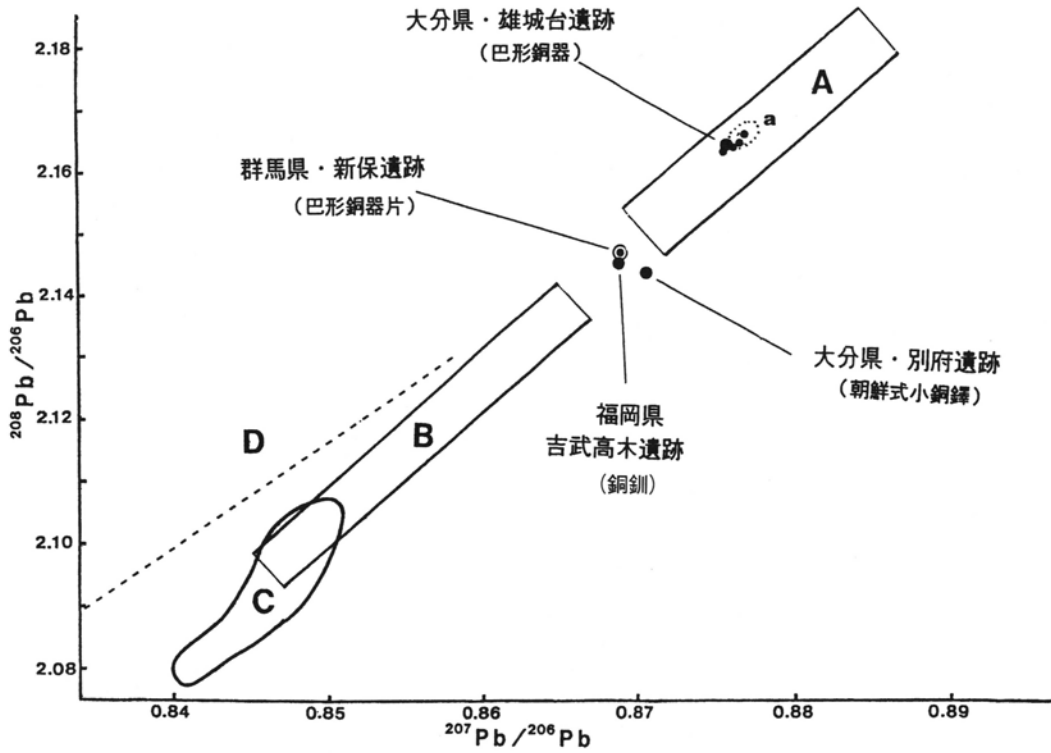


図7 巴形銅器に関連した資料の鉛同位体比の分布 (A式図)

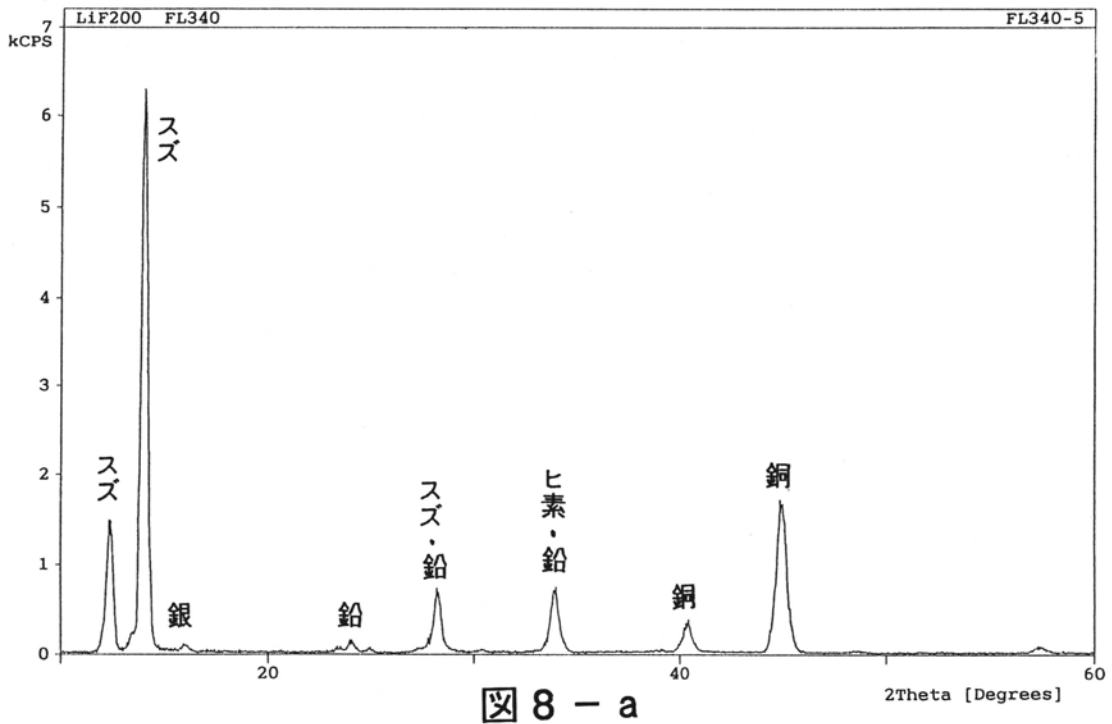


図8 大分県雄城台遺跡出土巴形銅器の蛍光X線スペクトル図

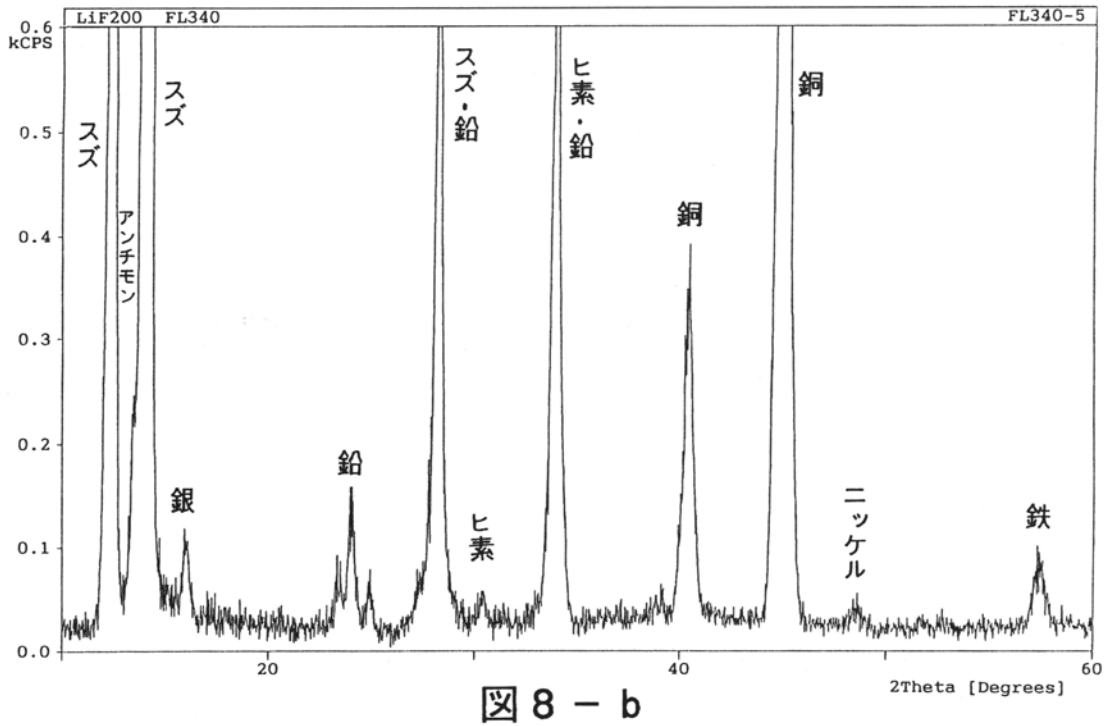


図8 大分県雄城台遺跡出土巴形銅器の蛍光X線スペクトル図



写真1 新保遺跡出土の巴形銅器片 表



写真2 新保遺跡出土の巴形銅器片 裏

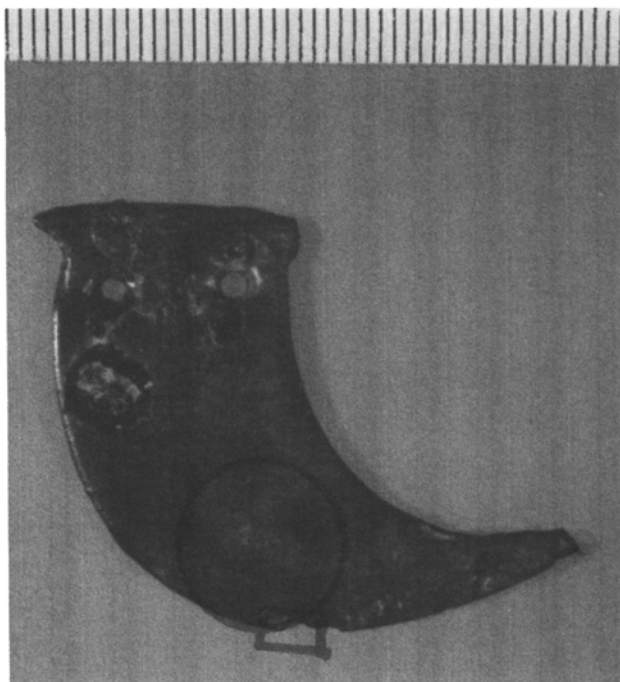


写真3 新保遺跡出土巴形銅器片の蛍光X線測定部分



写真4 新保遺跡出土巴形銅器片の蛍光X線測定部分(拡大)

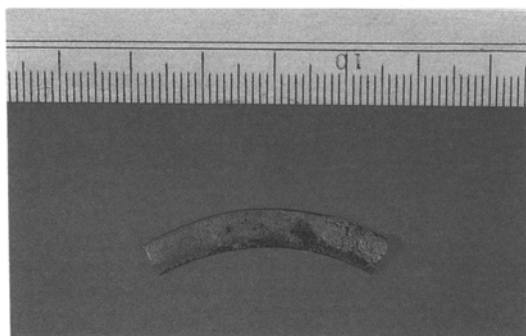


写真5 天引狐崎遺跡出土の銅釦片 表

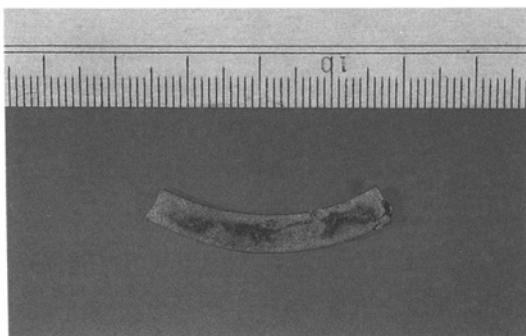


写真6 天引狐崎遺跡出土の銅釦片 裏

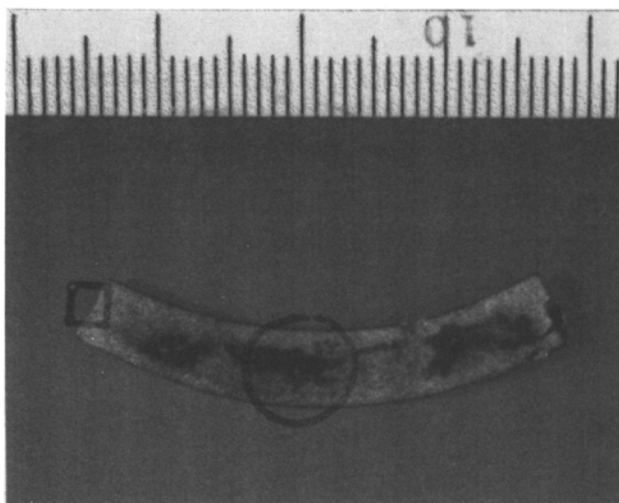


写真7 天引狐崎遺跡出土銅釦片の蛍光X線測定部分

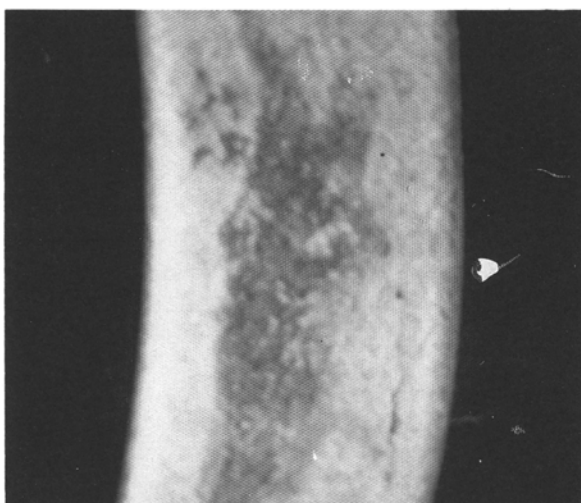


写真8 天引狐崎遺跡出土銅釦片の蛍光X線測定部分(拡大)



写真9 有馬遺跡出土の銅鏃 表



写真10 有馬遺跡出土の銅鏃 裏

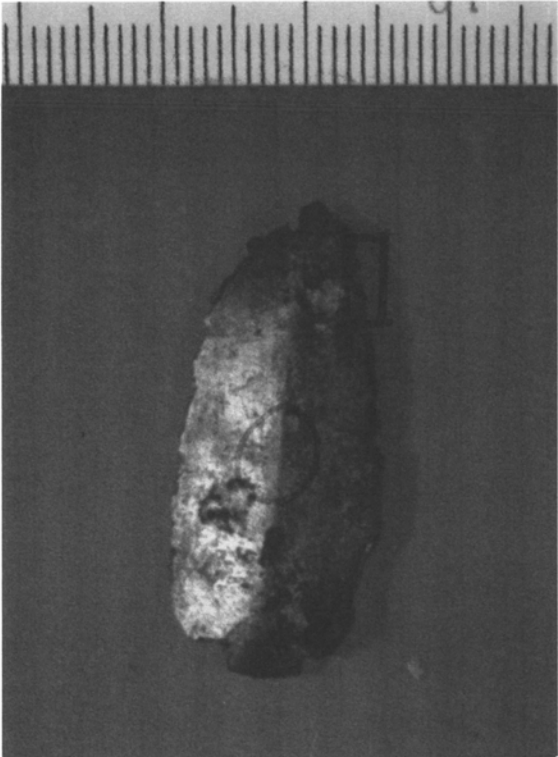


写真11 有馬遺跡出土銅鏃の蛍光X線測定部分

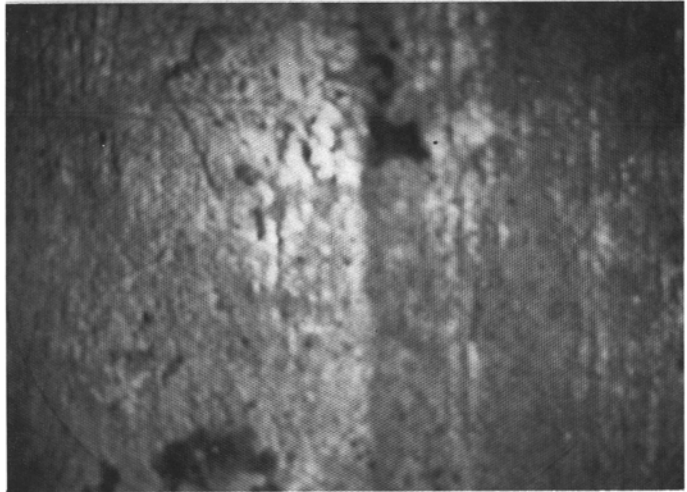


写真12 有馬遺跡出土銅鏃の蛍光X線測定部分 (拡大)



写真13 有馬遺跡出土の銅釧 4 個体

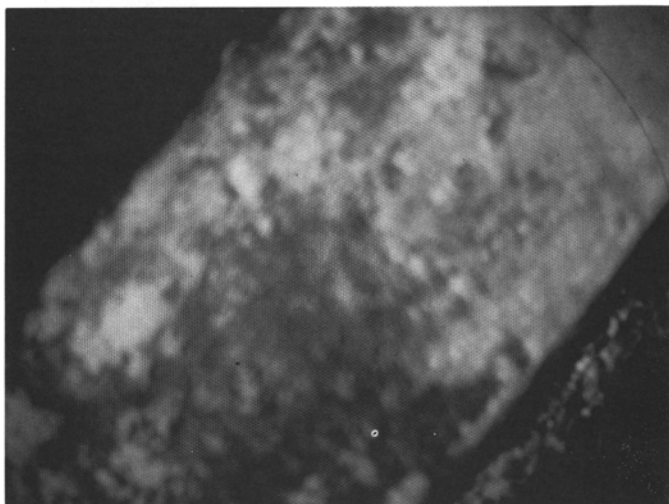


写真15 有馬遺跡出土の銅釧
4 個体の蛍光X線測定部分 (拡大)



写真14 有馬遺跡出土の銅釧
4 個体の蛍光X線測定部分

3 天引狐崎遺跡出土材の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

A はじめに

天引狐崎遺跡は、甘楽郡甘楽町大字天引狐崎他地内に所在する。遺跡は、天引川と三途川が合流する地点の台地部と低地部からなる。台地部では、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中近世の遺構・遺物が検出される。また、低地部からは、古墳時代以前とされる旧河川が検出され、多量の木製品や自然木あるいは種実類が出土している。

ここでは、低地部から出土した木製品や自然木、台地部の弥生時代の遺構から出土した炭化材を対象として、その樹種を検討した。ここで得られた木材資料は、当時の周辺植生やその中からの木製品としての樹種選択を考える上で重要なものである。

B 方法と記載

木材試料は、生材と炭化材からなる。このうち生材試料は、群馬県埋蔵文化財調査事業団において、加工痕が明瞭なもの（実測）と加工痕が明瞭でないもの（参考）とに分類され、プレパラートの作成が行われた。これら標本を光学顕微鏡下40～400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。

炭化材試料は、実体顕微鏡下で横断面について観察し、同定できるものと同定できないものに分ける。同定された典型試料と同定できない試料について、片刃カミソリなどを用いて横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柁目と同義）の3断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製 JSM T-100型）で観察する。

以下に、標本の記載と同定の根拠を示し、その結果を表1～18に示す。なお、ここで検討した木材プレパラートは、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版1a～1c.

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。放射組織は、柔細胞からなり単列で1～5細胞高である。また、分野壁孔はヒノキ型で4個見られる（接線断面）。仮道管の内壁には、2本のらせん肥厚が対になって分布する（放射・接線断面）。

以上の形質から、イチイ科カヤ属のカヤの材と同定される。カヤは、本州の宮城県以南の暖帯から温帯にかけて分布する樹高25m、直径90cmに達する常緑針葉樹である。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科 図版2a～2c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は非常に狭い（横断面）。放射組織は単列で1～9細胞高である（接線断面）。分野壁孔はトウヒ型で1～2個見られる（放射断面）。仮道管の内壁にはらせん肥厚が分布する（放射・接線断面）。

以上の形質から、イヌガヤ科イヌガヤ属のイヌガヤの材と同定される。イヌガヤは、本州（岩手県以南）の暖帯から温帯にかけて分布する樹高15m、直径30cmに達する常緑針葉樹である。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図版3a～3c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である（横断面）。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状に著しく突出している（放射断面）。放射組織は、エピセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2～7細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科マツ属複維管束亜属のアカマツの材と同定される。アカマツは、暖帯および温帯下部に分布する樹高30～35m、幹径60～80cmに達する常緑針葉樹である。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁は内側に向かっ

第V章 分析成果

て著しく突出している（放射断面）。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で1~15細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科のマツ属複維管束亜属の材と同定される。マツ属複維管束亜属は、本州・四国・九州に生育するアカマツ (*P. densiflora*) と海岸部に生育するクロマツ (*P. thunbergii*) がある。ここで検出されるマツ属複維管束亜属は先のアカマツが多く検出されることからほぼアカマツと思われるが、保存が悪いため特定できない。いずれも樹高30m、幹径1m前後に達する常緑針葉樹である。

モミ属 *Abies* マツ科 図版4a~4c.

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。また、早材部仮道管は大きく薄壁で、晩材部仮道管は厚壁で偏平でかつ狭い（横断面）。放射組織は、柔細胞からなり単列で2~15細胞高である（接線断面）。その分野壁孔はトウヒ型で1分野に1~2個存在する。また、放射組織の壁は厚く、じゅず状末端壁を有する（放射断面）。

以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定される。モミ属の樹木には、亜高山帯に分布するシラビソ (*A. veichii*) やオオシラビソ (*A. mariesii*)、暖帯から温帯にかけて分布するモミ (*A. firma*) などがある。いずれも樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

トウヒ属 *Picea* マツ科 図版5a~5c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で2~22細胞高である（接線断面）。その分野壁孔は、トウヒ型で1分野に2~3個見られる（放射断面）。

以上の形質から、マツ科のトウヒ属の材と同定される。トウヒ属の樹木には、エゾマツ (*P. jezoensis*) やその変種のトウヒ (*P. jezoensis* var. *hondeensis*) などがある。亜高山帯を中心に分布する樹高30mに達する常緑針葉樹である。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図版6a~6c.

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である。道管と放射組織との壁孔は、蜂巣状を呈している（放射断面）。放射組織は異性単列、3~21細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定される。ヤナギ属の樹木には、日本において約40種程度あり、高木から低木までその大きさはさまざまである。ヤナギ属の樹木は、陽光の水湿地に生育する落葉広葉樹である。

アサダ *Ostrya japonica* Sarg. 図版8a~8c.

丸みを帯びた小~中型の道管が放射方向に2~5個複合した散孔材である（横断面）。道管の内壁には微細ならせん肥厚が見られ、道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、ほぼ同性1~3細胞幅、3~21細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、カバノキ科アサダ属のアサダの材と同定される。アサダは全国の温暖に分布する標高15mに達する落葉広葉樹である。

アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版9a~9c.

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、チロースが見られる（放射断面または接線断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものとがある（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ (*Q. acuta*) やアラカシ (*Q. glauca*) やシラカシ (*Q. myrsinaefolia*) をはじめ8種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径1mに達する常緑広葉樹である。

コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版10a~10c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる（接線断面）。

以上の形質からブナ科のコナラ属コナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ (*Q. serrata*) やミズナラ (*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、カシワ (*Q. dentata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*) などがある。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版50a~50c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものとがある（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ (*Quercus acutissima*) と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ (*Q. variabilis*) がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版11a~11c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから除々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環

孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性であり時に2細胞幅で、2~15細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版12a~12c.

年輪のはじめに大型の管孔が数個配列し、晩材部では小型の管孔が径を減じて斜めに配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（接線断面）。放射組織は、異性1~6細胞幅、2~33細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ニレ科のニレ属の材と同定される。ニレ属の樹木には、中部地方以西の荒地などに生える樹高15m、幹径60cmに達するアキニレ (*U. parvifolia*)、北海道から九州にかけての平野部や山麓部で普通に生える樹高30m、幹径1mに達するハルニレ (*U. davidiana* Planch. var. *japonica*) や北海道に特に多く見られる樹高25m、幹径1mに達するオヒョウ (*U. laciniata*) がある。いずれも落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版13a~13c.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、早材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる（放射断面）。放射組織は、異性1~6細胞幅、2~30細胞高からなり、大型の結晶細胞が認められる（接線断面）。

以上の形質から、ニレ科ケヤキ属のケヤキの材と同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版14a~14c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部では多数集合して斜め方向に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる（放射断面）。放射組織は、異性1~10細胞幅、3~52細胞高で明瞭な鞘細胞が認められる（接線断面）。

以上の形質から、ニレ科のエノキ属の材と同定される。エノキ属の樹木には、本州以南の暖帯から亜熱帯に分布するエノキ (*C. sinensis*) や、温帯に分布するエゾエノキ (*C. jessoensis*) などがある。エノキは樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図版15a~15c.

厚壁で中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~5個複合して散在する散孔材である。木部柔組織は、早材部で連合翼状ないし帯状である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性1~4細胞幅、2~20細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ニレ科ムクノキ属のムクノキの材と同定される。ムクノキは、関東地方以西の暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科 図版16a~16c.

年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部で接線方向に数個複合して散在する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる（放射断面）。放射組織は、異性1~5細胞幅、2~38細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クワ科クワ属のヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、温帯から亜熱帯にかけて広く分布する樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹である。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 図版17a~17c.

中型の管孔が密に分布する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は階段状である（放射断面）。放射組織は、異性1~2細胞幅、1~26細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、カツラ科カツラ属のカツラの材と同定される。カツラは、全国の温帯から暖帯にかけて分布する樹高20m、幹径60cmの落葉広葉樹で、日本特産の樹木である。

モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図版18a~18c.

小型の管孔が単独または放射方向に2~4個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性で1~3細胞幅、5~27細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、モクレン科のモクレン属の材と同定される。モクレン属の樹木には、ハウノキ (*M. obovata*) やコブシ (*M. kobus*) などがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する。

クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科 図版19a~19c.

中型の管孔が単独ないしは2~4個放射方向に複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は周囲状である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性1~3細胞幅、2~14細胞高で、油細胞が見られる（接線断面）。

以上の形質から、クスノキ科ニッケイ属のクスノキの材と同定される。クスノキは、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25m、幹径80cmに達する常緑広葉樹である。

クロモジ属 *Lindera* クスノキ科 図版20a~20c.

厚壁で中型の管孔が単独または2~4個放射方向に複合して散在する散孔材である（横断面）。道管

第V章 分析成果

のせん孔は単一あるいは10本程度の横棒からなる階段状せん孔である（放射断面）。放射組織は、異性1~2細胞幅、3~23細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クスノキ科のクロモジ属の材と同定される。クロモジ属の樹木には、樹高6m程度のクロモジ (*L.umbellata*) やシロモジ (*L.triloba*) など本州以南の暖帯から温帯にかけて8種類ほどある落葉広葉樹である。

ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb.ex Koidz. バラ科 図版21a~21c.

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる（横断面）。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある（放射断面）。放射組織は、同性に近い異性で1~26細胞幅、2~32細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、バラ科サクラ属のヤマザクラの材と同定される。ヤマザクラは、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25mに達する落葉広葉樹である。

サクラ属 *Prunus* バラ科 図版22a~22c.

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる（横断面）。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある（放射断面）。放射組織は、同性に近い異性で、1~3細胞幅、2~23細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定される。サクラ属の樹木には、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25mに達するヤマザクラ (*P.jamasakura*) など数種類ある。

バラ属 *Rosa* バラ科 図版23a~23c.

年輪のはじめに丸い管孔が2列ほど並び、そこから径を減じて散在する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は異性で、1~6細胞幅、背は非常に高い（接線断面）。以上の形質から、バラ科のバラ属の材と同定される。バラ属の樹木には、蔓性のノイバラ (*R.multiflora*) や落葉低木のヤマイバラ (*R.sambucina*) などその種類は多い。

ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 図版24a~24c.

丸い大型の管孔が単独または数個複合して散在する環孔材である。また、木部柔組織は周囲状である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、同性で1~3細胞幅、3~19細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マメ科ネムノキ属のネムノキの材と同定される。ネムノキは、暖帯から熱帯にかけて分布する樹高10mに達する落葉広葉樹である。

イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr.et Maxim.var. *buergeri*(Maxim.)C.K.Schn. マメ科 図版25a~25c.

年輪のはじめに大管孔が並び、そこから径を減じた管孔が2個程度複合して散在する環孔材である（横断面）、接線断面においては層階状で、内壁にはらせんがある（放射組織）。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~38細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マメ科イヌエンジュ属のイヌエンジュの材と同定される。イヌエンジュは、北海道から本州中部の温帯に分布し、その変種であるハネミイヌエンジュは本州中部から九州の暖帯に分布する。イヌエンジュは、樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

フジ *Wisteria floribunda*(willd.)DC. マメ科 図版26a~26c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列並び、晩材部で小型の管孔が塊状に集合する。また木部柔組織は周囲状で（横断面）、木部柔組織は、接線断面において層階状を呈する。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある（放射断面）。放射組織は、異性1~6細胞幅、背は非常に高く、不完全な周囲状を示す。

以上の形質から、マメ科フジ属のフジの材と同定される。フジは、本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する落葉の籐本である。

サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC. ミカン科 図版27a~27c.

小型の管孔が単独あるいは2~4個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射組織）。放射組織は、同性1~2細胞幅、3~9細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ミカン科サンショウ属のサンショウの材と同定される。サンショウは、全国の低山地の林内に生える樹高3m前後の落葉広葉樹である。

コクサギ *Orixa japonica* Thunb. ミカン科 図版28a~28c.

小型の管孔が集合して雲紋状を呈する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、かすかにらせん肥厚が認められる（放射断面）。放射組織は、異性1~2細胞幅、3~25細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ミカン科コクサギ属のコクサギの材と同定される。コクサギは本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する低木の落葉広葉樹である。

キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 図版29a~29c.

年輪のはじめに大型の管孔が並び、そこから径を減じた管孔が数個複合して斜め接線方向に連続して散在する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる（放射断面）。放射組織は、同性1~3細胞幅、4~18細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ミカン科キハダ属のキハダの材と同定される。キハダは、温帯に分布する樹高20m、

幹径1mに達する落葉広葉樹である。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. トウダイグサ科 図版30a~30c.

年輪の始めにやや大きく厚壁の管孔があり、そこから順次径を減じ、夏材部では比較的厚壁の小道管が2~6個放射方向に複合して散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性で1~2細胞幅、2~15細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、トウダイグサ科アカメガシワ属のアカメガシワの材と同定される。アカメガシワは東北地方以南の暖帯の陽光地に普通にみられる樹高10m、幹径30cm程度になる落葉広葉樹である。

ヌルデ *Rhus javanica* Linn. ウルシ科 図版31a~31c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2程度並び、晩材部では小型の管孔が単独または2~4個程度放射方向あるいは塊状に散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、3~49細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ウルシ科ウルシ属のヌルデの材と同定される。ヌルデは、樹高7mに達する温帯から亜熱帯にかけて分布する落葉広葉樹である。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版32a~32c.

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~5複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は帯状または雲紋状を呈する(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、同性1~6細胞幅、1~36細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カエデ科のカエデ属の材と同定される。カエデ属の樹木は、全国の暖帯から亜寒帯まで広く、その種類も20種以上と多い。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume. トチノキ科 図版33a~33c.

小型の管孔が単独または2~4個程度放射方向に複合し、やや密に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、単一である。内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、同性単列まれに1~2細胞幅で、3~14細胞高である。また、この樹種を最も特徴づけるリップルマーク(規則的な層階状配列)を示している(接線断面)。

以上の形質から、トチノキ科トチノキ属のトチノキと同定される。トチノキの樹木は、樹高30m、幹径2mに達する北海道から九州まで分布する落葉広葉樹である。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図版34a~34c.

年輪のはじめに大型の管孔が並び、夏材部には1~2個複合した小管孔が散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一、小管孔の内壁には肥厚がある(放射断面)。木部柔組織は連合翼状に分布し、放射組織は、同性1~3細胞幅、3~21細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ムクロジ科ムクロジ属のムクロジの材と同定される。ムクロジは関東地方以西の暖帯から亜熱帯に分布する樹高15m、幹径40cm程度になる落葉広葉樹である。

ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 図版35a~35c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列程度並び、晩材部では小型の管孔が塊状あるいは放射方向に複合して散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、3~23細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クロウメモドキ科のケンボナシ属の材と同定される。ケンボナシ属の樹木には、ケンボナシ(*H. dulcis*)やケケンボナシ(*H. tomentella*)があり、いずれも樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹で、ケンボナシが全国の温帯に、ケケンボナシが本州西部や四国などに分布する。

マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科 図版36a~36c.

年輪の始めに大型の管孔が並び、晩材部では径を減じた管孔が散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞幅、10~30細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マタタビ科のマタタビ属の材と同定される。マタタビ属の樹木には、サルナシ(*A. arguta*)やマタタビ(*A. polygama*)などがあり、全国の暖帯から温帯にかけて分布するつる植物である。

ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科 図版37a~37c.

年輪のはじめに小型の管孔がやや密に並び、晩材部にかけては小型で角張った管孔が散在する環孔性の散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、複数本の横棒からなる階段状せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性で1~2細胞幅、1~10細胞高である。また、大型の油細胞が認められる(接線断面)。

以上の形質から、ツバキ科ツバキ属のヤブツバキの材と同定される。ヤブツバキの樹木は、屋久島や沖縄に分布する変種のヤクシマツバキ(*C. japonica* var. *macrocarpa* Masamune)を除き、一般的にツバキと呼ばれているものである。このヤブツバキは、全国の暖帯に広く分布する樹高10m、幹径30cmの常緑広葉樹である。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. pro emend. Sieb. et Zucc. ツバキ科 図版38a~38c.

角張った管孔がほぼ単独に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、37本以上の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は異性単列、1~24細胞高からなり、数細胞は大きくかつ長く伸びる方形である(接線断面)。

第V章 分析成果

以上の形質から、ツバキ科サカキ属のサカキの材と同定される。サカキは、関東地方以西の暖帯に分布する樹高10m、幹径30cmの常緑広葉樹である。

ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ミズキ科 図版39a~39c.

小型で丸い管孔が単独あるいは4個程度複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は多数の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、4~18細胞高で、単列部は背が高い(接線断面)。

以上の形質から、ミズキ科ミズキ属のミズキの材と同定される。ミズキは、暖帯から温帯にかけて分布する樹高15m、幹径40cmに達する落葉広葉樹である。

クマノミズキ類 *Cornus cf. brachypoda* C.A.Meyer ミズキ科 図版40a~40c.

小型で丸い管孔がほぼ単独で散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は25本前後の横棒からなる階段状せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、10~31細胞高である。

以上の形質から、ミズキ科ミズキ属のクマノミズキあるいはヤマボウシ(*C.kousa*)のいずれかの材と同定される。クマノミズキは本州以南に暖帯や温帯に生育する樹高12m、幹径30cmの落葉広葉樹である。またヤマボウシは本州以南の温帯に生育する樹高10m、幹径30cm前後の落葉広葉樹である。

アオキ *Aucuba japonica* Thunb. ミズキ科 図版41a~41c.

小型で薄壁の管孔が単独あるいは2~3個程度複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、多数の階段からなる階段状せん孔で、内壁にはらせん肥厚がかすかに見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞幅で細胞高は非常に高く、やや鞘状である(接線断面)。

以上の形質から、ミズキ科アオキ属のアオキの材と同定される。アオキは、本州・四国の暖帯に分布する樹高2m前後の常緑広葉樹である。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版42a~42c.

小型の管孔が放射方向に2~5個複合し、晩材部ではやや径を減じて放射方向に2~5個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は10本程度の太い横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、2~24細胞高である。

以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定される。エゴノキ属の樹木は、本州以南の温帯から暖帯に分布するエゴノキ(*S.japonica*)や全国の温帯に分布するハクウンボク(*S.obassia*)あるいは関東以西の温帯に分布するコハクウンボク(*S.shirasawana*)などがある。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版43a~43c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3個並び、以後径を減じた管孔がやや塊状に分布する環孔材である。また、木部柔細胞は周囲状もしくは連合翼状である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性1~3細胞幅、2~14細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、モクセイ科のトネリコ属の材と同定される。トネリコ属の樹木には、トネリコ(*F.japonica*)やシオジ(*F.spaethiana*)あるいはヤチダモ(*F.mandshurica*)などがあり、全国の温帯に分布する。

サワフタギ類 *Symplocos* ハイノキ科 図版44a~44c.

小型の管孔がほぼ単独で均一に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、68本程度の横棒からなる階段状せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、3~26細胞高で、単列部は背が高く、交互状である。

以上の形質から、ハイノキ科ハイノキ属のうちのサワフタギ類の材と同定される。サワフタギは、全国の温帯から暖帯にかけて分布する落葉広葉樹の低木である。

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科 図版45a~45c.

やや大型の丸く厚壁の管孔が単独もしくは2~5個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、3~22細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クマツヅラ科のムラサキシキブ属の材と同定される。ムラサキシキブ属の樹木には、ムラサキシキブ(*C.japonica*)やヤブムラサキ(*C.mollis*)などがあり、いずれも樹高3m程度の本州、四国、九州に分布する落葉広葉樹である。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex. Graebn. スイカズラ科 図版46a~46c.

小型の管孔が年輪のはじめにやや密に並び、以後接線方向に2~3個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、4~22細胞高である。また、放射組織は、鞘状を呈する(接線断面)。

以上の形質から、スイカズラ科ニワトコ属のニワトコの材と同定される。ニワトコは樹高5m程度の全国の温帯から暖帯にかけて分布する落葉広葉樹である。

散孔材A 図版47a~47c.

小型の管孔が1~5程度放射方向に複合し、年輪に向かってその径を減じながら散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性1~4細胞幅でその背は比較的高い(接線断面)。

散孔材B 図版48a~48c.

小型の管孔が1~5程度放射方向に複合し、年輪に向かってその径を減じながら散在する散孔材であ

る（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性1~5細胞幅、5~38細胞高で鞘状を呈する（接線断面）。

散孔材C 図版49a~49c.

小型の管孔がほぼ単独で散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性1~3細胞幅、5~26細胞高である（接線断面）。

C 考察

検討した木材試料は、低地部旧河川の木製品274点と参考木材と思われる木材1291点、台地部の遺構から出土した炭化材19点である。検出された樹種は、低地部旧河川の木製品では21分類群、同参考木材では49分類群、台地部の炭化材では10分類群がそれぞれ検出される（次頁表）。

低地部から出土する木材について見ると、木製品の大半は杭材からなる。この杭材の樹種には、針葉樹のモミ属が特に多く、アカマツも多く検出される。その他では常緑広葉樹のアカガシ亜属や落葉広葉樹のカエデ属あるいは常緑広葉樹のヤブツバキなども検出される。ただし、B区では、A区に見られたアカマツからなる杭材は全く見られない。

一方、加工痕の認められない木材（参考木材）を見ると、最も多く検出される樹種は、常緑広葉樹のアカガシ亜属（カシ類）である。この他多く検出される樹種では、落葉広葉樹のカエデ属、針葉樹のモミ属、落葉広葉樹のトチノキ、落葉広葉樹のムクノキ、ケヤキ、イヌエンジュ、クロモジ属、コクサギ、ヤマグワ、エノキ属、アサダなども比較的高率で検出される。全てが自然木であるとは言えず、またこれら出現率がそのまま周辺植生を反映しているとは言えないが、常緑広葉樹のアカガシ亜属を主体に針葉樹のモミ属や落葉広葉樹のカエデ属やトチノキあるいはムクノキを混じえた森林が形成されていたことが推定される。この地域では、丘陵部の西側斜面においては、1年を通して日当たりが良く、常緑広葉樹のアカガシ亜属などの樹木にとって生育条件が整った環境であったことが理解される。これらの樹木植生は、群馬県内平野部と比べるとコナラ属クヌギ節がほとんど検出されない点で大きく異なる（藤根・鈴木 1994）。なお、低地部D区では、針葉樹のトウヒ属が8点検出されるが、上述の推定される樹木植生とは異なり、寒冷要素の強い樹木である。これらトウヒ属の樹木は、持ち込まれたことは否定できないが、基盤層から洗い出された木材と考えられる。現地の層位を確認していないため、断定はできないが、概ね水期の木材ではないかと思われる。

先の杭類からなる木製品とこの自然木と思われる木材の組成を比べると、1)木製品に見られるアカマツは、参考木材ではほとんど検出されない、2)杭類に最も多く検出される針葉樹のモミ属は参考木材では少ない、3)参考木材で最も多く検出されるアカガシ亜属やカエデ属あるいはトチノキなどは杭類には多くない。こうした状況から、木製品の特に杭材としてモミ属やアカマツなどの樹木を選択的に利用していたことが理解される。

台地部の遺構から検出される炭化材では、針葉樹のカヤとモミ属、常緑広葉樹のアカガシ亜属、落葉広葉樹のクリ、コナラ節、クヌギ節、アサダ、ケヤキなどが検出される。これらは、住居建築材や燃料材の一部と思われるが、先の低地部の樹木とほぼ同様の樹木が検出されている。

引用文献

藤根 久・鈴木 茂.1994「元総社寺田遺跡出土材の樹種同定と周辺植生」『元総社寺田遺跡Ⅱ』135-185.群理文.

第V章 分析成果

出土木材の樹種一覧

樹種	実 測								参 考				炭 化 材		
	A 区			B~D区			合 計	%	A区	他	合 計	%	弥生	古墳	出土遺構
	杭	他	木瘤	杭	他	木瘤									
アオキ	0	1	0	0	0	0	1	0.4	10	0	10	0.8			
アカガシ亜属	8	3	1	2	3	0	17	6.1	360	13	373	29.2	3		104,105,112
アカマツ	41	2	1	0	0	0	44	15.9	2	0	2	0.2			
アカメガシワ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	5	0	5	0.4			
アサダ	2	0	0	0	0	0	2	0.7	29	1	30	2.3	1		112
イヌエンジュ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	38	2	40	3.1			
イヌガヤ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	1	1	2	0.2			
イヌシテ節	0	0	0	0	0	0	0	0.0	12	0	12	0.9			
エゴノキ属	0	0	0	0	0	0	0	0.0	4	0	4	0.3			
エノキ属	0	1	0	0	1	0	2	0.7	30	1	31	2.4			
カヤ	0	1	0	1	10	0	12	4.3	10	17	27	2.1	2		030,091
カエデ属	1	4	1	1	1	0	8	2.9	97	12	109	8.5			
カツラ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	2	0	2	0.2			
キハダ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	1	0	1	0.1			
クスギ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0	0	0	0.0		1	141
クスノキ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	1	0	1	0.1			
クマノミズキ類	0	0	0	0	0	0	0	0.0	3	0	3	0.2			
ク リ	2	3	0	0	0	0	5	1.8	7	2	9	0.7	3		071,104,134
クロモジ属	1	0	0	0	0	0	1	0.4	39	0	39	3.1			
ケヤキ	0	3	0	1	1	0	5	1.8	44	4	48	3.8	1		112
ケンボナシ属	2	0	0	0	0	0	2	0.7	18	0	18	1.4			
コクサギ	0	1	0	1	0	0	2	0.7	34	2	36	2.8			
コナラ節	0	0	0	0	0	0	0	0.0	22	4	26	2.0	2		032,074
サカキ	1	0	0	0	0	0	1	0.4	4	0	4	0.3			
サクラ属	1	0	0	0	0	0	1	0.4	10	2	12	0.9			
サワフタギ類	0	0	0	0	0	0	0	0.0	4	0	4	0.3			
サンショウ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	1	0	1	0.1			
トウヒ属	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0	8	8	0.6			
トチノキ	2	0	0	0	0	0	2	0.7	74	8	82	6.4			
トネリコ属	0	0	0	0	1	0	1	0.4	8	10	18	1.4			
ニレ属	0	0	0	0	0	0	0	0.0	1	1	2	0.2			
ニワトコ	2	0	0	0	0	0	2	0.7	11	1	12	0.9			
ヌルデ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	6	0	6	0.5			
ネムノキ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	2	0	2	0.2			
バラ属	0	0	0	0	0	0	0	0.0	1	0	1	0.1			
フジ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	25	4	29	2.3			
マタタビ属	0	0	0	0	0	0	0	0.0	21	1	22	1.7			
マツ属複雑管束亜属	3	0	0	0	0	0	3	1.1	0	0	0	0.0			
ミズキ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	3	1	4	0.3			
ムクノキ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	57	11	68	5.3			
ムクロジ	1	1	0	1	0	0	3	1.1	23	5	28	2.2			
ムラサキシキブ属	0	0	0	0	0	0	0	0.0	9	1	10	0.8			
モクレン属	0	0	0	0	0	0	0	0.0	1	0	1	0.1			
モミ属	0	0	83	1	1	71	156	56.3	82	1	83	6.5	1		098
ヤナギ属	0	0	0	0	0	0	0	0.0	3	0	3	0.2			
ヤブツバキ	4	1	0	0	0	0	5	1.8	4	1	5	0.4			
ヤマグワ	1	1	0	0	0	0	2	0.7	28	4	32	2.5			
ヤマザクラ	0	0	0	0	0	0	0	0.0	12	1	13	1.0			
その他	0	0	0	0	0	0	0	0.0	13	0	13	1.0			
合 計	72	22	86	8	18	71	277	100.0	1159	119	1278	100.0			

4 天引狐崎より出土した大型植物化石

吉川純子 (パレオ・ラボ)

A 大型植物化石の同定結果と若干の考察

天引狐崎は、鑄川支流の天引川と三途川周辺の低地部と台地部に位置する。大型植物化石の試料は、三途川が北流する低地部の旧河川から、現地取り上げ試料として採取された。古墳時代以前の旧河川内からは種実のほか流木、木製品、縄文、弥生、古墳時代の土器類を出土している。試料は旧河川出土一括と112号遺構出土一括の両者に分けられる。すべて弥生時代後期から古墳時代後期と推定されている。

旧河川から出土した大型植物化石は一覧表に示した。なお、112号遺構資料は炭化物を伴っているため、表からは省き、本文中に記載した。

出土個数はトチノキが最も多く、ついでオニグルミとシラカシ近似種を含むアカガシ亜属が多い。トチノキは果実・種子ともに完熟したものだけではなく、未熟なものを比較的多く出土しているため、旧河川流域に生育していたものが堆積した可能性が高い。オニグルミは割跡のあるものと食痕のあるものを含み、出土数も少ないことから、一度採集されたものと陸上堆積したものが二次的に堆積したと考えられる。シラカシ近似種を含むアカガシ亜属は殻斗、果実、幼果を出土し、旧河川付近の斜面に生育したものが堆積したと推定される。

ほかに針葉樹のカヤ、モミ、落葉広葉樹のナラガシワ、ナラガシワ以外のコナラ亜属、モモ、バラ科近似種、フジ属、ムクロジ、カキノキ、エゴノキ、コハクウンボク、マンネンタケ科のキノコを出土した。カヤ、モミは温帯広葉樹林の中に生育する針葉樹である。古墳時代では関東地方でモミの加工材を多く出土する傾向がある(山田, 1993)が、球果の出土例は少ない。モモ、カキノキについては、核、種子の大きさがかなり大きく、食用とされていたものの可能性が高い。ナラガシワは現在では関東平野で見かけることが少ないが、縄文時代以降、関東地方で散点的に出土例がある。

したがって、この時代の甘楽郡周辺では、台地上や斜面に照葉樹のアカガシ亜属と落葉樹のコナラ亜属、温帯性針葉樹のカヤ、モミ、河川付近にトチノキやオニグルミ、エゴノキなどが生育していたと推定される。このように、照葉樹とトチノキが共存した例は、縄文時代の京都北白川追分町遺跡(南木ほか, 1985)などがある。

112号遺構からは炭化したイネの胚乳(完形9、発泡3、破片4)、炭化したオオムギ近似種の胚乳(発泡2)、炭化していないタニソバ果実2、ハナタデ近似種果実10、ヤナギタデ近似種果実3、を出土した。イネ、オオムギ近似種のほかはいずれもタデ属の野生種である。

B 出土大型植物化石の記載

カヤ：種子は下部が膨らんだ紡錘形で表面にはねじれた不規則な筋がある。種皮は薄い堅く、褐色、子葉は可食である。

モミ：球果完形がやや欠損したもので、モミ属は熟すと種子散布のためバラバラになるため、ほぼ完形の出土は珍しい。特徴としてはモミ属の中で球果が最も大きく、種鱗から尖った包鱗先端が著しくはみ出している。種鱗には2個の種子を抱いている。

オニグルミ：内果皮は先端の尖った球形で2本ないしまれに3本の縫合線がある。内果皮は堅く厚く、褐色で表面には不規則な凹凸と筋があり、内側も非常に凹凸がある。子葉は可食である。食痕は齧歯類によりつけられたもので、歯形が残る。割跡は人により叩き石などの硬いもので上下を叩かれた跡で

第V章 分析成果

ある。
 シラカシ近似種：果実は先端の柱頭が欠落しているが、輪状紋が円錐状に突出して、アカガシほどへそが突出していないため、シラカシ近似種とした。
 アカガシ亜属：果実に輪状紋があるが、はっきりした先端の特徴がわからないものをアカガシ亜属とした。シラカシのほか、アカガシ、アラカシ、イチイガシなどがある。単体の輪状紋のある殻斗、幼果もこれにはいる。
 ナラガシワ：殻斗と幼果のみ出土した。殻斗は平たい円形で、鱗で密に覆われ、ミズナラに酷似するが、ミズナラほどごつごつした感じがなく、殻斗の先端がやや内側に曲がる。
 コナラ亜属：果実は先端に輪状紋がなく、コナラ亜属である。しりが丸くなっているため、ナラガシワではない。また、半分よりやや上が太いため、ミズナラではなく、コナラの可能性があるが、この仲間には雑種も多いため、同定はコナラ亜属にとどめた。
 ブナ科：特徴の見いだせない果実の破片をブナ科とした。
 モモ：ほぼ完形の核を1個だけ出土した。レンズ形で厚く堅く、2本の縫合線があり、表面には深い流れる溝と穴がある。周囲の果肉は可食である。
 バラ科近似種：果実は球形で果皮は薄く柔らかく光沢があり、腺点がある。
 フジ属：さやの欠けたものを出土した。下端が細く長くのび、表面には斜めの筋が入る。
 トチノキ：果実の完形は厚くやや柔らかい果皮3片が球形になっており、褐色で表面はざらつく。幼果は縦長で先端はまだ尖っている。種子完形は楕円球形か一方がそぎ落とされたような形で、上半分は黒色で光沢があり、拡大すると指紋のような模様がある。下半分は平滑で褐色、光沢はない。上下の境にはやや膨らんだ発芽口がある。種皮はやや堅く薄い。種子完形欠損は人為的ではなく、圧力によるものと思われる。幼種子は形態は同じである。子葉は灰汁抜きして食用とされる。
 ムクロジ：種子は鈍い光沢のある黒色で、種皮はやや厚く堅く、球形で一方に一文字状のへそがある。図版の種子はへその部分に果皮の一部が残存している。
 カキノキ：種子は偏楕円形で扁平、黒褐色で薄く柔らかい。果実は可食である。
 エゴノキ：内果皮の欠損したものを出土した。卵形で下端が一部欠けたようなへそがある。内果皮はやや厚く堅く、縦に3本溝があり、表面は褐色でややざらつく。
 コハクウンボク：内果皮はエゴノキに似るが、表面は褐色で鈍い光沢があり、3本の溝と不明瞭な3本の稜がある。
 マンネンタケ科：木の幹に付く堅く平たいキノコで年毎に肥大する。
 イネ：炭化した胚乳を出土した。
 オオムギ近似種：炭化、焼け膨れした胚乳を出土した。下端に胚の穴があるが、表面が焼けただけであるため、近似種とした。
 タニソバ：果実は2面形で表面にやや粗い網目模様がある。
 ハナタデ近似種：果実は3面形で平面の中央がややへこみ、光沢がある。
 ヤナギタデ近似種：果実は2面形でやや光沢があり、大変細かい網目がある。

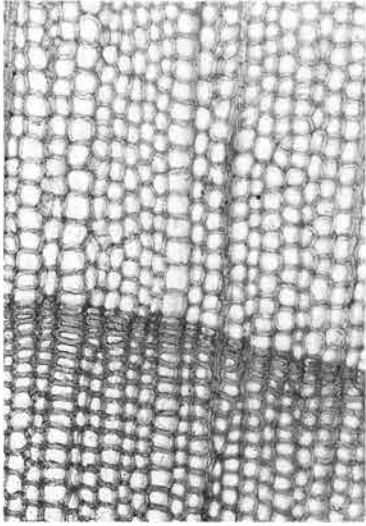
引用文献

南木睦彦・山尾正之・粉川昭平.1985「第3章北白川追分町遺跡出土の種別類」『京都大学埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡—』。京都大学埋蔵文化財センター、113-138。
 山田昌久.1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』、242p。

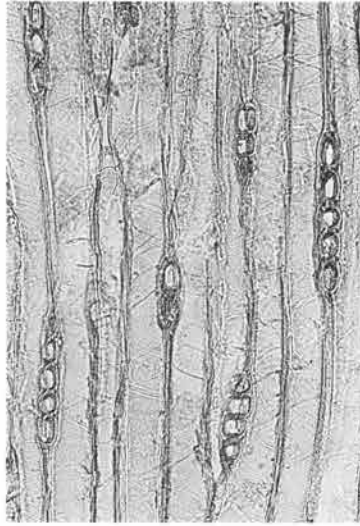
天引狐崎遺跡の大型植物化石一覧表（破片はf）

分類群名出土部位	数量	分類群名出土部位	数量	分類群名出土部位	数量
カヤ種子	4 f 2	アカガシ亜属果実	29 f 7	トチノキ果実完形	113
モミ球果完形欠損	1	殻斗	41	果実破片	850
オニグルミ内果皮	21 f 4	幼果	27	幼果	142
完形食痕	7	ナラガシワ 殻斗	6	種子完形	484
完形割跡	2	幼果	4	種子完形欠損	436
半分	109	コナラ亜属 果実	21 f 15	種子破片	958
半分食痕	5	ブナ科 果実	f 18	幼種子	126
半分割跡	9	モモ 核	1	ムクロジ種子	27
シラカシ近似種果実	20 f 3	バラ科近似種果実	1	カキノキ種子	1
殻斗と果実	2	フジ属 さや	f 2	エゴノキ内果皮欠損	1
				コハクウンボク内果皮	1
				マンネンタケ科	1

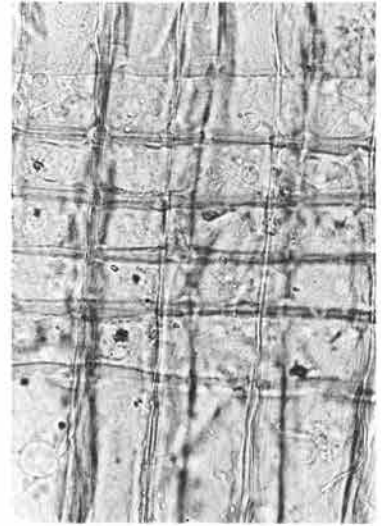
図版1 出土木材樹種の顕微鏡写真



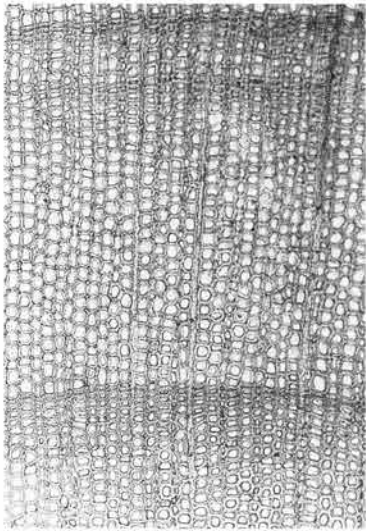
1a. カヤ (横断面)
実測170 bar:0.2mm



1b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



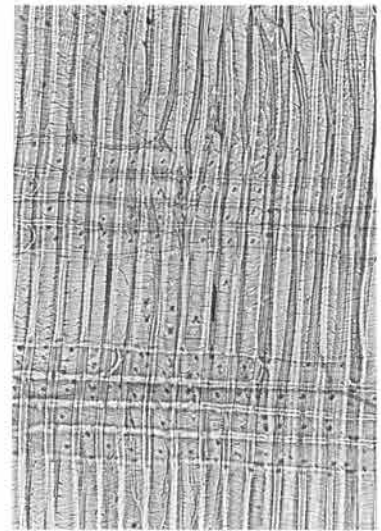
1c. 同 (放射断面) bar:0.05mm



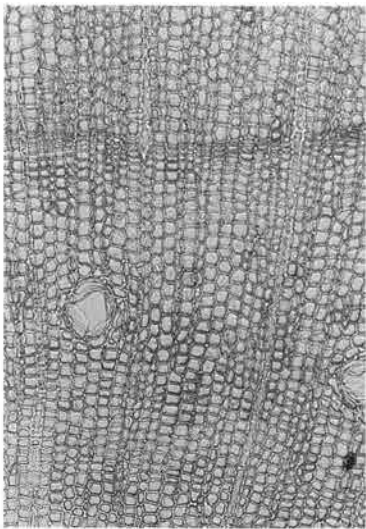
2a. イヌガヤ (横断面)
参考652 bar:0.2mm



2b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



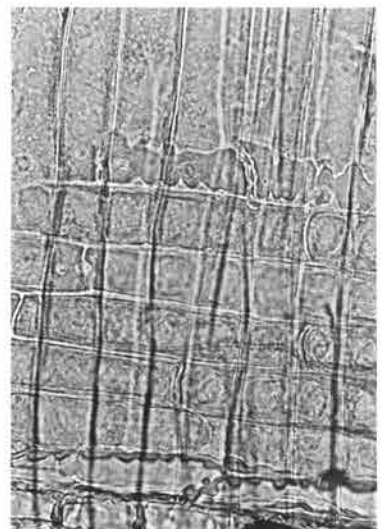
2c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



3a. アカマツ (横断面)
実測1 bar:0.2mm

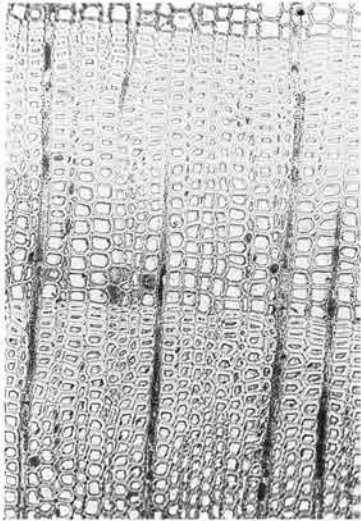


3b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



3c. 同 (放射断面) bar:0.05mm

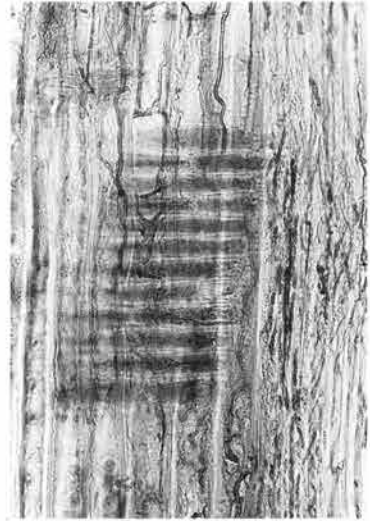
図版2 出土木材樹種の顕微鏡写真



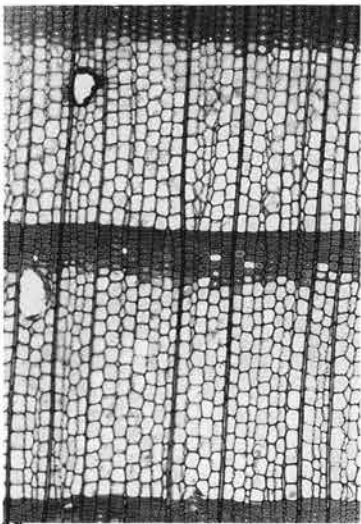
4a.モミ属 (横断面)
実測204 bar:0.2mm



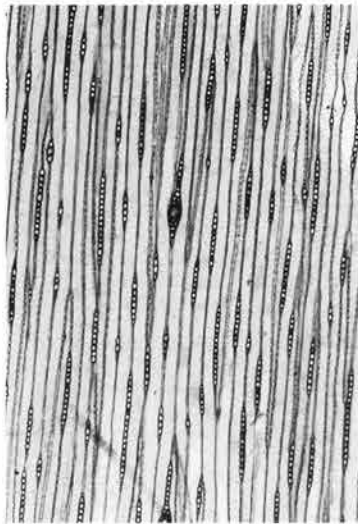
4b.同 (接線断面) bar:0.2mm



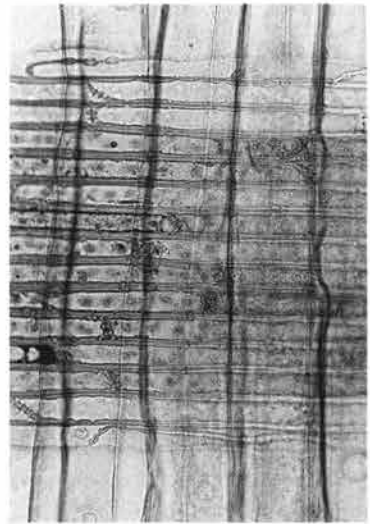
4c.同 (放射断面) bar:0.1mm



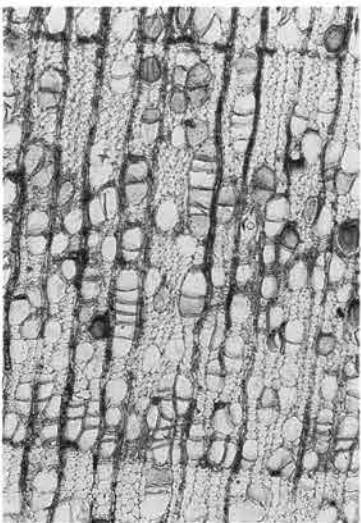
5a.トウヒ属 (横断面)
参考2130 bar:0.5mm



5b.同 (接線断面) bar:0.5mm



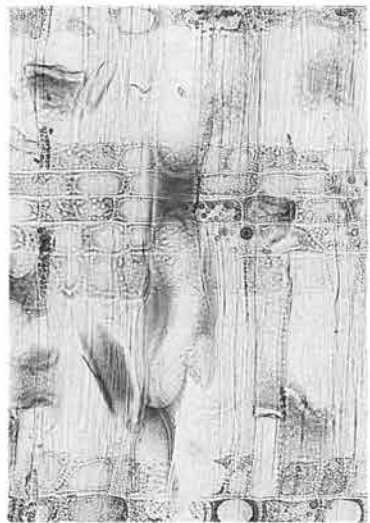
5c.同 (放射断面) bar:0.1mm



6a.ヤナギ属 (横断面)
参考187 bar:0.2mm

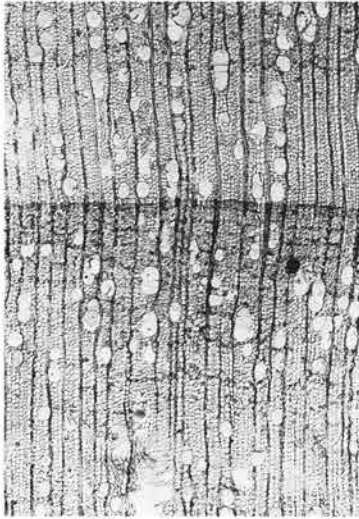


6b.同 (接線断面) bar:0.2mm

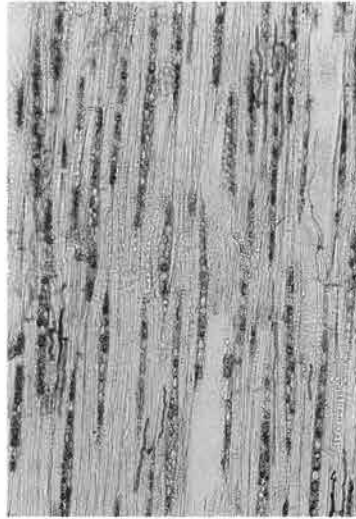


6c.同 (放射断面) bar:0.1mm

図版3 出土木材樹種の顕微鏡写真



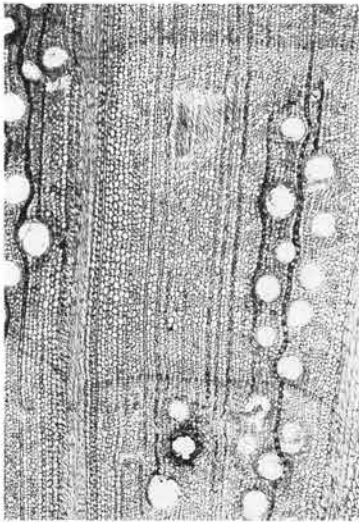
7a.アサダ (横断面)
実測1493 bar:0.5mm



7b.同 (接線断面) bar:0.2mm



7c.同 (放射断面) bar:0.2mm



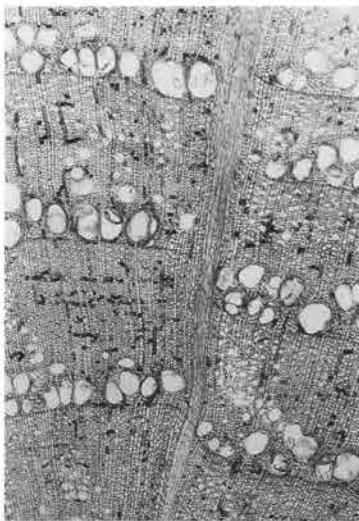
8a.アカガシ亜属 (横断面)
実測180 bar:0.5mm



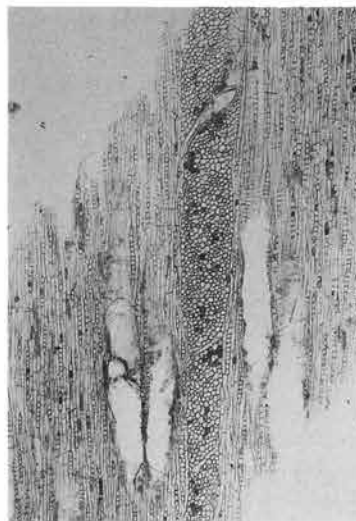
8b.同 (接線断面) bar:0.2mm



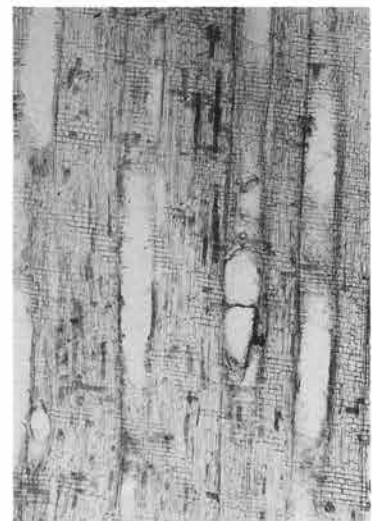
8c.同 (放射断面) bar:0.2mm



9a.コナラ節 (横断面)
参考93 bar:0.5mm

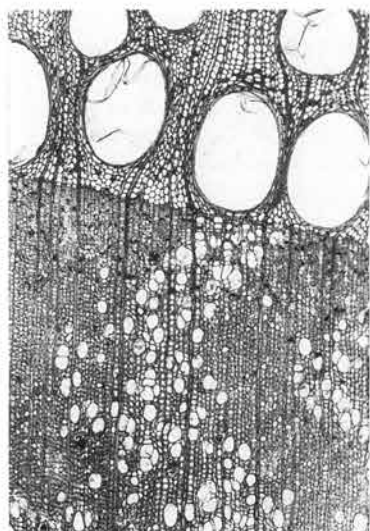


9b.同 (接線断面) bar:0.5mm



9c.同 (放射断面) bar:0.5mm

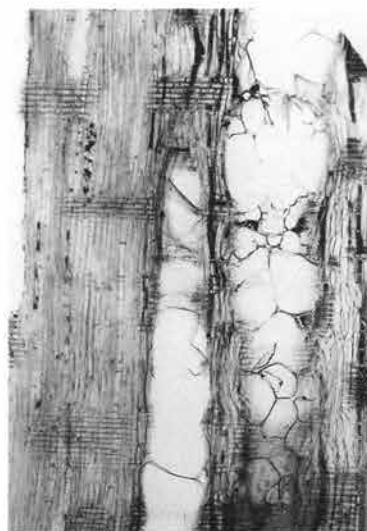
図版4 出土木材樹種の顕微鏡写真



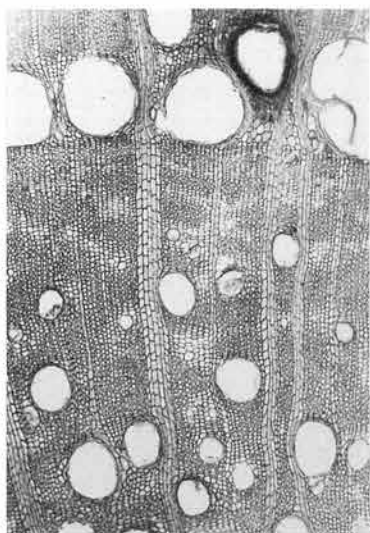
10a. クリ (横断面)
実測11 bar:0.5mm



10b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



10c. 同 (放射断面) bar:0.5mm



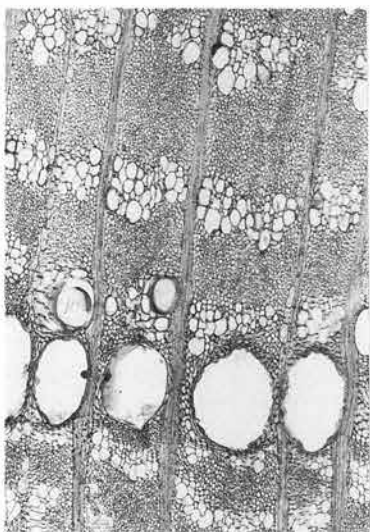
11a. ニレ属 (横断面)
参考1404 bar:0.5mm



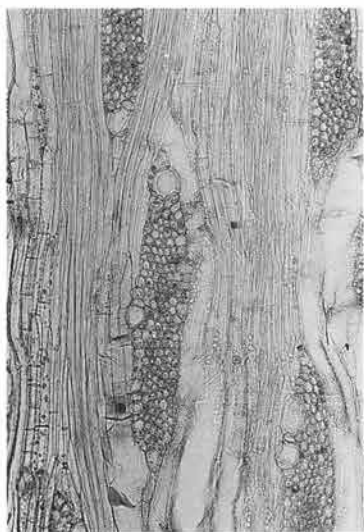
11b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



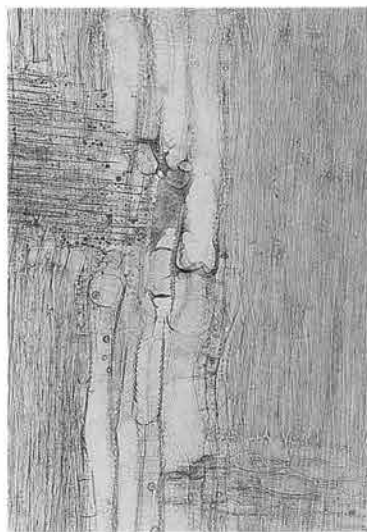
11c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



12a. ケヤキ (横断面)
実測744 bar:0.5mm

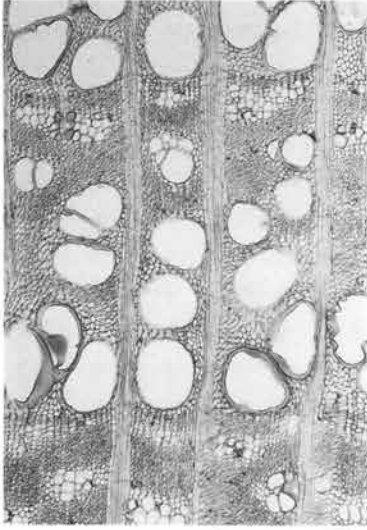


12b. 同 (接線断面) bar:0.2mm

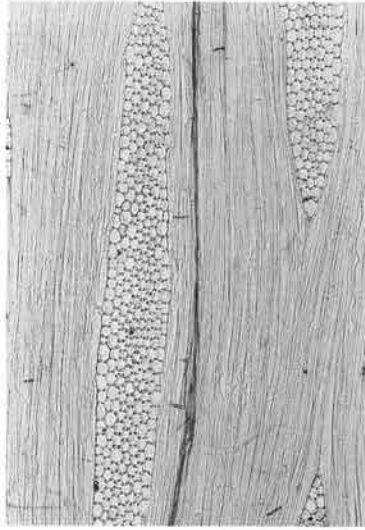


12c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

図版5 出土木材樹種の顕微鏡写真



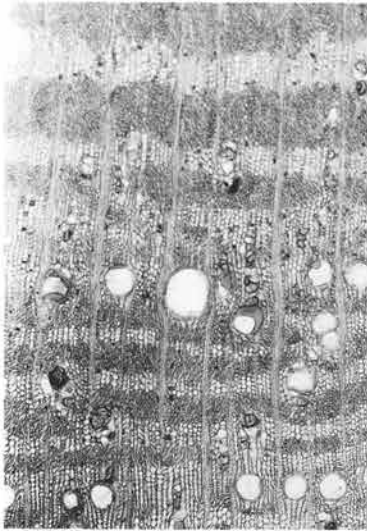
13a. エノキ属 (横断面)
実測468 bar:0.5mm



13b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



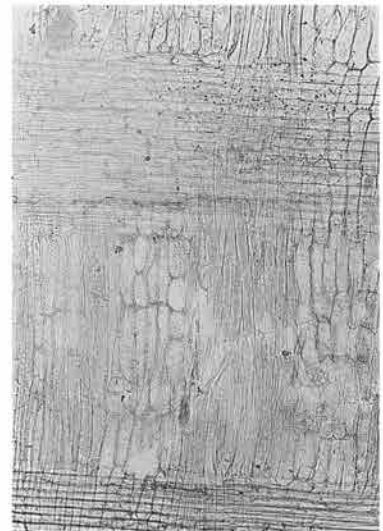
13c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



14a. ムクノキ (横断面)
参考3 bar:0.5mm



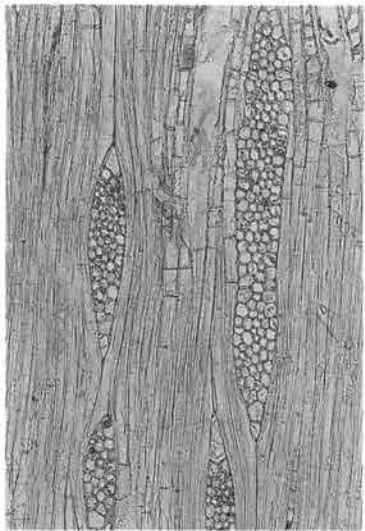
14b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



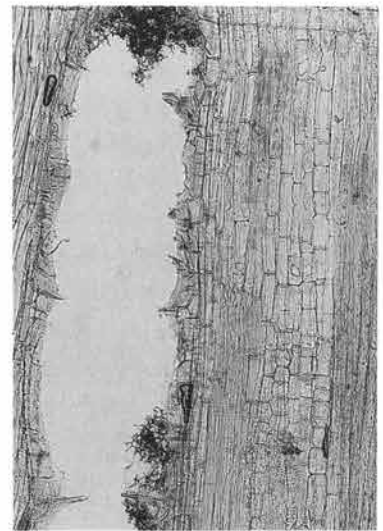
14c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



15a. ヤマグワ (横断面)
実測14 bar:0.5mm

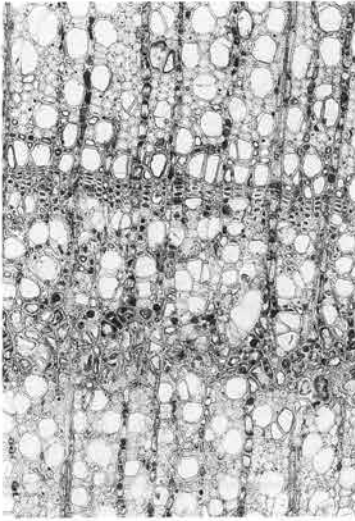


15b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



15c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

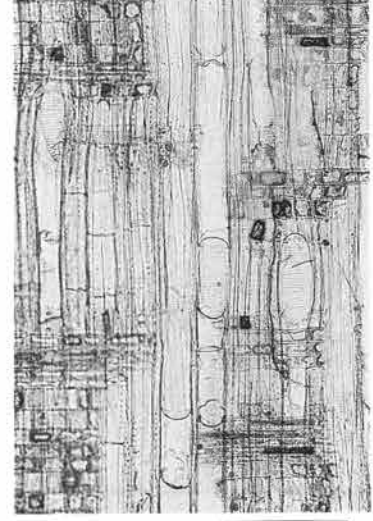
図版6 出土木材樹種の顕微鏡写真



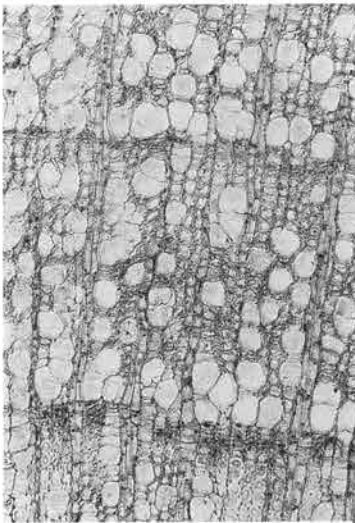
16a. カツラ (横断面)
参考649 bar:0.2mm



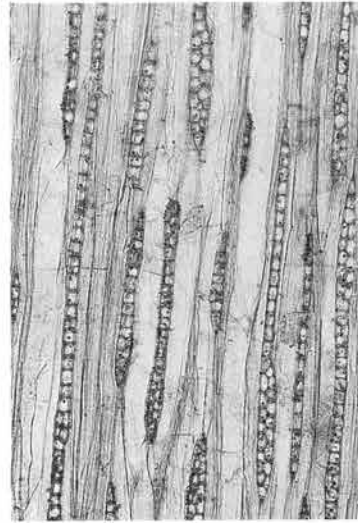
16b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



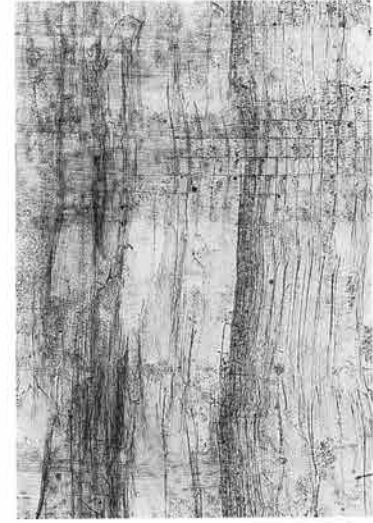
16c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



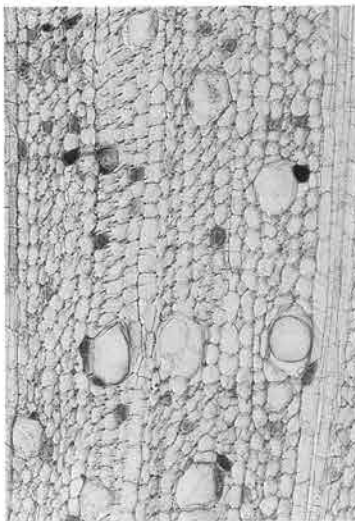
17a. モクレン属 (横断面)
参考909 bar:0.2mm



17b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



17c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



18a. クスノキ (横断面)
参考587 bar:0.2mm

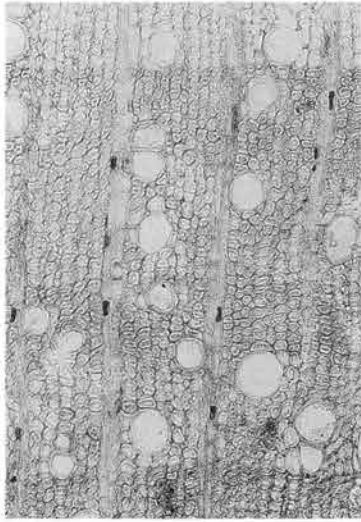


18b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



18c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

図版7 出土木材樹種の顕微鏡写真



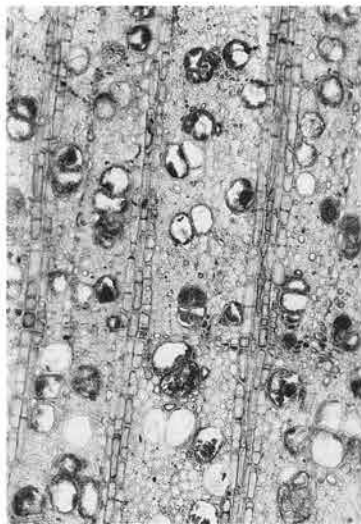
19a. クロモジ属 (横断面)
実測192 bar:0.2mm



19b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



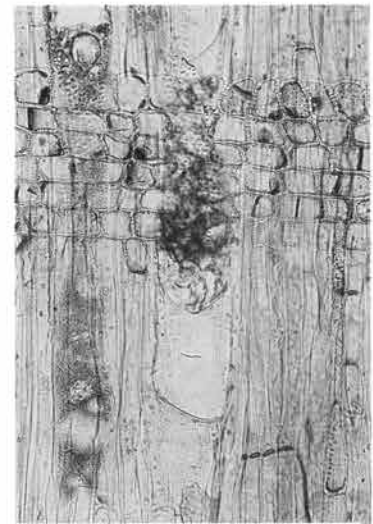
19c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



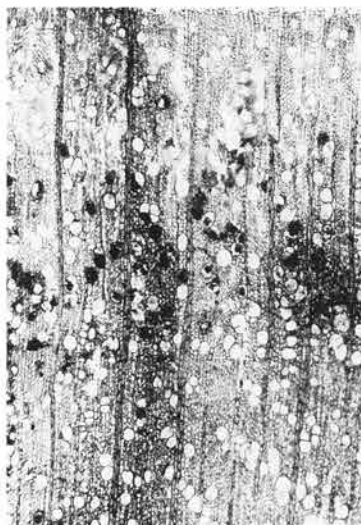
20a. ヤマザクラ (横断面)
参考127 bar:0.2mm



20b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



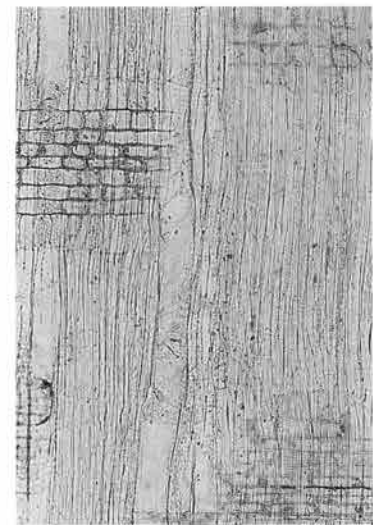
20c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



21a. サクラ属 (横断面)
実測1367 bar:0.5mm

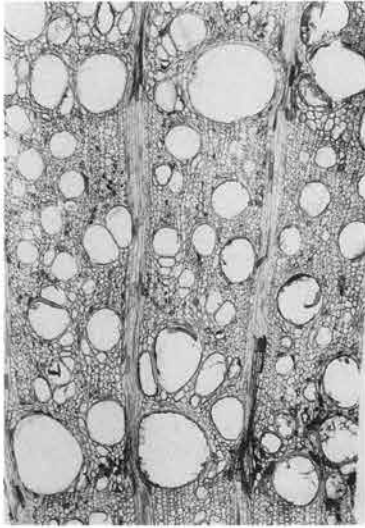


21b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



21c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

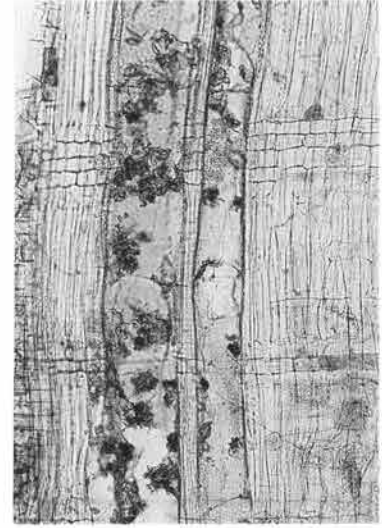
図版 8 出土木材樹種の顕微鏡写真



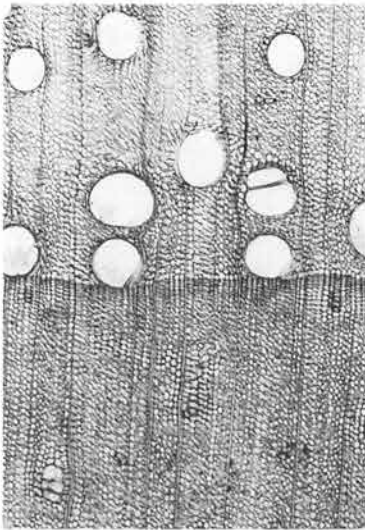
22a. パラ属 (横断面)
参考188 bar:0.5mm



22b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



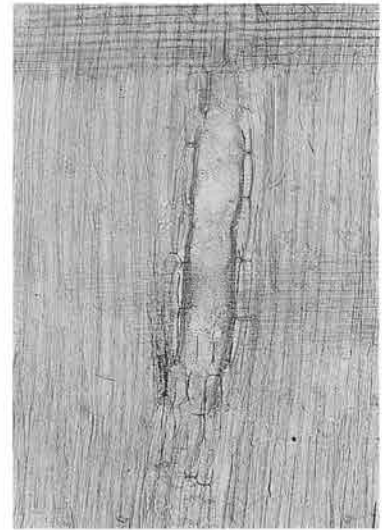
22c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



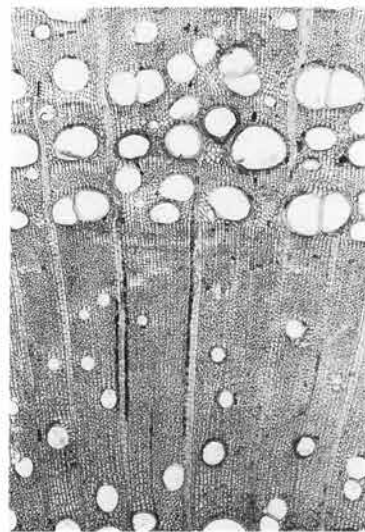
23a. ネムノキ (横断面)
参考1326 bar:0.5mm



23b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



23c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



24a. イヌエンジュ (横断面)
参考64 bar:0.5mm

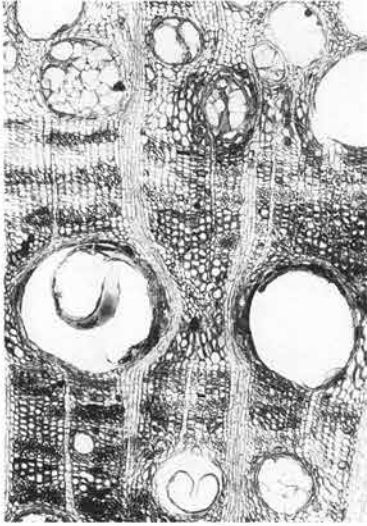


24b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



24c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

図版9 出土木材樹種の顕微鏡写真



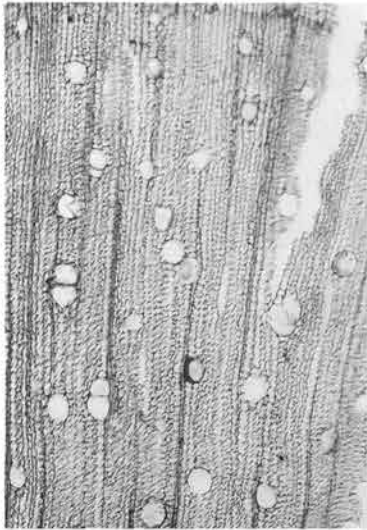
25a. フジ (横断面)
参考84 bar:0.2mm



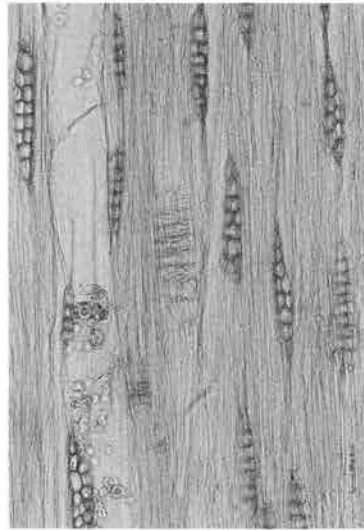
25b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



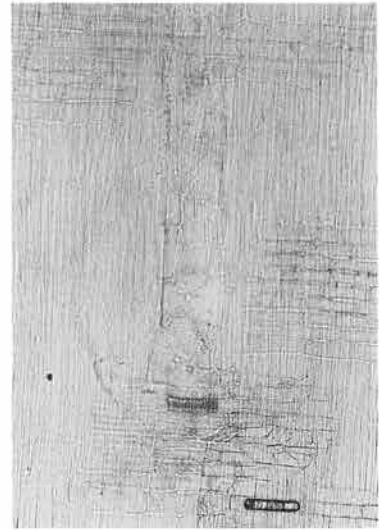
25c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



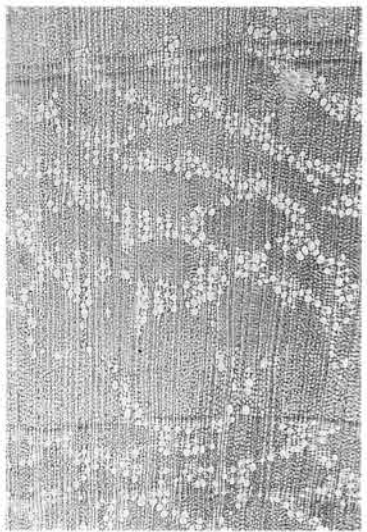
26a. サンショウ (横断面)
参考485 bar:0.5mm



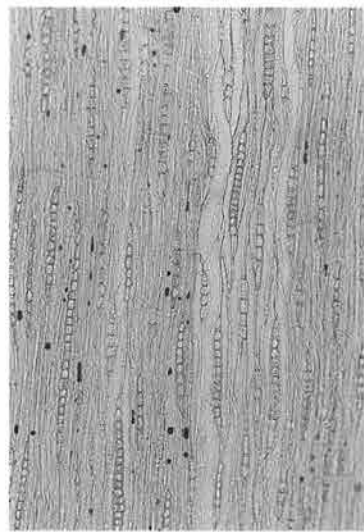
26b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



26c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



27a. コクスギ (横断面)
実測104 bar:0.5mm

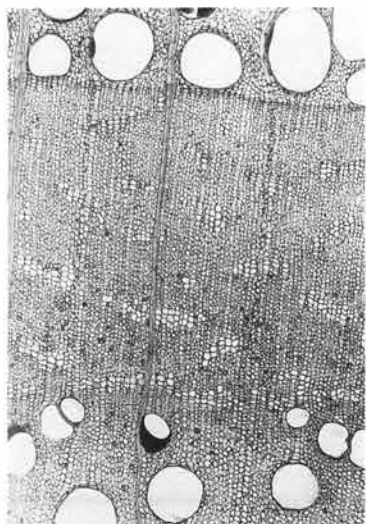


27b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



27c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

図版10 出土木材樹種の顕微鏡写真



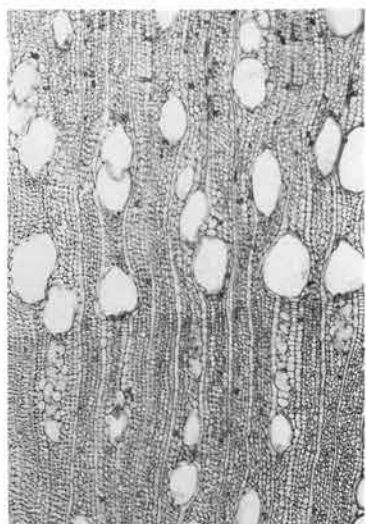
28a.キハダ (横断面)
参考819 bar:0.5mm



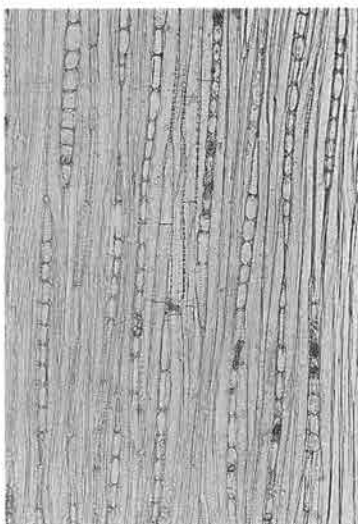
28b.同 (接線断面) bar:0.2mm



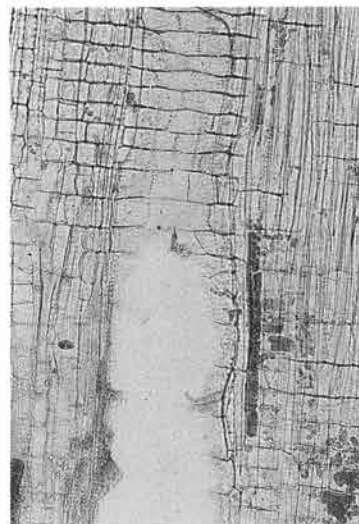
28c.同 (放射断面) bar:0.1mm



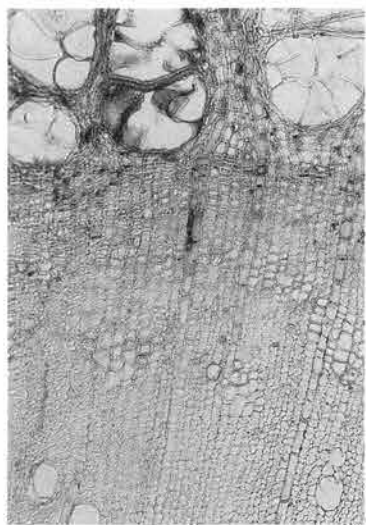
29a.アカメガシワ (横断面)
参考380 bar:0.5mm



29b.同 (接線断面) bar:0.2mm



29c.同 (放射断面) bar:0.2mm



30a.ヌルデ (横断面)
参考112 bar:0.2mm

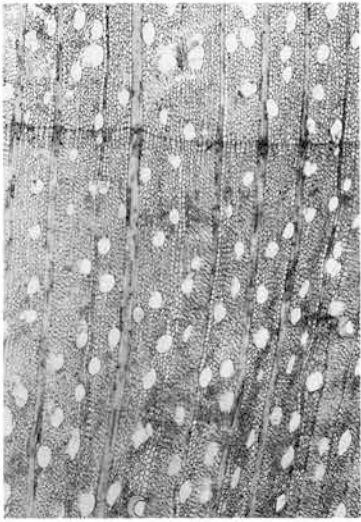


30b.同 (接線断面) bar:0.2mm

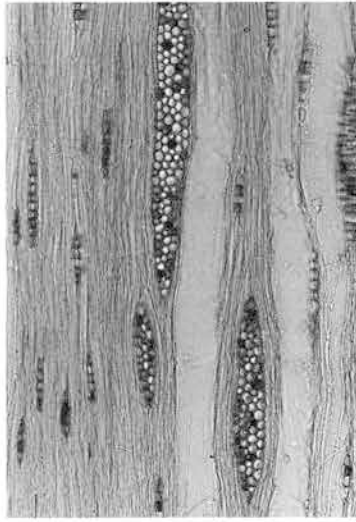


30c.同 (放射断面) bar:0.2mm

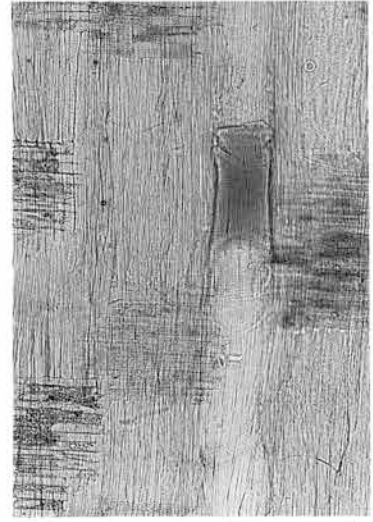
図版11 出土木材樹種の顕微鏡写真



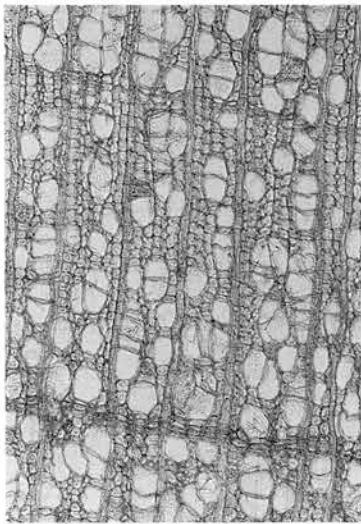
31a. カエデ属 (横断面)
実測986 bar:0.5mm



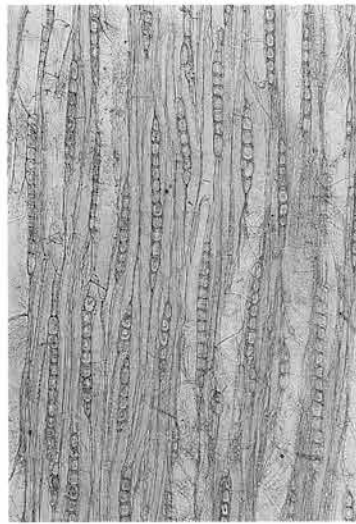
31b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



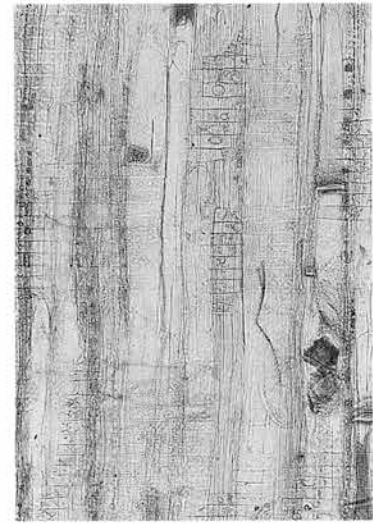
31c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



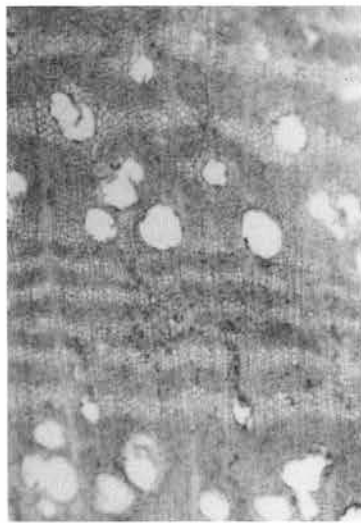
32a. トチノキ (横断面)
実測159 bar:0.2mm



32b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



32c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



33a. ムクロジ (横断面)
実測1006 bar:0.5mm

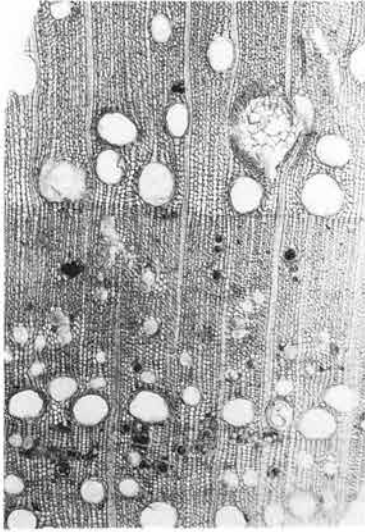


33b. 同 (接線断面) bar:0.2mm

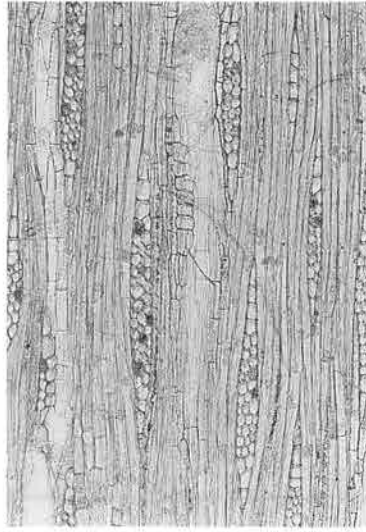


33c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

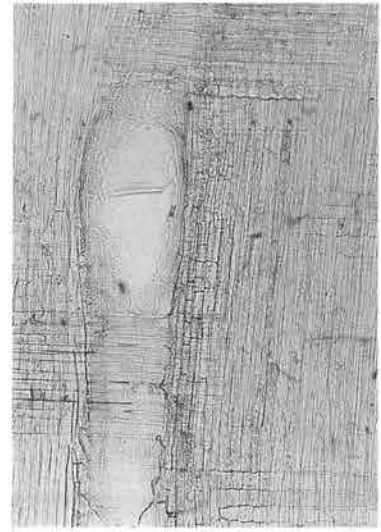
図版12 出土木材樹種の顕微鏡写真



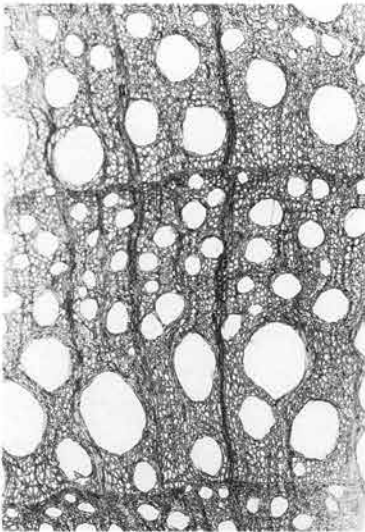
34a. ケンポナシ属 (横断面)
実測1369 bar:0.5mm



34b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



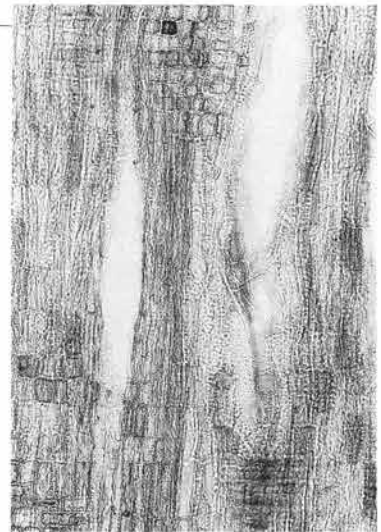
34c. 同 (放射断面) bar:0.5mm



35a. マタタビ属 (横断面)
実測79 bar:0.5mm



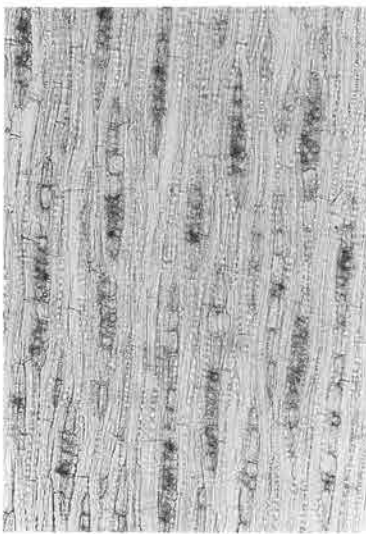
35b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



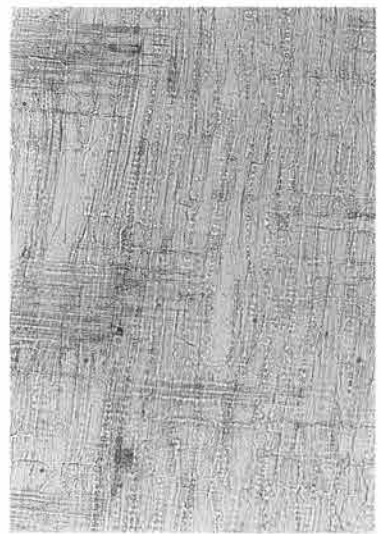
35c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



36a. ヤブツバキ (横断面)
実測191 bar:0.5mm

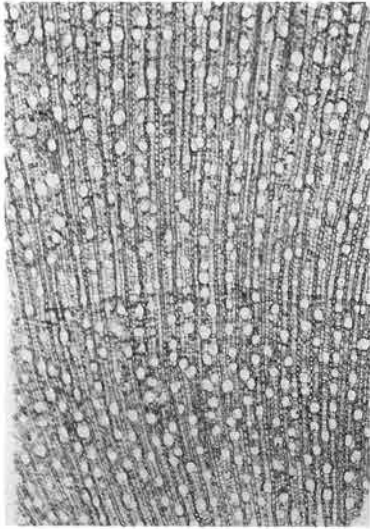


36b. 同 (接線断面) bar:0.2mm

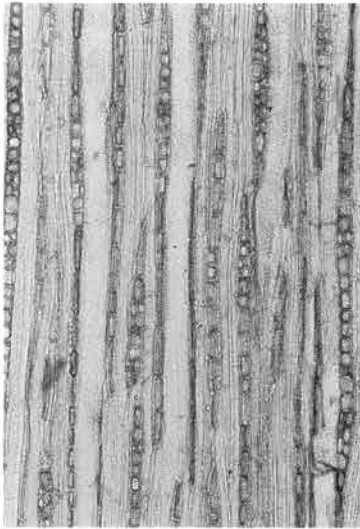


36c. 同 (放射断面) bar:0.1mm

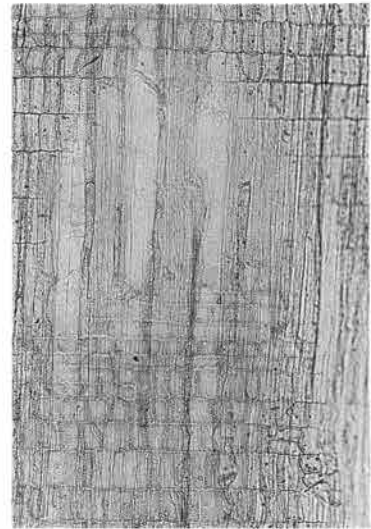
図版13 出土木材樹種の顕微鏡写真



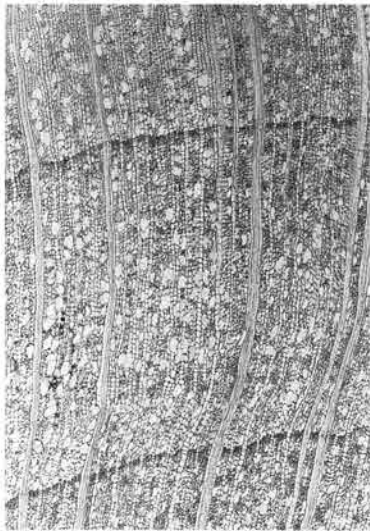
37a. サカキ (横断面)
参考474 bar:0.5mm



37b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



37c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



38a. ミズキ (横断面)
参考437 bar:0.5mm



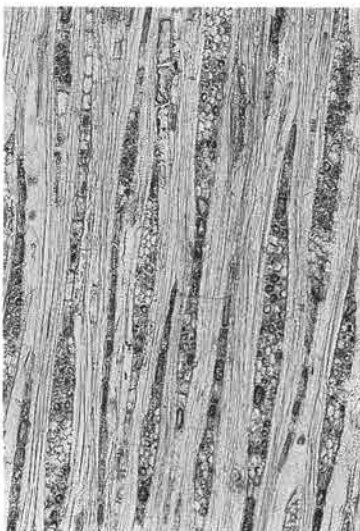
38b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



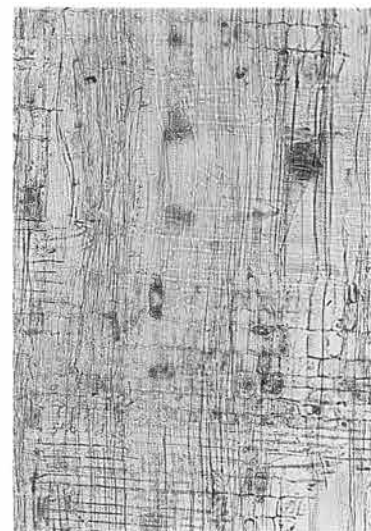
38c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



39a. クマノミズキ類 (横断面)
参考426 bar:0.5mm

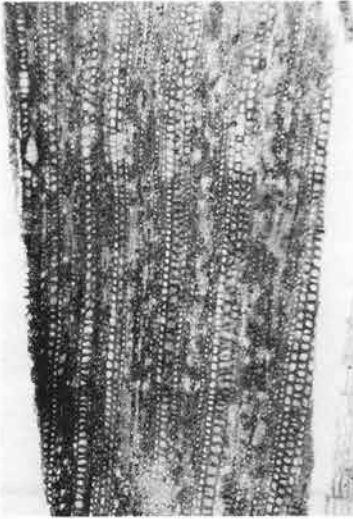


39b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



39c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

図版14 出土木材樹種の顕微鏡写真



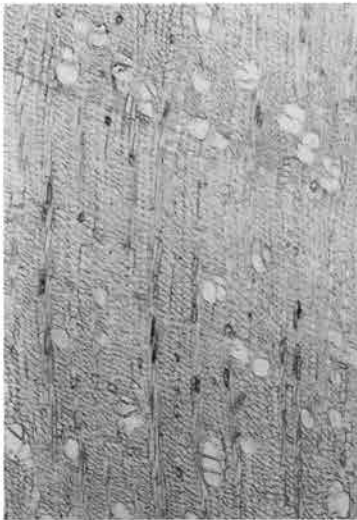
40a. アオキ (横断面)
実測175 bar:0.5mm



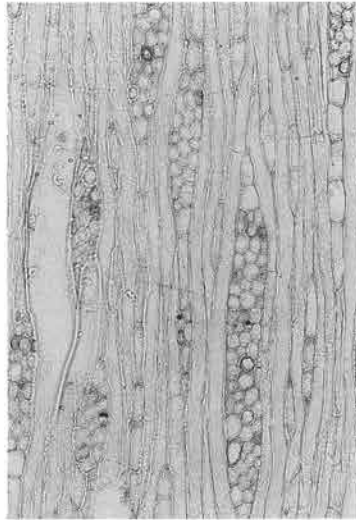
40b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



40c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



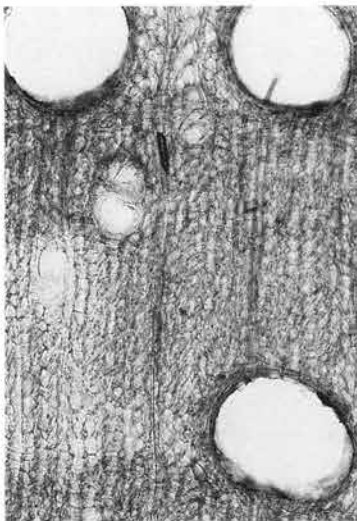
41a. エゴノキ属 (横断面)
参考494 bar:0.5mm



41b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



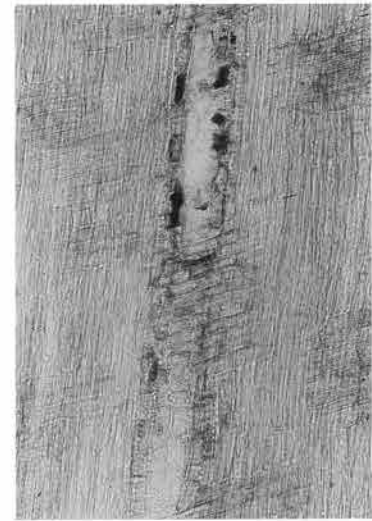
41c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



42a. トネリコ属 (横断面)
実測2125 bar:0.2mm

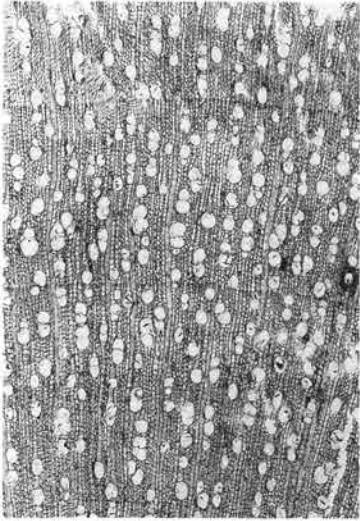


42b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



42c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

図版15 出土木材樹種の顕微鏡写真



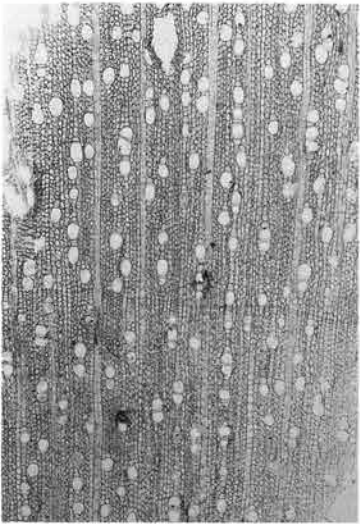
43a. サワフタギ類 (横断面)
参考871 bar:0.2mm



43b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



43c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



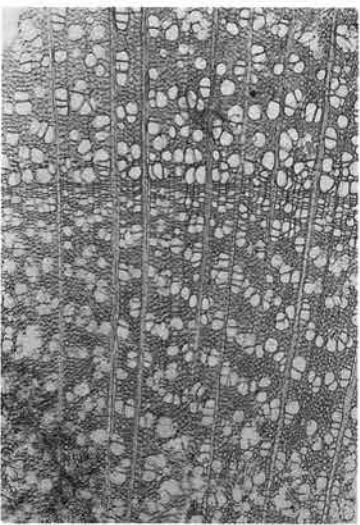
44a. ムラサキシキブ属 (横断面)
参考349① bar:0.5mm



44b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



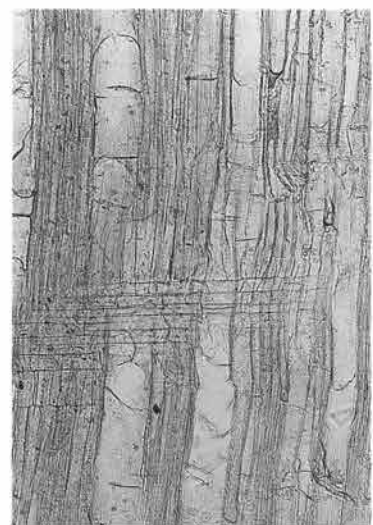
44c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



46a. ニワトコ (横断面)
実測123 bar:0.5mm

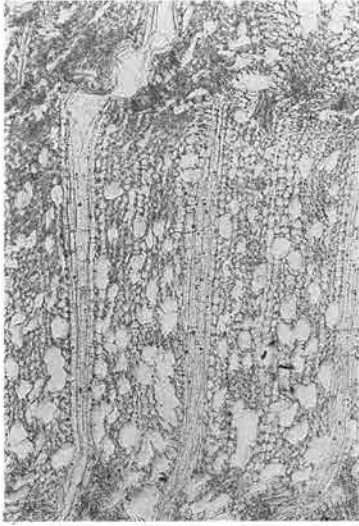


46b. 同 (接線断面) bar:0.2mm

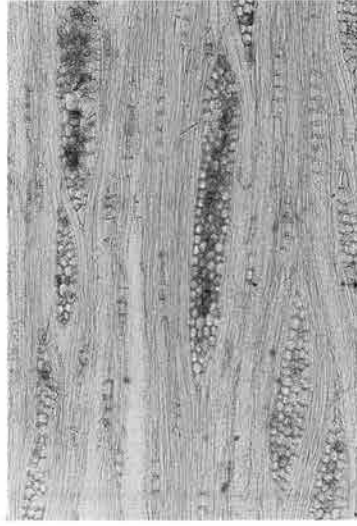


46c. 同 (放射断面) bar:0.5mm

図版16 出土木材樹種の顕微鏡写真



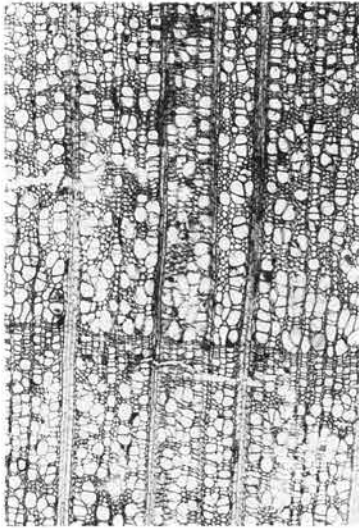
47a. 散孔材A (横断面)
参考835 bar:0.2mm



47b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



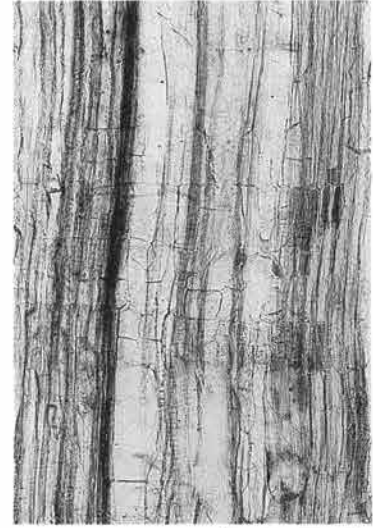
47c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



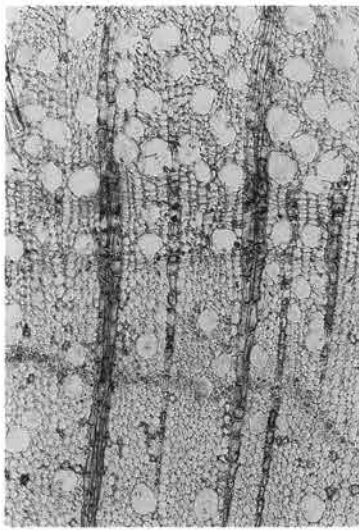
48a. 散孔材B (横断面)
参考976 bar:0.5mm



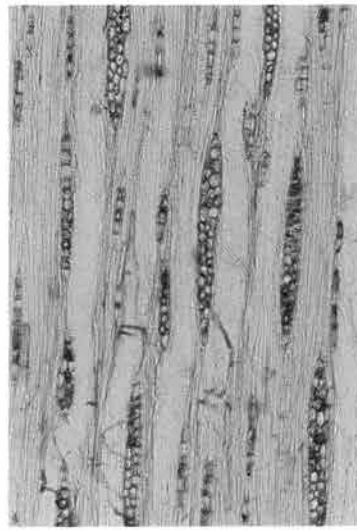
48b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



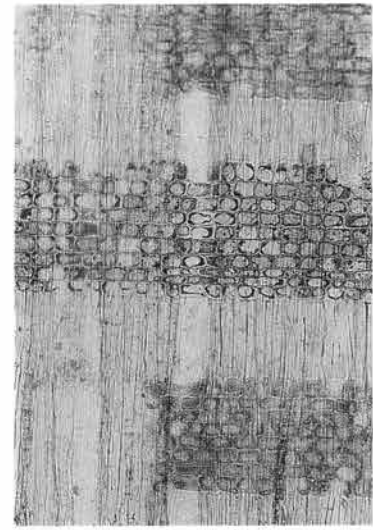
48c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



49a. 散孔材C (横断面)
参考1306 bar:0.2mm

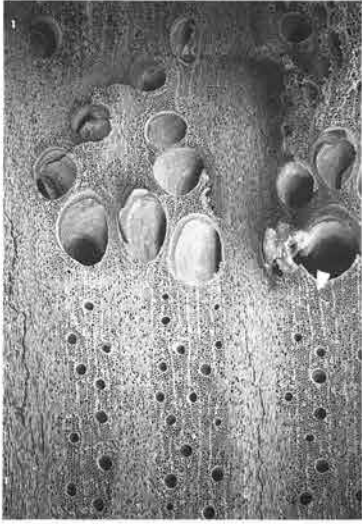


49b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



49c. 同 (放射断面) bar:0.2mm

図版17 出土木材樹種の顕微鏡写真



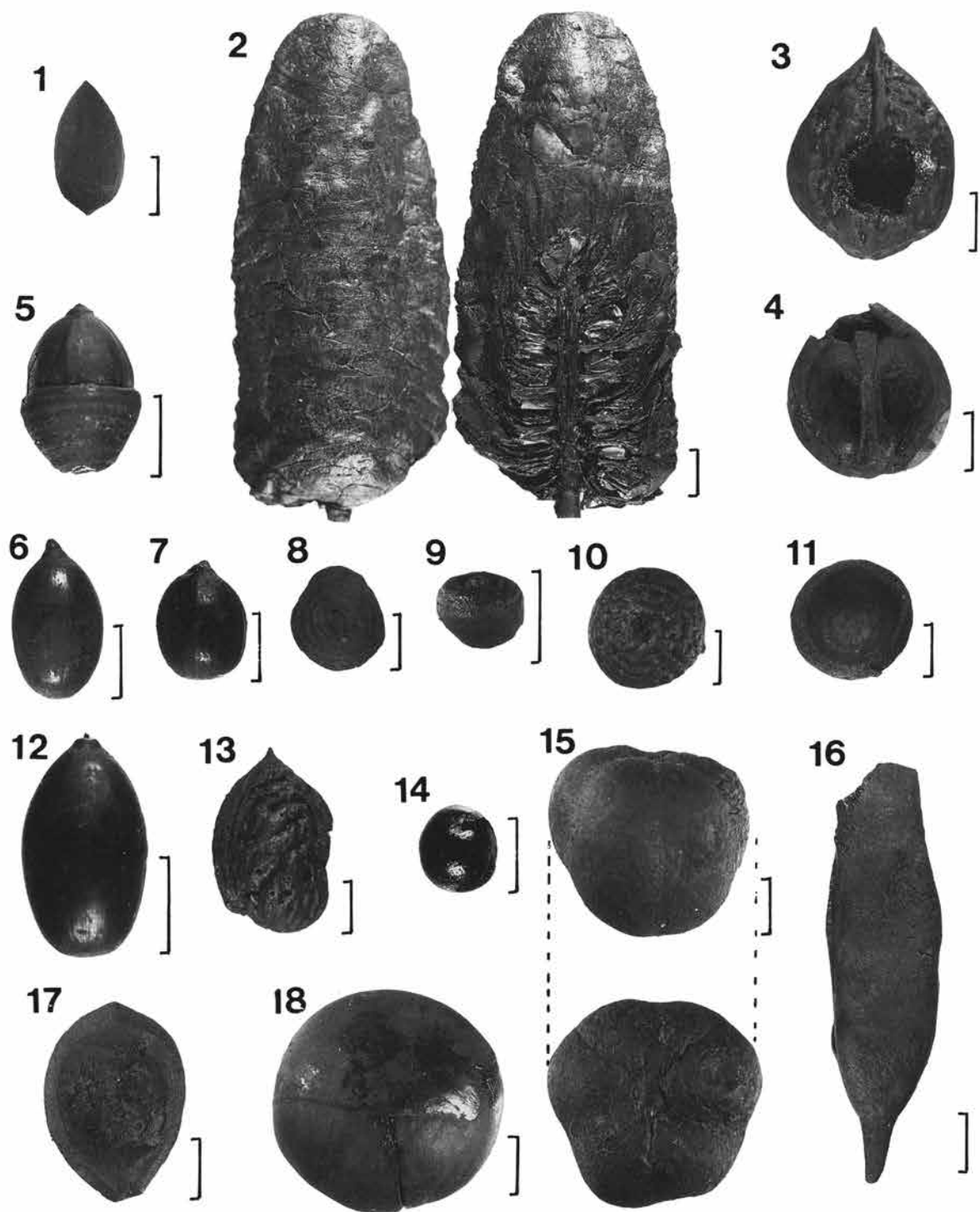
50a. クスギ節 (横断面)
141号遺構 No20 bar:1mm



50b. 同 (接線断面) bar:1mm

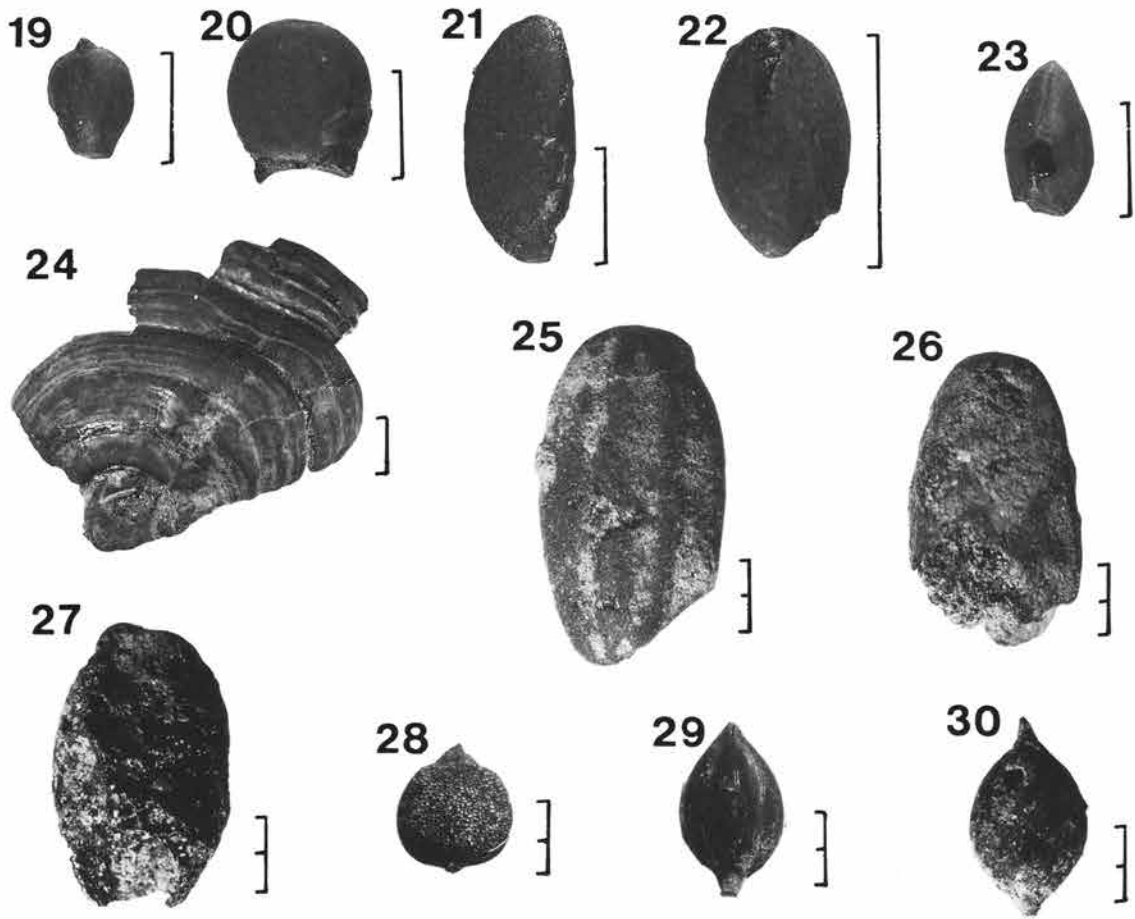


50c. 同 (放射断面) bar:1mm



図版1 天引狐崎遺跡の大型植物化石その1 (スケールは1 cm)

1. カヤ、種子 (No. 32) 2. モミ、球果 (No. 4) 3. オニグルミ、内果皮完形食痕 (No. 41) 4. オニグルミ、内果皮半分割跡 (No. 41) 5. シラカシ近似種、果実と殻斗 (No. 32) 6. 7. アカガシ亜属、果実 (No. 32) 8. アカガシ亜属、殻斗 (No. 42) 9. アカガシ亜属、幼果 (No. 32) 10. 11. ナラガシワ、殻斗 (No. 42) 12. コナラ亜属、果実 (No. 26) 13. モモ、核 (No. 42) 14. バラ科近似種、果実 (No. 32) 15. トチノキ、果実 (No. 32) 16. フジ属、さや破片 (No. 32) 17. トチノキ、果実破片 (No. 32) 18. トチノキ、種子 (No. 32)



図版2 天引狐崎遺跡の大型植物化石その2 (スケールは1 cm、25-30は1 mm)

19.トチノキ、幼果(No.52) 20.ムクロジ、種子(No.30) 21.カキノキ、種子(No.2390) 22.エゴノキ、内果皮(No.32) 23.コハクウンボク、内果皮(No.52) 24.マンネンタケ科(No.3) 25.イネ、炭化胚乳(112) 26.イネ、炭化焼け膨れ胚乳(112) 27.オオムギ近似種、炭化焼け膨れ胚乳(112) 28.タニソバ、果実(112) 29.ハナタデ近似種、果実(112) 30.ヤナギタデ近似種、果実(112)

第Ⅵ章 特論

1 弥生前期土器とその細別

設楽博己（国立歴史民俗博物館）

A 天引狐崎遺跡の弥生前期土器

天引狐崎遺跡出土の弥生土器のうち、前期に比定できるものを抽出して分類し、その特徴を明確にした後、他の遺跡から出土した土器と比較しつつ、系譜と編年の位置づけについて検討する。

壺形土器 A類： 1 (0049) は口縁がゆるやかに外反し、やや太い頸の壺。口縁端部は面とりされているが、下端がふくれ気味に調整されることで、端面が若干凹む特徴をもつ。

外面には3本一対の棒をたばねたような工具で口縁端から縦に沈線を引き、頸部に同じ工具で、縦線をまたいで横方向に沈線を施している。内面には口縁部に、同じ工具で弧状文をつける。やや大きい長石を多く含んでおり、黄褐色。

B類： 2 (0606) は棒をたばねたような工具により、条痕文を施した壺の胴部。条痕は、かろく羽状をなす程度で、羽状の一方は水平に近く、もう一方の角度もゆるい。長石を多く含む。器面は黄色みをおびた白褐色で、断面が黒い。

3 (0380) は胴上部に波状文を加えたもの。3本一束の棒状工具で、波の振幅は大きい。

C類： 4 (0021) は、かろく外反する口縁と太い頸をもつ壺で、口縁に指頭による大ぶりの押捺のある突帯文をめぐらす。口縁は端部近くが厚く仕上げられ、端面はやや内傾するが平らである。突帯の下にはカーブを描いた条痕文をつけているが、条痕は2と異なってやや細かく浅い。赤褐色。

6 (0260) はこうした壺の胴部である。横方向の細密条痕を施すが、頸部に近い部分はそれが希薄である。赤みをおびた暗茶褐色。

5 (0081) は、ゆるく直線状に外反する壺の口縁部破片。全形は不明だが、胴が軽くふくらむ、頸のやや太い壺だろうか。内外面ともに、ケズリ痕を残す。口縁端面に指頭の押捺を加えている。橙褐色。

25 (0282) は底部であり、棒束状工具による条痕文をつけたもの。

甕形土器 胴部に屈曲をもつ煮沸土器を、便宜的に甕形土器としておく。

A類： 7 (0593) は頸部が短く、胴部がゆるやかにふくらむ甕。頸胴界に段をもつ。胴部の地文に単節LR縄文を施しているが、それはおそらく底部にまで及ぶ。胴部の上方には、深く太く直線的な沈線で変形工字文をしっかりと描く。上から二本目の沈線を分断して抉りを入れる。その両わきに粘土を盛り上げて、粒をつくるが、粒の外側の沈線部分と、内側の抉り部分では、抉りの方を深く彫刻しているようである。三本目と四本目の線により、抉りの下端を頂点とする三角形を描くが、三本目の線の傾斜はゆるく、したがって三角形もきわめて扁平である。つまり、この変形工字文の文様帯の幅は、器高に対して狭いことが予想される。橙褐色。

B類： 7と同じような器形だが、口縁がより長いとおもわれるのが、8～11である。11以外は細密条痕を地文とする。いずれも胴部上方に沈線で文様を描くが、二種類ある。

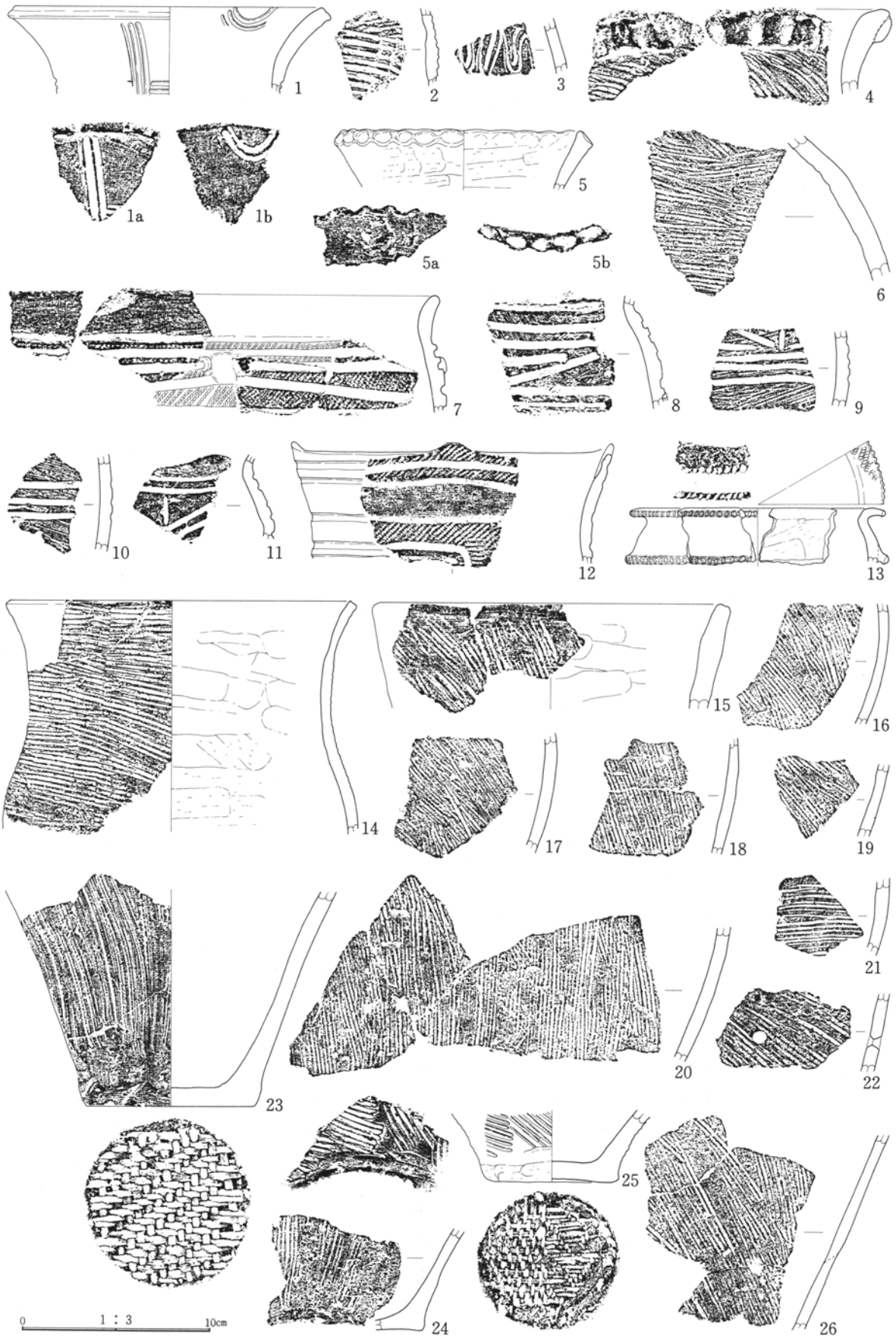


图1 天引狐崎遺跡出土 弥生前期土器(1)

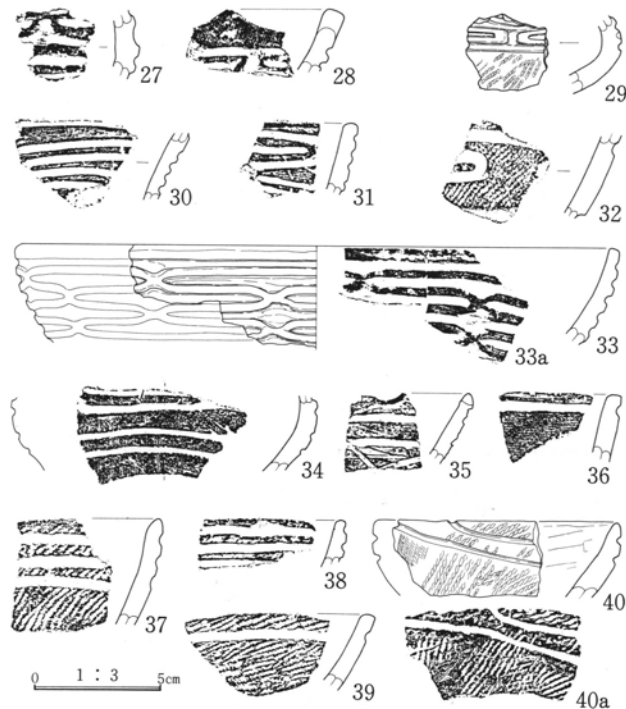


図2 天引狐崎遺跡出土 弥生前期土器(2)

B1類の8(0581)は、太い沈線によって関東形の変形工字文⁽¹⁾をしっかりと描いている。上位二本と下位三本の線を分断して挟りを入れ、その左右に粘土粒を盛り上げている。7と同じく、粒の左右よりも挟りの方が深くシャープに挟られているようである。三角形を構成する斜線や、三角形の底辺内側に加えた補助線の止め方も粘土が盛り上がるようにしっかりと止めており、全体に文様が立体的である。頸部と胴部の境を削ることで、胴部を浮き立たせているが、そのケズリは沈線風である。暗褐色で焼きしまっている。

これに対してB2類の9～11の沈線は8よりも浅く細く、9(0224)の沈線の止め方も力強さにかける。11(0071)の上位の線は二本となり、補助線がなくなっている。10(0484)は暗赤褐色。

12(0019)は波状口縁。口縁部と胴部に縄文帯をもち、頸部の無文帯の沈線内側部分を削ることで、それぞれの縄文帯を立体的に仕上げる。口縁に一条の沈線文、胴部には長方形の沈線文を描き、内側の縄文を磨り消す。砂粒多く、ざらつく。黄味をおびた黒褐色。

C類： 14(0020)は、口縁がゆるく開き、胴部がよく張る甕。口縁端面は面とりしてなでている。全面、棒束状工具により横方向の条痕文を施す。砂粒は少なく、暗灰褐色。

D類： 13(0482)は、二条の刻目突帯をもつ小型の甕。口縁の突帯は、口縁を鐳状に突出させて口縁と一体的につくりだす。胴部のもっとも張り出したところに突帯を貼り付け、口縁端部と突帯の上に刻みを加える。頸部はナデ調整され、突帯の上のやや強いナデで突帯が下がり気味になる。突帯の下部接合面は未調整で接合痕がむきだしとなっている。

内面下部はケズリ調整され、それによって口縁直下にかかる稜ができています。刻目は右に傾いたO字ないしD字あるいは菱形で、刻目の底はU字ないしV字。ヘラは右方向から入っている。口縁の上面には単節RLの縄文を施す。長石、雲母、石英などの粒はほとんど含まない。暗褐色。

深鉢形土器

15(0388)は、直線的に外反する単純な器形の深鉢。厚手で、口縁端面をなでて平らにする。器面にはややあらい細密条痕文をつける。

16~20(0017)・21(0609)・22(0365)・23(0664)・24,26(0017)は、それら甕形土器あるいは深鉢形土器の胴部と底部である。23は、底部から直線的に立ち上がり、胴部へと移行する甕。細かく整った細密条痕文を縦につけ、底部下端をヘラで横方向に削っている。網代圧痕も整って深くきれいについている。

16~20・22も木口による細密条痕文が縦や斜についており、整っているが、いずれも23よりも太い。22以外は同一個体の破片であろうか。21は弥生中期に下がるかもしれない。

鉢形土器 A類:

27(0393)は胴部がふくらみ、頸部でくびれ、口縁が外反する鉢、ないしは口縁が内湾する単純な器形の鉢の胴部。太い隆線で、匹字文を立体的、彫刻的に施す。匹字文の挟りは数方向からていねいになされている。また、たんに沈線を引くことにより隆線をつくっているばかりでなく、隆線の角を落として丸く仕上げしており、彫刻的印象を深めている。全体的にどのような文様モチーフが展開するのかわからないが、匹字の下も二条の太い隆線であり、幅広い平坦面が少ないモチーフであろう。茶褐色で焼きしまっている。

B類:

28(0043)・29(0076)は胴部がふくらみ、頸部でくびれ、口縁が外反する鉢。28は口縁部で、波状をなす。29は胴部。ともに胴上部に変形工字文を施す。沈線は深く、隆線と同じくらいの太い幅をもち、彫刻的である。隆線の反転会合部に挟りをいれるが、いずれも上下の沈線よりもやや深く削り、立体感を高めている。29の挟りは四角い。反転部に粘土粒はないが、左側がやや盛り上がっている。胴下半に単節LR縄文を施す。28は暗褐色、29は淡茶褐色で、赤彩が残る。ともに焼きはよくしまっている。

C類:

30(0411)・31(0410)は、比較的大きな底部からゆるく外湾しつつ立ち上がる鉢。ともに変形工字文を施す。30の反転部は欠失しており、粘土粒がつくかどうか不明。沈線は太く深くシャープで流麗、器面もていねいに研磨しており、ていねいなつくりである。沈線が密集するところは、隆起した部分よりも沈線の部分の方が幅が広い。砂粒は少ない。オレンジ色や黄色っぽい部分などあり色調はまだら。31の反転部には粘土粒はないが、盛り上がり気味に仕上げている。その部分を含めて、沈線の彫りが深く彫刻的である。文様単位数は不明だが、33と同じように多く、変形工字文にしては異例である。黒褐色。焼きしまっている。

32(0170)はおそらく単純な形態の鉢と思われる。縄文地に、太く深い沈線文をていねいに施している。沈線の底面は7や8と同じく平坦である。

D類:

33(0427)は、やや内湾気味の口縁の鉢。底部を欠くが、ゆるく外湾しつつ胴部へと移行するやや大きめの底部がつくかもしれない。浮線網状文に類似した文様を施す。

浮線文との大きな違いは、隆線の上面がほぼ平坦なことだが、沈線部分の幅が隆線部分の幅より勝っており、それが立体的な印象を与えている。また、二本の隆線を上下から挟んで、粘土を押し上げたり下げたりすることで、隆線の会合部をつくりだしているが、挟み方はていねいで、ヘラでなでつけの調整も丹念におこない、彫刻的な雰囲気をつくりだしている。淡黄褐色で、焼きがよくしまっている。沈線部にベンガラが残る。

34(0656)は、ゆるく外湾しつつ立ち上がる、やや大きめの底部がついた小型の鉢。胴上部には33と同じ文様が配されて、その下に二条の沈線がめぐると、33ほど彫刻的でなく、沈線の幅が狭い。淡褐色。

E類： 35(0201)は単純な形態の鉢。口縁には指頭による押捺がめぐり、口縁端が鋭く波打つ。指頭押捺によって粘土がはみ出し、それが下の文様の一部を覆っている。胴部には三角連繫文を描く。沈線はやや乱雑だが、ヘラの動きはすばやい。黄味がかかった灰褐色で、焼きしまっておりガリガリした感じである。

F類： 36(0145)・37(0426)・38(0466)・39(0225)は口縁に沈線文をめぐらしただけの鉢で、単純な器形のものだが、36は頸部がくびれ胴がふくらむものかもしれず、38は変形工字文が展開するかもしれない。37と39はともに縄文地文に沈線を施したもののだが、沈線の数や口縁端部の仕上げ方、縄文の撚り方などにとどまらず、色も37が淡黄褐色で、39が明褐色と違いを見せる。縄文は37が単節LR、39は0段多条と思われる。

G類： 40(0391)は尖った口縁の単純な器形の小型鉢で、縄文を地文とし、深い沈線文を口縁に描く。沈線は一部口縁端にまで達している。縄文は、撚りのあまい単節LRと思われる。淡赤褐色。あるいは弥生中期の土器か。

B 北西関東地方の前期弥生土器に対する認識

東日本の弥生前期土器に関しては、まず中村五郎氏がその存在に注目した。それはおもに遠賀川式土器の編年と、東日本の土器編年の並行関係を吟味して、これまで弥生中期とされてきた東日本の土器のなかに、前期にまでさかのぼるものがある、という提言であった⁽²⁾。その後、増田逸朗氏は、埼玉県美里村如来堂C遺跡でまとまって出土した弥生土器に対して、系譜と編年的位置づけを検討し、弥生前期末にさかのぼる土器として如来堂式を設定した⁽³⁾。さらに、1983年には群馬県藤岡市沖II遺跡が発掘調査され、質量ともに豊富な土器群が報告された⁽⁴⁾。こうした過程をへて、鈴木正博氏は北西関東地方の縄文晩期終末から弥生中期にいたる土器編年の細別のなかで、縄文土器から弥生土器への移行を示すものとして、如来堂式→沖II式という編年を立てている⁽⁵⁾。筆者も、再葬墓の土器から北西関東地方の弥生前期土器の細別を考えたことがあり、如来堂C遺跡や群馬県渋川市南大塚遺跡などの土器群が、群馬県倉渕村上ノ久保遺跡などの土器群に先行するものと位置づけた⁽⁶⁾。若狭徹氏も同様の立場で、土器群を編年している⁽⁷⁾。

縄文土器から弥生土器への変化の認識はさまざまだが、如来堂C遺跡や沖II遺跡の土器群が、それをとらえるうえで重要な役割をはたしていることは、いうまでもない。二者を比較した場合の、編年上のもっとも大きな特徴は、如来堂C遺跡には大洞A'式に並行する土器、あるいはそのものがみられるのに対して、沖II遺跡にはそれがほとんどない、という点である。ただし、如来堂C遺跡の土器のなかには、鈴木氏が指摘するように短い羽状沈線文をもつものが含まれていたり、磨消縄文をもつものがあるなど、わずかに新しい

時期のものも含んでいる。また、沖Ⅱ遺跡の土器には今回の分類で鉢Cとした大洞A'式の変形工字文をもつ鉢が一個体だけ含まれている。しかし、こうしたわずかな資料をのぞけば、基本的には鈴木氏の編年のとおり、如来堂C→沖Ⅱという序列は認められよう。そして、沖Ⅱ遺跡の土器群は文様の沈線文化が進行し、沈線以外の平坦面の器面に占める割合がきわめて大きくなるという、大洞A'式直後の青木畑式と同じ特徴をもっており、伴出する東海系の土器は水神平式に限られるので、その編年の位置付けは明確である。

C 天引狐崎遺跡出土弥生前期土器の系譜と編年の位置づけ

次に、如来堂C遺跡や沖Ⅱ遺跡の土器群を中心に、周辺の重要な遺跡の土器もまじえて天引狐崎遺跡の土器と比較しながら、天引狐崎遺跡の弥生前期土器の系譜と編年上の位置について、考えてみたい。

壺形土器 A類の1は形態的特徴からすると遠賀川系土器だが、口縁外面のT字文、内面の弧状文は条痕文の施文具によって施した水神平式土器にみられる文様で、二つの系統の特徴をミックスして仕上げたものと思われる。頸の太さに比して口縁の開きがきつくない点は、前期の新段階でも古いといえよう。

B類は条痕文土器である。2は条痕の傾きにより、樫王式から水神平式にかけての編年位置が与えられる。胎土、色調や細部の特徴などから愛知県方面からの搬入品とみてよい。これに対して3は水神平式である。波の一つ一つの幅などがそろっておらず、規格的でない点は古い要素をもつ。前期の波状文の特徴が多段であるという谷口肇氏の指摘⁸⁾に従えば、あるいは中期まで下るのかもしれないが、明確にはしがたい。胎土などからは、地元でつくったものとも思える。

C類の4は刻目突帯をもつ条痕文系の壺だが、いわゆる中部高地系突帯文壺形土器⁹⁾とはまた系譜を異にする、条痕文壺のより直接的な影響を受けたものであろう。口縁を面とり気味に仕上げるのは、樫王式の特徴だが、口縁の外反度や面とりの形状などに、やや新しい要素がうかがえる。5は類例に乏しく、編年の位置づけはむずかしい。

このように、壺は遠賀川式の影響を受けたもの(A類)、東海地方の条痕文土器そのもの(B類)と、その影響を受けて地元で発達したもの(C類)の三種類からなる。いずれも愛知県方面の土器の影響を受けて成立したのによって構成されており、前期中段階から新段階でも古い時期、すなわち東海編年の樫王式から水神平式にかけてと、新段階ないし中期初頭、すなわち水神平式並行あるいはその直後という2時期のものが認められた。如来堂C遺跡の東海系壺をめぐっては議論があるが¹⁰⁾、型式学的にみて、鈴木氏が指摘するように樫王式から水神平式にかけてという編年の位置づけが妥当なものと思われる。樫王式には水I式土器が伴出するのが常であるが、如来堂C遺跡に浮線文土器が皆無に近いということも、その編年の位置付けを支持するものであろう。天引狐崎の古い段階の条痕文土器にも、そうした位置づけが与えられよう。

甕形土器 A類の7は形態、地文、胴部文様から、福島県一人子遺跡の短頸甕形土器との共通点を指摘できる。太く深い沈線文で文様を描く点も等しい。一人子例の変形工字文には菱形の文様があり、その部分の縄文が磨り消されており、さらに文様帯の幅が7より広いことが予想できるという点で新しい特徴をもつが、7は南奥地方の土器の影響を強く受けたものといえよう。したがって、7は大洞A'式に比定できる。如来堂C遺跡には、沈線に抉りを入れ、両側に粘土粒を盛り上げる手法は見当たらないので、本例はそれよりも古い段階に位置づけられるかもしれないが、削り出し突帯として報告され、その後亀ヶ岡系と訂正された甕¹¹⁾が、この仲間の可能性がある。

B類は、縄文晩期終末の浮線文系の甕形土器に直接系譜が求められるが、文様に南東北地方の影響が強く加わることによって成立したものである。さらに文様モチーフから二種類に分けたが、その一つB1類の8は変形工字文であり、特徴として掲げたいくつかの点は、A類の7と同様これが大洞A'式に並行することを示している。抉り部分がおそらく深く、大きく削られると思われるが、それは荒海式に特有のテクニクである。そして、この文様モチーフは沖Ⅱ遺跡にまったくみることができない。これに対して、B2類の9～11は沖Ⅱ遺跡に典型的な三角連繫文である。また、前述のようにその特徴をA・B1類と比較した場合、立体感や彫刻的要素を欠いており、両者の間に時間的な前後関係を指摘することができる。したがって、三角連繫文は、7のような変形工字文に縦区画沈線を入れ、反転や粘土粒などを省略し、簡略化することによって成立したと考えるのが妥当だろうが、これに関してはあとで再論する。

12は、当遺跡の弥生中期土器に分類した、口縁と胴部に縄文帯をもち、胴部に区画した磨消縄文を施す土器の系統に属する。この甕も地元の浮線文土器である千網式に系譜をたどることができる。波状口縁であることや、区画内の磨消縄文帯の幅が狭いことなどから、前期末においた。

C類は、器形としては水神平式の甕に類似するが、調整は檜王式の伝統を受け継いでいる。

D類の13であるが、これは関東地方のこの時期の土器のなかに類例を探すことができない。また、前後に時期を広げても、類例は見つからない。弥生後期の吉ヶ谷式土器には文様要素として刻目突帯があるにはあるが、吉ヶ谷式にはこのような甕は報告されていない。口縁端部と胴部に刻目を施す甕としては、南関東地方の弥生後期土器が知られているが、胴部のそれは輪積みの隆起上を刻むものであるし、形態的にもまったく異なっている。他の地方に類例を求めなければならぬとすれば、もっとも可能性が高いのは、北部九州の弥生前期後半の二条突帯をもつ甕である。

藤尾慎一郎氏によると、北部九州の弥生前期甕形土器は、如意状口縁をもつ板付系、縄文土器の系譜を引く刻目突帯文系、その二者の特徴をミックスした折衷系からなる¹²⁾。折衷系には二つの種類があるが、本例は口縁に板付系の特徴をもつ外反口縁、胴部に刻目突帯系の特徴である刻目突帯をもつタイプである。折衷系のなかには極端に口縁が外反するものがあり、まさに本例と同じ特徴をもっている。このタイプの甕は板付Ⅰ式に現れ、中期まで系譜を追えるが、もっとも似通った形態的技術的特徴をもつのは、胴部の突帯はヨコナデが十分でなく、刻目が定型化していないところから、藤尾氏が筑後Ⅰ期とする板付Ⅱa式の折衷甕である。しかし、この甕が北部九州からの搬入品でないことは、胎土や色調からも推測でき、口縁上面に縄文を施していることがそれを決定づけている¹³⁾。

以上、甕形土器は、南東北地方の系統のもの(A類)、在来の系譜を引きつつ、文様に南東北地方の要素をとりこんだもの(B類)、東海地方の影響を受けたもの(C類)、そして北部九州地方の影響を受けて出現したもの(D類)からなる。A類やB1類に関東形の大洞A'式文様や、荒海式に特徴的なテクニクが認められ、それらはその時期に並行すると考えられる。そしてB2類は沖式土器である大洞A'式直後に編年されるように、甕形土器は二時期の土器からなっており、底部破片にも23のように、浮線網状文土器とも共通するような明らかに古い時期に属すると思われるものがある。ただし、比較的整っているが、やや太めの細密条痕の胴部破片や、C・D類は、新旧どちらに属するか、明確にしがたい。

今回の調査で、北部九州系の甕が確認できたのは大きな成果であったが、三角連繫文の祖形となる変形工字文を施した甕が得られたのも、特筆すべきことである。それは、おそくとも大洞A'式の直後には三角連繫文が成立していることを示しており、沖II遺跡の土器により名付けられた沖II型変形工字文¹⁴と同時に用いられていたことを支持する。このことは沖II遺跡の埋設土器の関係性からも証明できる。すなわち、三角連繫文をもつ甕を埋設したAU-1号土坑と沖II型変形工字文の鉢を伴うAU-2号土坑から出土した剥片どうしが接合している¹⁵ので、同時埋設は明らかだからである。さらに、その三角連繫文は、鈴木正博氏がいう「沖II式」3期の縦区画線をもつものである。したがって、土坑における土器の共伴関係の連鎖から導きだした、「沖II型変形工字文（沖II式1期）→三角連繫（沖II式2期）文→縦区画三角連繫文（沖II式3期）」という鈴木氏の「沖II式」3期編年¹⁶は、調査報告書が刊行された現在、再考の余地がある。沖II遺跡の三角連繫文をみると、それを構成する上下の横沈線の数に、著しい差のあることがわかる。天引狐崎の7は、上の沈線の数しかわからないが、補助線もいれると3本である。これは、本場の変形工字文と同じ数¹⁷で、規範的である。そして、その直上がケズリによって肩の段になっており、7はそれが沈線を引く工具と同じもので成形されているために、あたかも沈線のようにになっている点に注意したい。沖II遺跡の三角連繫文は、包含層出土0206¹⁸のように肩に段をもち、補助線を入れて3本の横沈線で構成されるものももっとも古い。斜線も1本である。肩の段が沈線に置き換わり、4本の沈線になったもの(0204)、さらに5本になったもの(0219)、段がつくられずに3本の沈線になり、補助線も1本につながってしまったもの(0220)、そしてさらに補助線が自由な図形を描くようになったもの(0229)という変化が指摘できるので、沖式甕の細分にはその視点の方が有効ではないだろうか。したがって、天引狐崎の甕も9が古く、10・11は新しい。

鉢形土器 A類は、大洞A'式でも古い段階にまでさかのぼる可能性のある土器で、大洞A式の隆線的な手法をよくとどめている。こうした土器は、沖II遺跡にはもちろん、如来堂遺跡にもない。

B類は大洞A'式に並行する土器で、28は反転部に粘土粒がない点は東北地方のものやや異なるが、その直接的な影響のうかがえる資料である。こうした小波状口縁の鉢は、如来堂C遺跡にあり沖II遺跡にはない。29は茨城県日立大沼遺跡や女方遺跡に類例が求められ、荒海貝塚にも同様な鉢があり、反転部の挟りに共通するものがある。これも沖II遺跡にはない。

C類の30は如来堂C遺跡に特徴的にみられるものである。本例は胎土焼成色調や文様のつけ方などから、東北地方の大洞A'式に比定でき、搬入品と考えてよいものである。31は文様の単位数に違いはあるが、沖II遺跡にただ一点存在している鉢と同類である。これも大洞A'式後半に比定できるものであり、沖II遺跡にもわずかにそうした時期のものが含まれていることを示している。32の文様モチーフはどのようなものかわからないが、甕A類と同じ沈線文のテクニックは、その古さを示すものであろう。

D類は沖II型変形工字文に特有のテクニックをもつものである。変形工字文がもつ特有の挟りをともなった隆線反転部分に対して、それは上下から挟りを入れたりつまんだりして隆線を会合させているところに違いがある。この文様モチーフは、浮線文土器からの変化で理解できるものであり、如来堂B・C遺跡に2線分岐の浮線網状文土器が存在していることは、D類の直接の祖形がそうした土器であることを物語っている。本例の沈線部分が隆線部分よりも幅広いのは、浮線文の名残であり、会合部の処理のしかたとともに、沖II例よりも古いことを示すものであろう。大洞A'式でも新しい段階の福島県根古屋遺跡16号墓坑出土の鉢形土器と比較できる古さのもの

第VI章 特論

である。つまり33は沖式以前、浮線文直後で、34は沖式に比定できる。

E類は荒海式の深鉢に同様な口縁処理方法のものがあり、乱雑だがシャープな文様とともに、大洞A'式までさかのぼる可能性を考えさせる。

F類のうち、36は四十坂遺跡や如来堂C遺跡に特徴的な鉢。沖II遺跡にはない。37は如来堂C遺跡に類似例があり、ともに黄褐色で東北南部方面からの搬入品かもしれない。

鉢形土器は、南東北地方の大洞A'式の影響を多分に受けたもの（A～C類、F類の一部）、在地の浮線文土器の系譜を引いたもの（D類）、新たに出現するもの（E類、F類の一部、G類）によって構成されている。東北系は大洞A'式に並行するものあるいはそのものであり、そのうちには如来堂C遺跡にみられないくらい古い特徴をもつものもあるが、多くは類例をあげることができたり、同じ古さのものと考えられるものであった。これらは沖II遺跡にはほとんどみられない。東北地方南部の大洞A'式の影響を受けた、荒海式や女方式などの変形工字文の形成と連動した動きが当遺跡の鉢類に顕著にみることができる。在来系は、当地方の浮線網状文土器から直接導くことができる文様モチーフをもつ。浮線から沈線へという進行にともなって、彫刻的手法は平板的な手法となり、やがて文様の規格性や配列の規則性が失われ、中期の土器へと移行していくのであり、こうした変化は甕の文様にも同様に指摘できる。

このように、鉢形土器は、編年的位置づけがむずかしいものに前期でも新しい部分に位置づけうるものを含んでいるが、大半は大洞A'式に並行する時期のものであり、このことは、当遺跡の弥生前期土器が大洞A'式に並行する古い段階のものを主体としていることを示すものであろう。

D 弥生前期土器の評価

このように、天引狐崎遺跡の弥生前期土器は、新古に細別される。前半は、甕や鉢の一部に如来堂遺跡にみられないものを含んでいる。これらは、如来堂式以前という評価が下せるかもしれないが、甕形土器に捺糸文が一片もないことや、甕B1類は三角連繫文にスムーズにつながる点、女方遺跡の大洞A'式土器と類似すること、鈴木正博氏の荒海3式¹⁹に近似した点などから、如来堂式の内容がより一層明らかになったものと考えて、如来堂式で理解したい。ただし、鉢Aなどはさらにさかのぼる可能性が多分にある。北部九州系の二条突帯甕形土器は板付II a式に位置するものともっとも近いので、前半段階にともなうものであろう。後半は乏しい資料だが、沖式土器に比定できる。

これらはすべて弥生土器という前提で、これまで述べてきた。この土器群の前に、関東地方では埼玉県上敷免遺跡の千網式土器²⁰が位置づけられることは、本遺跡の鉢や甕に浮線文直後の資料がみられたことや、大洞A'式土器の細分と関東地方の土器編年の対応関係から、間接的に了解できる。浮線網状文土器は、西日本の突帯文土器の影響や東北地方の大洞A式の影響を受けながらも、在来の土器群のなかから主体的に形成された縄文晩期土器の最終末に位置づけられる土器群であった。こうした土器群が、急速に崩壊するのは、東海地方からの条痕文土器の直接的、あるいは信濃地方を通じた間接的な影響と、東北地方の土器の直接的な影響によってであった。如来堂C遺跡の土器にもかつてそうした評価を加えた²¹。さらに、天引狐崎遺跡では、北部九州の系譜を引いた土器が出土しており、農業というまったく新しい生産様式を基盤にした、大陸文化に接する社会の情報もたらされるようになったことは重要である。

このような交流の活発化が、新たな文化を生み出すものになったと考えられ、東海地方と南東北地方の影響をそれまで以上に強く受けて形成された土器が、その後の関東地方における弥生土器の様式構造の基礎になったことを考えると、如来堂式の成立は、大きなエポックと言わざるを得ない²²。集落の継続という点で

も、浮線網状文期で集落はとだえるものが多く、新たに居を構えた集落は、天引狐崎や沖Ⅱなど、少なくとも弥生中期初頭まで継続する場合が多い。また、複棺形壺棺再葬墓という南奥地方の縄文晩期終末に成立した墓制が、群馬県渋川市南大塚遺跡をはじめとして関東、中部地方に分布するようになるのも、大きな画期である。肝心の生産手段の動向がもう一つ明らかでないが、このような変化を重視して、如来堂式土器を北西関東地方でもっとも古い弥生土器と考えておきたい。

註

- (1) 馬目順一・古川猛.1970『一人子遺跡の研究』（『南奥考古学研究叢書』）
- (2) 中村五郎.1978「東部・西部弥生式土器と続縄文土器の編年関係」『北奥古代文化』10・同.1982『畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器』。
- (3) 増田逸朗ほか.1980『甘粕山 関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』X（『埼玉県遺跡発掘調査報告書』30）埼玉県教育委員会。
- (4) 荒巻実ほか.1986『沖Ⅱ遺跡 藤岡市立北中学校校舎・体育館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』藤岡市教育委員会。
- (5) 鈴木正博編集.1981『茨城県編年表』『第1回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稲作の受容』東日本埋蔵文化財研究会。
- (6) 設楽博己.1983「関東地方の初期弥生土器」『第4回三県シンポジウム 東日本における黎明期の弥生土器』北武蔵古代文化研究会ほか。
- (7) 若狭徹.1992「北西関東における弥生土器の成立と展開」『駿台史学』84。
- (8) 谷口肇.1991「津久井町中野大沢遺跡出土の条痕紋系土器について」『神奈川考古』27。
- (9) 設楽博己.1995「東日本における弥生時代の始まり」『展望考古学 考古学研究会40周年記念論集』考古学研究会。
- (10) 鈴木正博.1983「如来堂事情」『利根川』4 利根川同人会。
- (11) 鈴木正博.1987「「白幡本宿式」土器考 大宮台地における縄文式晩期終末比定土器の系統再点検事始」『埼玉考古』23。
- (12) 藤尾慎一郎.1984「弥生時代前期の刻目突帯文系土器 「亀ノ甲タイプ」の再検討一」『九州考古学』59。
- (13) この甕形土器については、藤尾慎一郎氏にご教示を得た。
- (14) 鈴木正博.1987「『流れ』流れて北奥「遠賀川系土器」」『利根川』8 利根川同人会。
- (15) 註（4）文献。
- (16) 註（11）文献。
- (17) 註（1）文献。
- (18) 註（4）文献。以下5つの土器の番号は報告書の土器の番号である。
- (19) 鈴木正博.1991「栃木「先史土器」研究の課題（二）」『古代』91。
- (20) 村田章人ほか.1993『深谷市上敷免遺跡 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告』（『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』128）埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- (21) 註（6）文献。
- (22) 註（9）文献。

2 方形周溝墓

友廣哲也

A はじめに

天引狐崎遺跡では方形周溝墓4基が検出され、併せて円形周溝墓状遺構が2基認められている。本遺跡は甘楽町東部に位置し、天引川を挟み^{ながねあづほ}長根安坪遺跡が対岸に所在する。

B 県内の周溝墓のありかた

本遺跡の周溝墓から出土した遺物はわずかに041号の溝から出土した土師器3点である。出土した土器は小型埴(0114)、小型S字状口縁台付甕(0112)、小型の単口縁台付甕(0113)である。現在の筆者の編年観では古墳時代第Ⅱ期に編年される一群である。また067号の溝出土の壺は樽式土器の系譜をひくものであり、無文化した樽式土器で古墳時代第Ⅰ期にはいるものである。

さて県内の周溝墓の現状を概観してみると確認される周溝墓は弥生時代後期から古墳時代前期におよんでいる。最近高崎市内で弥生時代中期竜見町式に編入される四隅切れの周溝墓が1基確認された。弥生時代の周溝墓は円形周溝墓、四隅切れ周溝墓が認められ方形区画の明瞭なものは稀である。四隅切れ周溝墓は弥生時代中期から後期にまで及んでいるがきわめて微量である。弥生時代の周溝墓は渋川市有馬遺跡、高崎市新保遺跡等で検出され、形態のほとんどは円形・楕円形を呈する。

有馬遺跡や新保遺跡での弥生時代墓のうち周溝墓の存在率を計算してみると両遺跡ともに10パーセントを下まわる結果がでた。この計算式は有馬遺跡では弥生時代の墓の総数は礫床墓86基、壺棺墓46基合わせて132基の墓が検出された。このうち周溝墓は全部で11基である。有馬遺跡での周溝墓の存在率は8パーセントになる。同じ計算を新保遺跡でだすと同様8パーセントの答えがでた。つまり、礫床墓や壺棺墓は弥生時代の墓制の主流にあることがわかった。また逆に考えると方形周溝墓は弥生時代の墓制の中心ではないことがわかる。

したがって筆者は現在古墳時代の墓制の中心は方形周溝墓であると考えており、礫床墓や壺棺墓のような木棺墓を基調とする墓制は櫛描文文化圏の特徴であり、古墳時代の方形周溝墓とは大きく一線を画するものと理解できる。ただし周溝墓という墓制は県内の弥生時代には存在し、特に四隅切れの周溝墓は前述のように弥生時代中期より存在しており、周溝墓という墓制自体は弥生時代群馬に導入されていたことが理解できる。さらに付け加えれば弥生時代の周溝墓は円形・楕円形の形態をとることが特徴となる。他地域の調査の例を上げると前橋市内堀遺跡で、前方後方形周溝墓が検出された。内堀遺跡の調査以前に西北部に接した部分の上縄引遺跡の調査があった。この遺跡では円形周溝墓群が調査報告されていた。その後内堀遺跡の調査で円形周溝墓に継続する前方後方形周溝墓が検出されたことになり、円形周溝墓から古墳時代の方形周溝墓へとの変遷が確認された。ただし、円形周溝墓は弥生時代から古墳時代初頭期になっても認められ、この上縄引遺跡の円形周溝墓も古墳時代初頭期に比定されるものである。

いずれにしても大きな流れは弥生時代の円形、楕円形の不定形の周溝墓から古墳時代になると方形周溝墓や前方後方形周溝墓のような墓制を導入していく。

整理すると次頁の表のようになる。

時期	群馬県土器	周溝墓	畿内
弥生時代後期	樽式土器	不定形の周溝墓・壺棺墓・礫床墓等	庄内古
古墳時代 第Ⅰ期	樽式土器の変質がはじまる。	方形周溝墓が導入される。 前方後方形周溝墓が地域によっては出現する。弥生時代の円形や楕円形周溝も共存する。 長根安坪遺跡方形周溝墓 天引狐崎遺跡方形周溝墓	庄内新
古墳時代 第Ⅱ期	畿内系小型埴の出現	天引狐崎遺跡方形周溝墓 長根安坪遺跡方形周溝墓	布留古

C 天引狐崎遺跡の周溝墓の位置付け

本遺跡周溝墓は表の古墳時代第Ⅰ・Ⅱ期に編入される土器群である。周溝墓の形態も方形を呈し、古墳時代の周溝墓である。また096号と097号は不定形を呈し、他の周溝墓より古いことが想定されるが出土遺物がないため前後関係は明確ではない。

D 長根安坪遺跡周溝墓との関連

天引狐崎遺跡の東に南北流する天引川の対岸に位置する安坪遺跡では14基の方形周溝墓が存在している。その形態は溝が全周するもの5基、一辺の中央部がブリッジに残るものが4基確認されている（田中新史氏分類ではB2型である。）。

長根安坪遺跡の周溝墓のすべては方形区画の明瞭な方形周溝墓である。周溝墓出土遺物は筆者の第1期土器に分類され、古墳時代初頭期に位置づけられる一群である。このように天引狐崎遺跡と川を挟む対岸の遺跡の間にはほぼ時を同じくして方形周溝墓という墓制が存在している。方形周溝墓の存在から両遺跡を含む県内全域が古墳時代への変質を経たものと理解でき、天引狐崎遺跡、安坪遺跡周辺には古墳時代初頭期から前期にかけての集落が存在したことが想定できる。

参考・引用文献

- 田中新史.1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』77
 友廣哲也.1995A「楡描文文化圏の弥生時代終末から古墳時代初頭期の墓制」『古代』100
 友廣哲也.1995B「上野の古墳時代文化の受容」『古代探叢Ⅳ』

3 遺跡立地と景観復元

A 樹種種実同定結果

既述のように（第Ⅲ章6-189頁及び第Ⅴ章3-225頁）、本調査では三途川低地部の調査で杭を主体とする木器類277点（但し内157点は自然物の杭状木瘤）と流木類1,278点の合計1,555点、さらに台地部の弥生後期竪穴などの遺構出土炭化材19点の樹種同定を行った。これは、過去の生木の分析としては、鎬川流域一帯でこれまでなされた最も量的に富んだ内容になっている。

遺物からは旧石器～中世という広い時代に含まれるこれらの資料は、厳密な時代同定はできないが、層位的状況より大部分は弥生時代前後である可能性は大きい。以下に同定成果をまとめる（括弧内は樹高）。

杭材	多数	常緑針葉樹	アカマツ (30～35m)
	その他	常緑広葉樹	アカガシ亜属 (20m) ・ ヤブツバキ (10m)
		落葉広葉樹	カエデ属 (10～15m)
炭化材	複数遺構	常緑広葉樹	アカガシ亜属
		落葉広葉樹	クリ (20m) ・ コナラ節 (20m)
		常緑針葉樹	カヤ (25m)
	単遺構	落葉広葉樹	アサダ (15m) ・ ケヤキ (35m) ・ クヌギ (15m)
		常緑針葉樹	モミ属 (30m)
		自然木	最多検出 (29%)
多く検出 (5～10%)	落葉広葉樹	カエデ属	
	常緑針葉樹	モミ属	
やや多く検出 (2～5%)	落葉広葉樹	トチノキ (30m) ・ ムクノキ (20m)	
	落葉広葉樹	アサダ ・ イヌエンジュ (15m) ・ エノキ属 (20m) ・ クロモジ属 (6m) ・ ケヤキ ・ コクサギ (低木) ・ コナラ節 ・ ムクロジ (15m) ・ ヤマグワ (15m)	
	常緑針葉樹	カヤ	
	その他	落葉籐本フジ	
特別種 (0.6%)	常緑針葉樹	トウヒ属 (30m)	

杭材と炭化材に見られる下線を付したものは、自然木の中で1%以下しか検出されなかったものである。また炭化材ではクヌギのみを、古墳時代前中期の遺構で検出した。

これらの状態を考えると、弥生時代の植生は、常緑広葉樹高木のアカガシ亜属を主体とし、それに常緑針葉樹のモミ属・カヤそして落葉広葉樹のカエデ属・トチノキ・ムクノキ及びアサダ・ケヤキ・コナラ節を混じえた森林が形成されていたと推定できる。また、トウヒはD区で集中して検出したものだが、それ以外の樹種とは共存が考えられない寒冷種で、氷河期即ち旧石器時代の植生を示していると思われる。

なお、中高瀬観音山遺跡で検出された弥生時代後期後葉と古墳時代中期の竪穴住居炭化材の樹種同定によれば、次のものが確認されている。

弥生	クリ・ヤマザクラ・カヤ・ススキ・ケンボナシ属・コナラ節・ケヤキ・アカガシ亜属・モモ・トネリコ属・キハダ・ヤマウルシ・竹笹類・ニレ属
古墳	クヌギ節・カエデ属・コナラ節・散孔材

そこで確認された主要建築材の弥生時代までのクリから古墳時代以降のクヌギへの変化は、上記炭化材の検出状況の中でもやや確認することができる。カエデ・コナラの利用もそれに伴うことかもしれないが、いづれも両時代間の植生変化とは考えられていない。

低地部で検出した種実についての同定結果は、次の通りである（第V章4-233頁）。

低地部 最多 トチノキ

多数 オニグルミ(24m)・アカガシ亜属（シラカシ近似種を含む）

その中で、トチノキとアカガシ亜属は低地部周辺に生育していたものが堆積した可能性が高いが、オニグルミは二次的に堆積したとされる。その他の出土種実も参考にして、植生は次のように考えられた。

台地上や斜面 常緑広葉樹 アカガシ亜属

落葉広葉樹 コナラ亜属

常緑針葉樹 カヤ・モミ

河川付近 落葉広葉樹 トチノキ・オニグルミ・エゴノキ(7,8m)

これを上記の自然木による植生想定と併せてみるとほぼ重なるが、オニグルミとエゴノキは多くは見られなかった。その生息が、三途川の源流部周辺にあったのかもしれない。

また弥生堅穴112号遺構で検出した種実には、次のものがあった。

炭化 イネ・オオムギ近似種

未炭化 タニソバ・ハナタデ近似種・ヤナギタデ近似種

即ち、イネ・オオムギ類の栽培と、タデ属野生種が繁茂していたことを示している。

なお、中高瀬観音山遺跡で出土した種実は、次の通りである。

弥生 トチノキ・モモ・イヌタデ近似種・オニグルミ・イシミカワ・イネ

古墳 アズキ近似種・マメ科・モモ・イネ・カラスザンショウ・オニグルミ

古代 モモ・オニグルミ・イヌタデ近似種

B 景観の復元

上記植生の同定結果及び調査成果に基づいて、弥生時代秋季及び旧石器時代冬季の景観復元を試みた（北東方向からの復元図：次頁 コンピューターグラフィック；写真編 PL.2～5）。その要点は、次の通りである。

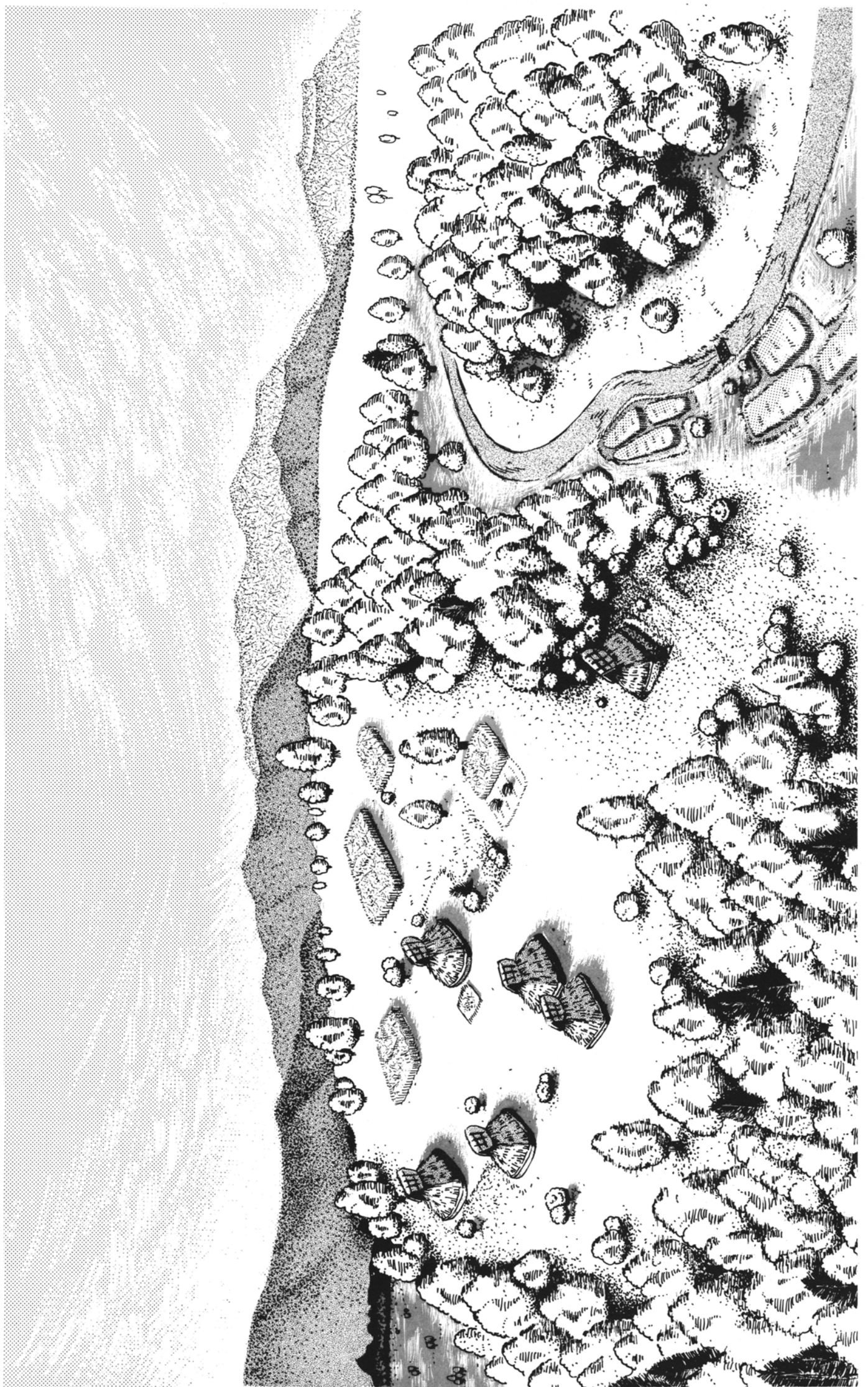
ア 弥生時代

- | | | |
|------|---------|--|
| 自然景観 | ○ 台地上部 | 落葉及び常緑広葉樹の混在林を主とし、高い常緑針葉樹が点在する林。 |
| | ○ 台地部斜面 | 常緑広葉樹を主とし、そこに落葉広葉樹が少し混在。 |
| | ○ 谷部 | 斜面際から河原までの間に、落葉広葉樹がまばらに存在。 |
| | ○ 平地部 | 常緑広葉樹を少し交えた落葉広葉樹の林と草地の混在。 |
| 人為景観 | ○ 台地上部 | 同一方向に並ぶ堅穴集落。集落地内は露面。集落近くの林間には陸稲・ムギの畝地が少し広がる。 |
| | ○ 台地部斜面 | 集落前面は高木を伐採し、谷側に向かう道。 |
| | ○ 谷部 | 部分的に水田。川にヤナ。 |
| | ○ 平地部 | 林と草地の間に水田と畝地（半分程度づつ）が散在。 |

イ 旧石器時代 積雪中に展開する針葉樹単純林。人為景観はない。

参考

鈴木三男他.1995「出土炭化材の樹種」『中高瀬観音山遺跡』群埋文



第Ⅶ章 調査成果まとめ

1 古代以降

A 道路築造

この時代になされた最も大きな人為的な活動は、中世13世紀後半頃には存在していた道路(033号)の造成である。切り通し状になされた造成は、古墳築造以上の土量を動かしている。南の倉内城周辺に残る14世紀初頭前後の笠塔婆群と関係が考えられる遺構である。北側の伝鎌倉街道と倉内城周辺から西の小幡に向かう南側の東西路を結ぶ道として、中世に甘楽郡一帯で勢威を誇った小幡氏によってなされた可能性が高い。

この道路は、その後数回の修復を経ながら、現代まで使用されてきた。

B 畠地開墾と地震

台地部(現在の通称「サギ山」)の畠地開墾が近世中期に始まっており、その痕跡がいくつか残っていた。中世に造成された上記道路を機軸線としての台地上の区画化、そして斜面部ではテラス状に平坦部を作り出す形でなされている。

この開墾は、天明の浅間山爆発による災害後も、継続的になされている。しかし、天明以後に大規模な地震に見舞われ、西斜面末端では大きな地山崩壊が起こった。この開墾活動の中で、2基の古墳が削平された。

C 居住

僅かに中世に竪穴と柱穴群、そして古代に焼土土坑が見られるのみである。周辺に本格的な居住の中心があった可能性も考えられるが、それらの痕跡が示す意味は明らかではない。

2 古墳時代

A 埋葬

4基の前期方形周溝墓(10~15m級)と2基の後期古墳(20m級円墳)があり、台地部上面は基本的に墓域が多くを占めている。方形周溝墓群の継続的な築造がなされた前期と、横穴式石室の古墳が築かれた後期では大きな時間差があるが、後期まで方形周溝墓の存在は意識されていた。古墳が方形周溝墓を避けて作られた点は、興味深い。

また2基の古墳は、埴輪列を回していたものとそうでないものとに別れ、後者は多角形墳的な平面形を示す葺石構造が見られた。

B 居住

痕跡は乏しく、僅かに前期の竪穴が1軒見られただけである。この竪穴は、前代の円形周溝墓とのみ重複しているが、同期の方形周溝墓はその円形周溝墓を意識して築造されている。複雑な先後関係が見られる。

後期は低地部に土器が見られるため、近傍に居住中心があったことは間違いないが、詳細は不明である。





3 弥生時代

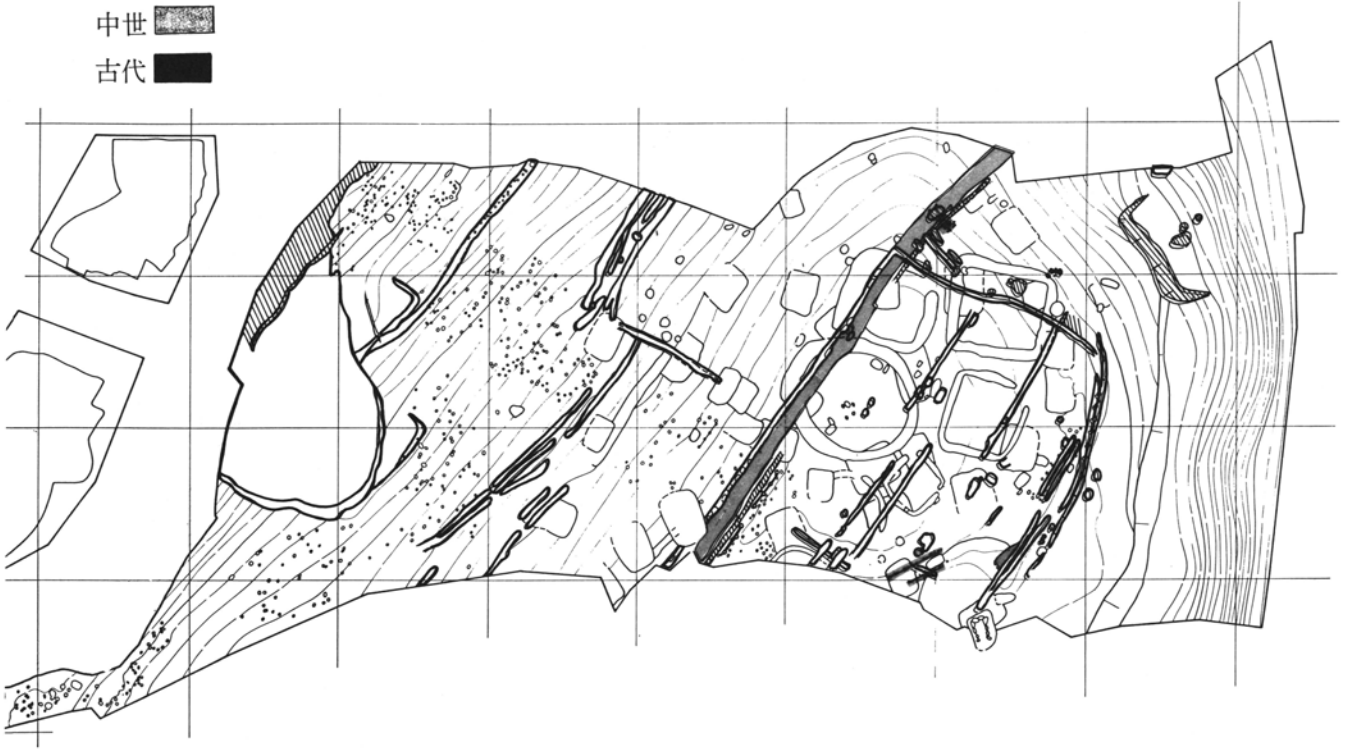
A 居住

竪穴住居で構成される集落は、後期中葉に台地上から斜面にかけて少しまとまって存在した。調査範囲内の同時存在は、5~10軒程度と考えられる。その生活は比較的豊かで、日常具として種類の多い土器類を持つ他に、さまざまな石器も使用していた可能性が高い。その他の遺物も顕著なものがある。

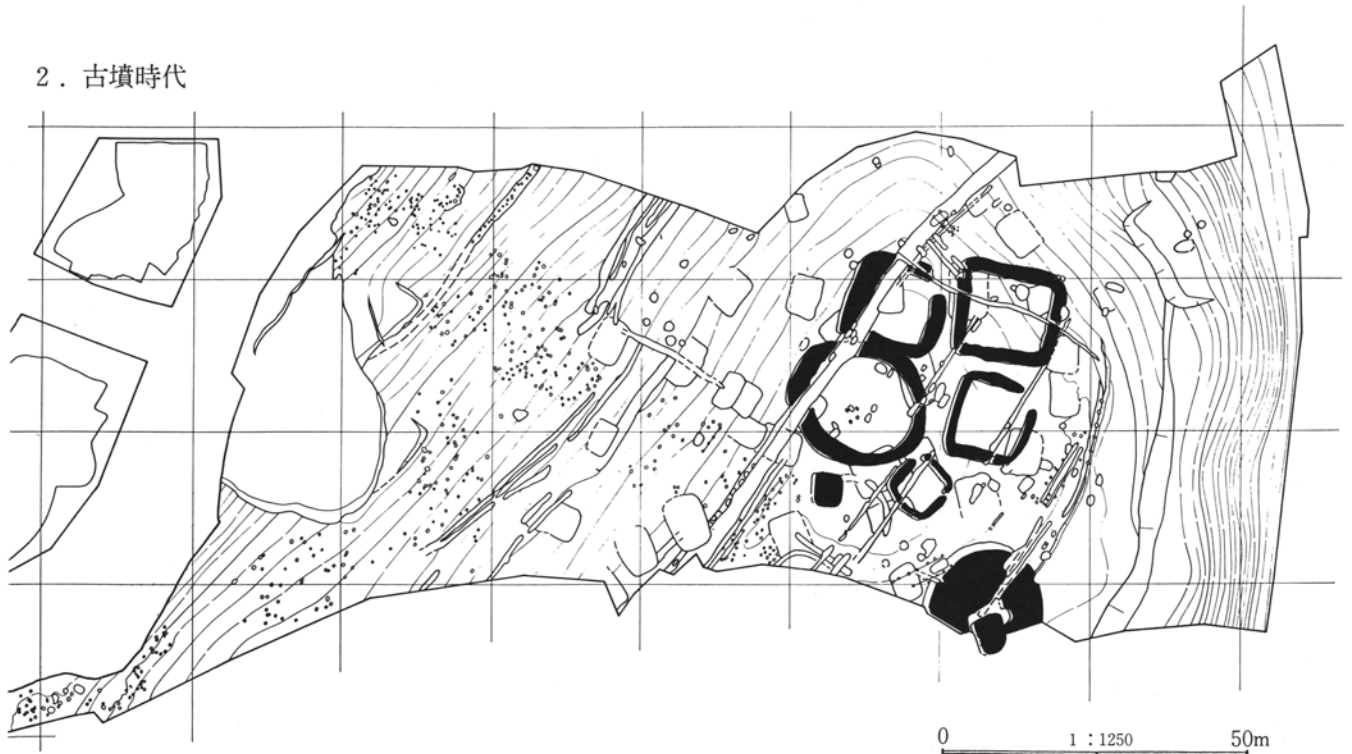
中でも韓半島産の原料を加工した銅釧片の存在は、特筆に値する。これは、西側近くの三ツ俣遺跡で発見された銅戈片と共に、関東における弥生時代金属器文化の先進地として、甘楽回廊地方があったことを物語っ

1 古代以降 2 古墳時代 3 弥生時代

1. 近代 
近世 
中世 
古代 



2. 古墳時代



0 1 : 1250 50m

第Ⅶ章 調査成果まとめ

ている。同様に5本の鉄鏃の出土は、上野での鉄鏃集中地である当地域の性格をさらに補強した。

石器は、石鏃（打製石斧Ⅱ類）・石包丁（打製と磨製）・石鎌・敲き石・打製石鏃（有茎・無茎）・石剣そして種々の磨り石が、堅穴より出土している。打製石鏃は、中高瀬観音山の場合と同様に、縄文のものと弥生のものとの混在の可能性が考えられる。敲き石は、トチノミの加工に使われた可能性もある。

後期の堅穴集落は突然始まり、突然消えた。しかし、それ以前から弥生文化の波は、当遺跡にも到達していた。中でも前期後葉の土器片の分布があり、そこには北部九州地方のものが含まれていたことは、注目に値する。それに続いて中期中葉まで継続的な生活の痕跡が認められる。残念ながら遺構としては中期中葉のフラスコ型土坑3基しか検出できなかったが、東側の神保植松遺跡や沖Ⅱ遺跡など甘楽回廊を東進する前期・中期の弥生文化の動きの中で、当地は重要な役割を果たしていた可能性が高い。

B 埋葬

後期後葉の埋葬遺構として、壺棺墓と円形周溝墓が見られる。壺棺墓は、蓋受けを備えた特異な形状の無文壺を用いており、掘り込みは8字形で大小二つの円形土坑が接合した感じが見られる。単独の存在である。

円形周溝墓は、少なくとも2基存在していた。壺棺墓が古墳時代の方形周溝墓築造にあたって壊されたのに対し、円形周溝墓は破壊されずに存在が意識されていた。

共に該当時期の居住が不明である。

C 生業

農業については、僅かではあるが、炭化したイネとオオムギ近似種が堅穴から出土した。搬入品である可能性を排除することはできないが、堅穴集落周辺で両者が栽培されていたと考えるのが自然であろう。

当遺跡で特徴的なことは、内水面漁業の痕跡が低地部で見られたことである。一つは三途川を堰き止めた形のヤナ状遺構であり、もう一つはその上流で出土した木製ヤスである。共に明確にはし難いものの、弥生後期の可能性が大きい。川魚捕獲活動についてのこのような証拠は、弥生後期とすれば関東内陸では希有の例だろう。

D 環境

低地部の流木資料で、弥生を中心とする時期の植生復元が可能になった。アカガシ亜属を中心とする常緑広葉樹（照葉樹）とカエデなどの落葉広葉樹そしてモミなどの常緑針葉樹の混在林が、それである。またヤナ状遺構に使った杭には、わざわざ周辺に見られないアカマツを用いている。

4 縄文時代以前

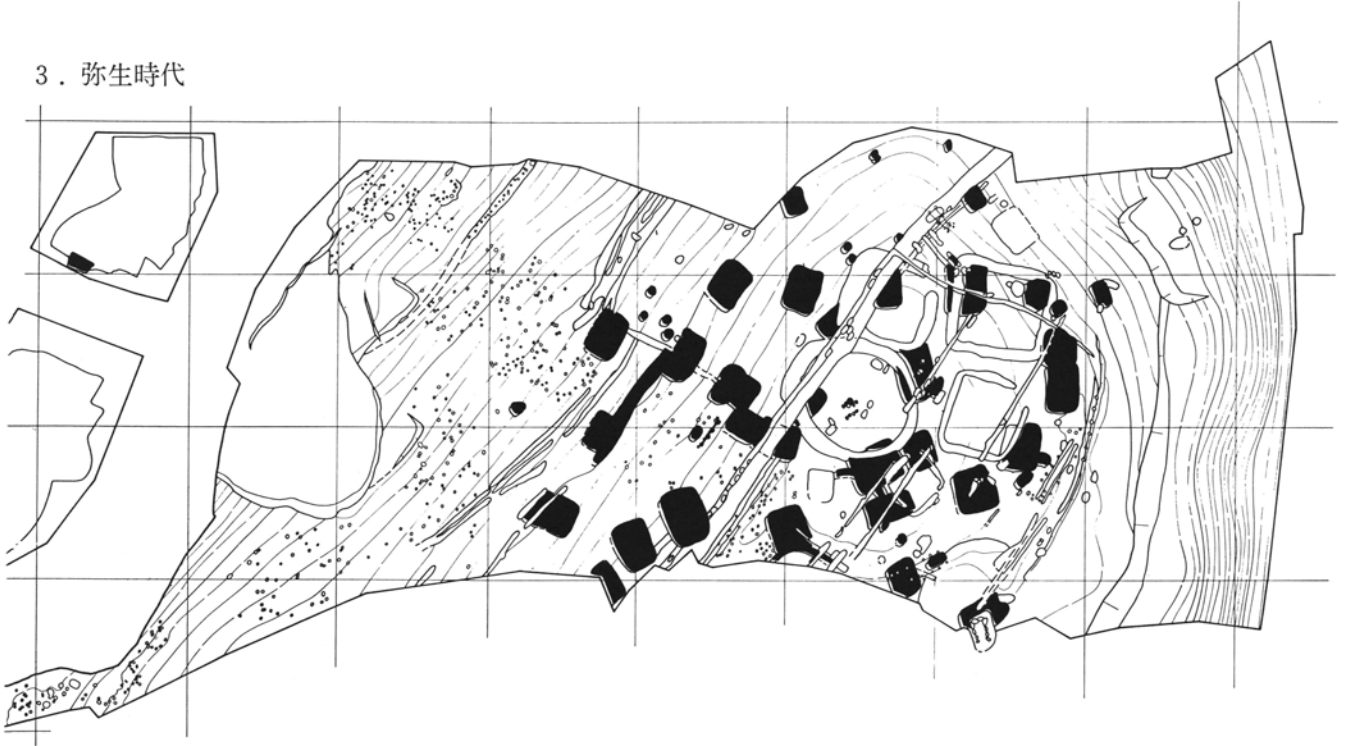
A 居住

直接居住を示す住居は全く確認できなかった。ただし、前期から後期までの土器片が出土しており、石器も含めて、周辺にそれらの時期の生活の本拠地があった可能性がある。特に低地部では、残存状態が比較的良好な中期加曽利E4期の深鉢が見られた。同期の居住が近くに存在したことを示している。

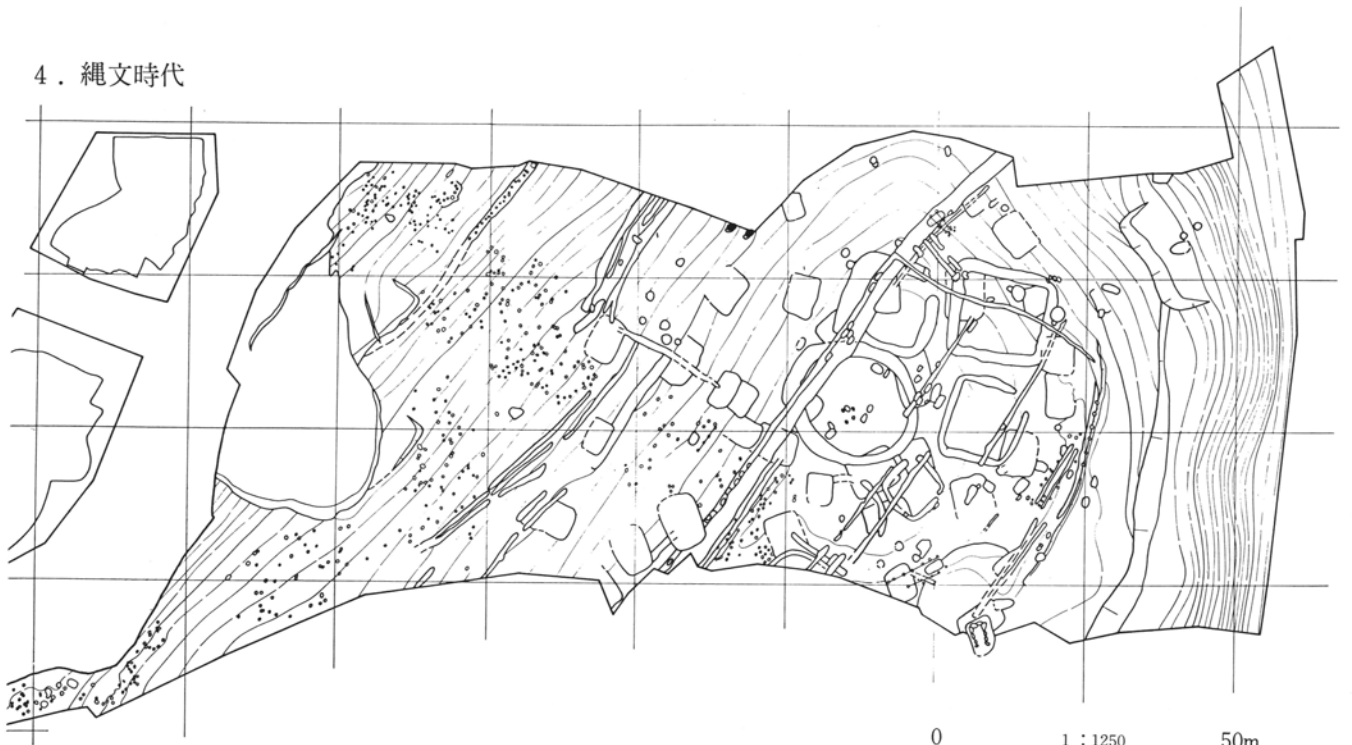
B 生業と環境

この時代と推定できる陥穴状の土坑2基が、台地部西斜面上位で見られた。その他に、低地部でのトチノミ加工も想定しうが、確実な根拠はない。なお、低地部では後期旧石器時代の狩猟具男女倉型黒曜石尖頭器が出土しているが、その時代の植生を示すものとして針葉樹トウヒの存在を確認した。

3. 弥生時代



4. 縄文時代



三 資 料

第Ⅷ章 索 引

第Ⅷ章 索引

遺構索引

番号	種類	時代	本文	写真
001	古墳	古墳	68	52,54
002	溝	近世	45	23,33
003	土坑	近世	55	
004	土坑	近世	45	34
005	土坑	不明	45	33
006	土坑	近世	45	33
007	開墾跡	近世	45	33
008	土坑	近世	45	33,36
009	土坑	近世	45	36
010	欠番			
011	欠番			
012	土坑	近世	45	34,36
013	柵列	近世	45	35
014	土坑	不明	63	49
015	土坑	近世	62	48
016	集石土坑	近代	55	44
017	集石土坑	近代	55	44
018	集石土坑	近代	31	
019	集石土坑	近代	31	
020	集石土坑	近代	31	
021	土坑	近世	62	48
022	方形周溝墓	古墳	52	41,42
023	土坑	古代	31	23,41
024	欠番			
025	土坑	不明	27	19
026	竪穴住居	弥生	27	20,21
027	竪穴住居	弥生	26	
028	土坑	弥生	104	81
029	土坑	弥生	104	81
030	竪穴住居	弥生	106	82,83
031	壺棺墓	弥生	31	42,43
032	竪穴住居	弥生	109	84,85
033	道路	中世	47	38,39
034	土坑	弥生	56	44
035	土坑	近世	25	19
036	竪穴住居	弥生	29	21
037	竪穴住居	弥生	54	43
038	竪穴住居	弥生	33	24
039	竪穴住居	弥生	105	81,82
040	竪穴住居	弥生	58	45
041	方形周溝墓	古墳	57	45
042	溝	近世	129	101
043	土坑	近代	25	19
044	土坑	近代	25	19
045	土坑	近世	25	19
046	土坑	不明	112	87
047	土坑	近世	129	101
048	溝	近世	129	101
049	土坑	近世	129	101
050	溝	近世	129	101
051	溝	近世	129	101
052	ピット群	中世?	30	22

番号	種類	時代	本文	写真
053	ピット	中世?	30	22
054	溝	近世	129	103
055	土坑	弥生	60	47
056	土坑	弥生	60	47
057	土坑	縄文?	108	84
058	土坑	縄文?	108	84
059	溝	近代?	133	105
060	溝	近世	45	36
061	土坑	弥生	66	51
062	土坑	近世	66	51
063	土坑	不明	73	52
064	集石土坑群	近世	74	52
065	土坑	不明	61	48
066	土坑	弥生?	112	87,88
067	方形周溝墓	古墳	65	51
068	溝	近世	45	51
069	竪穴住居	弥生	36	24,26
070	竪穴住居	弥生	34	24,25
071	竪穴住居	弥生	77	59,60
072	土坑	弥生?	62	49
073	土坑	弥生?	62	49
074	竪穴住居	弥生	63	49,50
075	古墳	古墳	38	27,29
076	溝	近世	45	37
077	方形周溝墓	古墳	89	71
078	溝	近世	45	37
079	溝	近世	45	
080	溝	近世	45	37
081	竪穴住居	弥生	61	48
082	竪穴住居	弥生	91	72
083	竪穴住居	弥生	93	72,73
084	土坑	弥生	98	75
085	土坑	弥生	98	76
086	土坑	不明	98	76
087	竪穴住居	弥生	96	74,75
088	竪穴住居	弥生	90	71
089	竪穴住居	古墳	100	77,78
090	竪穴住居	弥生	67	51
091	竪穴住居	弥生	87	69,70
092	土坑	近世	98	76
093	土坑	近世	87	69,70
094	土坑	近世	87	69,70
095	土坑	弥生	95	73
096	円形周溝墓?	弥生?	99	77
097	円形周溝墓?	弥生?	99	77
098	竪穴住居	弥生	84	65,66
099	竪穴住居	弥生	84	65,67
100	竪穴住居	弥生	81	59,63
101	ヤナ	弥生?	140	7,108
102	土坑	不明	26	
103	土坑	不明	26	
104	竪穴住居	弥生	76	58

番号	種類	時代	本文	写真
105	竪穴住居	弥生	126	99
106	竪穴住居	弥生	124	98
107	竪穴住居	弥生	127	100
108	竪穴住居	弥生	119	94,95
109	土坑	不明	112	87
110	テラス	弥生	129	99,101
111	土坑	弥生?	128	103
112	竪穴住居	弥生	122	96
113	竪穴住居	弥生	102	79
114	土坑	弥生	118	93
115	溝	近世?	129	101,103
116	溝	近世?	129	101,103
117	溝	近世?	129	101,102
118	溝	近世?	129	101
119	溝	近世?	129	101,102
120	溝	不明		
121	溝	不明	122	98
122	柵列	弥生?	118	93
123	柵列	近世	103	80
124	柵列	近世	103	80
125	溝	近代	45	80
126	開墾跡	近代	25	
127	開墾跡	近世	133	105
128	開墾跡	近世	133	105
129	地震跡	近世	133	105,106
130	土坑	近世?	30	22
131	竪穴住居	弥生	42	31,32
132	土坑群	近世	67	51
133	竪穴住居	弥生	114	89,90
134	竪穴住居	弥生	116	91,92
135	竪穴住居	弥生	74	56
136	土坑	古墳	74	57,58
137	土坑	弥生?	112	87,88
138	土坑	弥生?	112	87,88
139	土坑	弥生?	112	87,88
140	欠番			
141	土坑	古墳	42	31
142	土坑	近世	95	73
143	竪穴住居	中世	86	68
144	土坑	近世	45	37
145	柱穴群	中世	95	73
146	土坑	弥生	93	73
147	ピット群	不明	132	104
148	ピット群	不明	132	104,105
149	柱穴群	不明	62	37
150	土坑	近世	45	
151	溝	近世	87	70
152	溝	近世	45	38

遺物索引

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
0001	YN	壺	75	57	0066	SD	碗	49	40	0131	J	鉢	53	42	0196	YN	甕	100	78
0002	YN	高坏	75	57	0067	HC	塙	49	40	0132	YN	台付甕	64	49	0197	YN	壺	100	78
0003	YN	小型甕	75	57	0068	T	焼締コネ鉢	49	40	0133	YN	小型台付甕	64	50	0198	Y3	甕	100	78
0004	YN	鉢?	75	57	0069	T	陶胎染付碗	49	6	0134	YN	小型鉢	64	49	0199	Y3	甕	100	78
0005	YN	高坏	75	57	0070	Y5	壺	46	33	0135	YN	小型鉢	64	49	0200	Y3	壺	100	78
0006	YN	壺	72	56	0071	Y2	甕	46	36	0136	YN	甕	64	50	0201	Y1	鉢	100	78
0007	Y5	甕	71	54	0072	Y3	甕?	90	71	0137	YN	壺	64	49	0202	Y4	壺鉢?	100	78
0008	HF	小型壺?	70	53	0073	Y4	甕	67	51	0138	YN	甕	64	50	0203	Y3	甕	100	78
0009	YN	小型甕	71	54	0074	YN	小型甕	92	72	0139	YN	有孔鉢?	64	49	0204	HF	柑	100	78
0010	YN	甕	75	57	0075	YN	甕	92	72	0140	Y3	甕	64	50	0205	HF	台付甕	100	78
0011	YN	壺	71	54	0076	Y1	鉢	92	72	0141	Y5	壺	64	50	0206	HF	台付甕	100	78
0012	YN	甕	71	54	0077	Y3	細頸壺	92	72	0142	Y3	壺	64	50	0207	T	飴軸香炉	46	6
0013	YN	鉢?	71	54	0078	Y3	壺	92	72	0143	Y3	壺	64	50	0208	YN	甕	102	79
0014	YN	ミニチュア	75	57	0079	Y5	細頸壺	92	72	0144	Y4	鉢	64	50	0209	Y3	甕	102	79
0015	Y4	鉢	75	8	0080	Y4	壺	92	72	0145	Y2	鉢	64	50	0210	YN	大型壺	102	79
0016	Y4	甕	72	55	0081	Y2	壺	92	72	0146	Y5	壺?	64	50	0211	YN	壺棺	53	7
0017	Y2	甕	72	55	0082	Y4	壺	92	72	0147	J	深鉢	64	50	0212	YN	大型壺	53	43
0018	Y3	甕	71	54	0083	Y3	甕	92	72	0148	Y5	細頸壺	53	42	0213	SD	羽釜	32	23
0019	Y1	甕	72	55	0084	Y5	甕	92	72	0149	J	鉢	53	42	0214	SD	坏	32	23
0020	Y2	甕	72	55	0085	Y3	甕	92	72	0150	J	鉢	53	42	0215	YN	壺	40	28
0021	Y2	壺	72	55	0086	J	深鉢	92	72	0151	YN	台付甕	54	44	0216	Y3	甕	40	28
0022	YN	壺	71	54	0087	YN	大型壺	75	58	0152	YN	高坏	54	44	0217	Y4	甕	40	28
0023	YN	甕	71	54	0088	NK	不明	75	58	0153	YN	壺	54	44	0218	Y5	壺	41	30
0024	Y4	鉢	71	54	0089	HF	台付甕	75	58	0154	YN	高坏	54	44	0219	YN	壺?	40	28
0025	Y3	壺?	71	54	0090	YN	壺?	29	21	0155	J	深鉢	54	44	0220	Y4	鉢	40	28
0026	Y4	鉢	71	55	0091	YN	壺	29	21	0156	Y4	甕	60	47	0221	Y5	鉢	40	28
0027	Y3	細頸壺	71	55	0092	YN	甕?	29	21	0157	Y4	甕	33	24	0222	Y5	鉢	41	30
0028	Y5	壺	71	55	0093	YN	甕	29	21	0158	YN	甕	33	24	0223	Y4	壺	40	28
0029	Y4	壺	71	55	0094	YN	高坏	29	21	0159	YN	高坏	35	25	0224	Y2	甕	41	30
0030	Y3	細頸壺	71	55	0095	Y5	甕	29	21	0160	YN	大型壺	35	25	0225	Y2	深鉢	40	28
0031	Y4	壺?	71	55	0096	YN	台付甕	29	21	0161	YN	匙	35	24	0226	J	鉢	40	28
0032	J	鉢	72	55	0097	Y5	壺	29	21	0162	YN	ミニチュア	35	25	0227	J	鉢	40	28
0033	YN	壺	71	54	0098	Y4	壺	29	21	0163	YN	ミニチュア	35	24	0228	欠番			
0034	Y3	壺	71	55	0099	Y4	壺	29	21	0164	YN	ミニチュア	35	24	0229	J	鉢	40	28
0035	Y5	壺	71	55	0100	Y3	鉢	29	21	0165	YN	ミニチュア	35	24	0230	J	鉢	40	28
0036	Y4	壺?	71	55	0101	YN	大型勾玉	29	21	0166	YN	勾玉	35	25	0231	YN	甕	60	47
0037	YN	壺	71	55	0102	YN	勾玉	29	21	0167	YN	不明土製品	35	24	0232	HF	壺	41	30
0038	Y3	甕	71	55	0103	YN	ラセン状土製品	57	45	0168	YN	匙	35	25	0233	HF	壺	40	28
0039	J	鉢	72	55	0104	YN	土版	57	45	0169	Y4	壺	35	24	0234	YN	紡錘車	96	74
0040	J	鉢	72	55	0105	Y4	小型鉢	57	45	0170	Y1	鉢	35	24	0235	HF	台付甕	40	28
0041	J	鉢?	72	55	0106	Y3	壺	57	45	0171	Y5	甕	35	25	0236	HF	甕	40	28
0042	HF	壺	70	53	0107	Y4	壺	57	45	0172	Y4	壺	35	25	0237	SD	坏	41	30
0043	Y1	鉢	72	55	0108	Y3	甕	57	45	0173	YN	小型鉢	35	8	0238	SD	羽釜	40	28
0044	J	鉢	72	54	0109	Y3	細頸壺	57	45	0174	Y3	甕	89	71	0239	SF	甕	40	28
0045	HD	小型壺	70	53	0110	J	深鉢	57	45	0175	Y3	甕	89	71	0240	HD	繻?	40	28
0046	HF	坏	70	53	0111	Y5	壺	57	45	0176	YN	大型壺	89	71	0241	HD	窯体片	40	28
0047	HF	坏	70	53	0112	HF	小型台付甕	57	45	0177	YN	甕	94	73	0242	T	染付碗	40	6
0048	YN	鉢?	71	54	0113	HF	小型台付甕	57	45	0178	Y4	甕	46	37	0243	T	染付猪口	40	6
0049	Y2	壺	72	55	0114	HF	柑	57	45	0179	Y3	壺	46	37	0244	T	灰軸小皿	40	6
0050	Y3	甕	71	55	0115	YN	勾玉	58	46	0180	HC	泥面子	46	37	0245	NK	家?	98	76
0051	YN	土偶	74	57	0116	YN	壺	59	46	0181	HC	泥面子	46	37	0246	NE	円筒埴輪	86	68
0052	T	青磁碗	70	6	0117	YN	甕	59	46	0182	YN	甕	94	73	0247	NE	円筒埴輪	95	73
0053	YN	匙	71	54	0118	YN	壺	58	46	0183	YN	壺	94	73	0248	J	把手?	64	50
0054	HF	ミニチュア	70	53	0119	YN	甕	58	46	0184	YN	壺	94	73	0249	YN	壺	43	32
0055	YN	壺?	49	40	0120	YN	甕	59	46	0185	YN	小型鉢	94	73	0250	YN	高坏	43	32
0056	YN	勾玉	49	40	0121	YN	小型鉢	59	46	0186	Y3	甕	93	72	0251	YN	小型鉢	43	31
0057	YN	甕	50	41	0122	Y3	壺	60	47	0187	Y4	壺	93	72	0252	YN	ミニチュア	43	31
0058	J	鉢	50	41	0123	Y5	甕	60	47	0188	J	鉢	93	72	0253	YN	甕	43	31
0059	Y3	甕	49	40	0124	欠番				0189	YN	壺	94	73	0254	YN	甕	43	31
0060	Y5	細頸壺	49	40	0125	Y3	甕	60	47	0190	Y5	壺	99	77	0255	Y4	壺甕?	43	31
0061	J	鉢	49	40	0126	Y3	細頸壺	60	47	0191	YN	壺	100	78	0256	Y5	細頸壺	43	31
0062	HD	坏	50	40	0127	YN	甕	65	51	0192	YN	甕	100	78	0257	HF	柑	41	30
0063	HF	台付甕	49	40	0128	Y4	壺	65	51	0193	YN	壺	100	78	0258	YN	小型鉢	43	32
0064	YN	甕	49	40	0129	Y3	壺	65	51	0194	YN	大型壺	100	78	0259	欠番			
0065	SF	高坏	49	40	0130	Y4	壺鉢?	65	51	0195	YN	台付甕	100	78	0260	Y2	壺	86	68

第Ⅷ章 索引

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
0261	T	天目釉鉢	86	6	0326	Y3	甕	28	20	0391	Y2	鉢	82	63	0456	YN	甕	117	92
0262	T	餡釉段皿	86	6	0327	YN	高坏	78	61	0392	J	鉢	82	63	0457	YN	大型壺	117	91
0263	HC	小皿	95	73	0328	YN	大型壺	78	61	0393	Y1	鉢	82	63	0458	YN	小型鉢	117	92
0264	HC	皿	95	73	0329	YN	大型壺	78	61	0394	欠番				0459	YN	高坏	117	92
0265	YN	壺	97	74	0330	YN	甕	79	61	0395	J	鉢	82	63	0460	YN	高坏	117	92
0266	YN	大型壺	97	74	0331	YN	大型壺	79	61	0396	J	深鉢	83	64	0461	YN	壺	117	92
0267	YN	甕	97	75	0332	YN	甕	79	61	0397	J	鉢	82	63	0462	YN	小型台付甕	117	92
0268	Y5	壺	97	75	0333	YN	甕	79	61	0398	J	鉢	82	63	0463	YN	小型甕	117	92
0269	YN	小型鉢	97	75	0334	YN	高坏	78	60	0399	J	深鉢	82	63	0464	YN	匙?	117	91
0270	YN	小型甕	97	75	0335	YN	高坏	78	60	0400	YN	甕	85	66	0465	Y3	甕	117	91
0271	YN	大型壺	97	75	0336	YN	壺	79	61	0401	YN	壺	85	66	0466	Y2	鉢	117	91
0272	YN	甕	97	75	0337	YN	高坏	79	61	0402	YN	甕	85	66	0467	J	鉢	117	91
0273	YN	台付甕	97	75	0338	YN	甕	79	61	0403	YN	甕	85	66	0468	J	鉢	117	91
0274	YN	壺	96	74	0339	YN	壺	78	61	0404	YN	高坏?	85	66	0469	YN	甕	117	92
0275	YN	甕	97	75	0340	YN	小型甕	79	61	0405	YN	甕	85	66	0470	YN	大型壺	120	95
0276	YN	小型甕	97	75	0341	YN	大型壺	79	61	0406	YN	甕	84	65	0471	YN	大型壺	120	95
0277	YN	高坏	97	75	0342	欠番				0407	J	深鉢	85	66	0472	YN	甕	120	95
0278	YN	台付甕	96	74	0343	YN	小型甕	79	61	0408	Y4	甕	84	65	0473	YN	大型壺	120	95
0279	YN	甕	96	74	0344	YN	甕	79	61	0409	Y3	甕	85	66	0474	YN	壺	119	94
0280	YN	壺	96	74	0345	YN	甕	79	61	0410	Y1	鉢	84	65	0475	YN	台付甕	120	95
0281	Y5	甕	96	74	0346	YN	甕	79	62	0411	Y1	鉢	84	65	0476	YN	甕	120	95
0282	Y2	壺	96	74	0347	YN	小型甕	79	62	0412	J	鉢	84	65	0477	YN	甕	119	94
0283	YN	ミニチュア	96	74	0348	YN	甕	78	60	0413	Y3	壺	84	65	0478	YN	壺	120	95
0284	YN	ミニチュア	96	74	0349	J	鉢	78	60	0414	J	鉢	84	65	0479	YN	壺	119	94
0285	YN	甕	96	74	0350	Y4	壺	80	62	0415	J	深鉢	84	65	0480	YN	甕	119	94
0286	Y5	甕	97	75	0351	J	深鉢	80	62	0416	J	鉢	84	65	0481	YN	甕	119	94
0287	Y4	壺	96	74	0352	J	深鉢	80	62	0417	J	鉢	84	65	0482	Y1	甕	119	94
0288	Y3	鉢	96	74	0353	YN	勾玉	78	60	0418	J	鉢	84	65	0483	YN	壺	119	94
0289	J	鉢	96	74	0354	YN	大型勾玉	78	60	0419	YN	大型壺	85	67	0484	Y2	甕	119	94
0290	YN	壺	43	31	0355	SD	碗	78	60	0420	YN	甕	85	67	0485	Y3	壺	119	94
0291	Y4	甕	98	76	0356	YN	甕	79	62	0421	YN	小型鉢	85	67	0486	J	鉢	119	94
0292	J	深鉢	98	76	0357	YN	小型鉢	79	62	0422	YN	鉢	85	67	0487	Y4	甕	119	94
0293	HC	塙	98	76	0358	YN	甕	78	60	0423	Y5	甕	85	67	0488	Y4	壺鉢?	119	94
0294	YN	甕	95	73	0359	YN	有孔鉢	78	60	0424	J	鉢	85	67	0489	Y4	壺鉢?	119	94
0295	YN	壺	87	69	0360	J	把手?	78	60	0425	Y3	壺	85	67	0490	J	鉢	120	95
0296	YN	大型壺	88	69	0361	Y4	壺?	78	60	0426	Y2	鉢	85	67	0491	J	鉢	119	94
0297	YN	小型甕	88	70	0362	Y4	壺	78	60	0427	Y1	鉢	85	67	0492	HF	小型高坏	119	94
0298	YN	甕	88	70	0363	J	壺	78	60	0428	YN	高坏	115	89	0493	HF	台付甕	119	94
0299	YN	広口壺	87	69	0364	Y4	鉢	78	60	0429	YN	甕	107	83	0494	YN	紡錘車	119	94
0300	Y5	甕	88	70	0365	Y2	深鉢	80	62	0430	YN	甕	115	90	0495	YN	勾玉	119	94
0301	Y4	壺	87	69	0366	Y4	壺	80	62	0431	YN	甕	115	90	0496	YN	大型壺	122	96
0302	Y3	甕	87	69	0367	YN	甕	79	62	0432	YN	小型鉢	115	90	0497	YN	大型壺	122	97
0303	Y3	壺	87	69	0368	YN	ミニチュア	100	78	0433	YN	壺	115	90	0498	YN	大型壺	123	97
0304	J	深鉢	87	69	0369	YN	壺	102	8,79	0434	YN	台付甕	115	90	0499	YN	大型壺	123	97
0305	欠番				0370	欠番				0435	YN	高坏	115	90	0500	YN	壺	123	97
0306	T	志野皿	46	6	0371	YN	有孔土版	64	49	0436	YN	壺	115	90	0501	YN	壺	123	97
0307	Y5	甕	71	55	0372	YN	台付甕	82	64	0437	YN	甕	115	90	0502	YN	甕	123	97
0308	欠番				0373	YN	大型壺	82	64	0438	Y5	甕	115	89	0503	YN	壺	123	97
0309	YN	甕	36	26	0374	YN	甕	82	64	0439	YN	甕	115	89	0504	YN	甕	123	97
0310	YN	甕	36	26	0375	YN	甕	82	64	0440	YN	甕	115	90	0505	YN	甕	123	98
0311	YN	小壺	36	26	0376	YN	大型壺	82	63	0441	Y3	壺	115	90	0506	YN	壺	122	96
0312	YN	壺	36	26	0377	YN	甕	82	63	0442	Y4	壺	115	89	0507	YN	壺	122	96
0313	Y5	壺	36	26	0378	YN	甕	82	64	0443	Y4	壺	115	90	0508	YN	甕	122	96
0314	YN	壺	36	26	0379	YN	大型壺	82	63	0444	J	鉢	115	90	0509	YN	高坏	123	97
0315	Y5	甕	36	26	0380	Y1	壺	82	63	0445	YN	甕	36	26	0510	YN	壺	123	8,97
0316	Y4	鉢	36	26	0381	YN	勾玉	82	63	0446	YN	壺	76	59	0511	YN	甕	123	8,97
0317	YN	壺	36	26	0382	YN	勾玉	82	63	0447	YN	壺	76	59	0512	YN	壺	123	97
0318	YN	高坏	66	51	0383	YN	甕	82	64	0448	J	鉢	76	59	0513	YN	匙?	122	96
0319	YN	壺	26	20	0384	YN	高坏	82	64	0449	Y3	壺	76	58	0514	Y3	甕	122	96
0320	YN	壺	28	20	0385	YN	高坏?	82	64	0450	Y3	甕	76	58	0515	J	鉢	123	98
0321	YN	ミニチュア	28	20	0386	YN	大型壺	83	64	0451	Y4	甕	76	58	0516	YN	甕	125	98
0322	YN	ミニチュア	28	20	0387	Y3	壺	82	63	0452	Y4	壺鉢?	76	58	0517	YN	高坏	125	98
0323	YN	ミニチュア	28	20	0388	Y2	深鉢	82	63	0453	J	鉢	76	58	0518	YN	甕	125	98
0324	Y5	壺	28	20	0389	YN	壺	82	63	0454	YN	壺	117	92	0519	YN	小型甕	125	98
0325	Y3	甕	28	20	0390	Y4	壺?	82	63	0455	YN	台付甕	117	92	0520	YN	甕	125	8,98

遺物索引

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
0521	Y 5	甕?	125	98	0571	YN	壺	111	86	0621	YN	甕	148	112	0671	Y 4	甕	135	107
0522	YN	甕	125	98	0572	YN	甕	109	84	0622	YN	壺	148	112	0672	Y 4	壺	135	107
0523	YN	ミニチュア	125	98	0573	YN	甕	109	84	0623	Y 5	甕	167	123	0673	Y 4	鉢	135	107
0524	YN	小型甕	125	98	0574	YN	壺	109	84	0624	HF	椀	158	118	0674	Y 4	壺鉢?	135	107
0525	YN	壺	125	98	0575	YN	ミニチュア	111	86	0625	HD	鉄鉢	158	118	0675	Y 4	壺	135	107
0526	Y 5	細頸壺	125	98	0576	Y 3	甕?	109	84	0626	HF	壺	148	112	0676	YN	壺?	135	107
0527	T	志野皿	125	6	0577	YN	勾玉	111	86	0627	J	鉢	148	112	0677	HF	甕	135	107
0528	YN	甕	118	93	0578	YN	壺	111	86	0628	HF	坏	158	118	0678	SF	甕	135	107
0529	YN	大型壺	118	93	0579	Y 4	壺	109	84	0629	J	鉢	158	118	0679	SF	坏蓋	135	107
0530	YN	甕	118	93	0580	Y 4	甕	109	84	0630	HF	壺	164	121	0680	T	灰軸瓶	135	6
0531	YN	壺	126	99	0581	Y 1	甕	109	84	0631	HF	台付甕	158	118	0681	T	透明軸鉢	135	6
0532	YN	小型鉢	126	99	0582	Y 4	壺	109	84	0632	J	鉢?	167	123	0682	T	染付碗	135	6
0533	YN	壺	126	99	0583	Y 5	壺	109	84	0633	J	鉢	167	123	0683	Y 4	甕	134	106
0534	YN	壺	126	99	0584	YN	壺	109	84	0634	Y 3	甕?	167	123	0684	YN	転用紡錘車?	134	106
0535	YN	大型壺	126	99	0585	YN	甕	111	86	0635	Y 3	甕?	167	123	0685	NK	器材	50	40
0536	YN	小型台付甕	126	99	0586	YN	小型甕	111	86	0636	Y 4	鉢	167	123	0686	NK	器材	135	107
0537	YN	壺	126	99	0587	YN	甕	109	84	0637	J	鉢	167	123	0687	NK	器材	50	40
0538	YN	蓋	126	99	0588	YN	壺	107	83	0638	Y 3	壺	167	123	0688	NK	器材	49	40
0539	YN	ミニチュア	126	99	0589	YN	壺	107	83	0639	G	コネ鉢	148	112	0689	NE	円筒	71	54
0540	YN	ミニチュア	126	99	0590	YN	壺	107	83	0640	J	鉢	167	123	0690	NE	朝顔	134	106
0541	YN	甕	126	99	0591	YN	甕	107	83	0641	J	鉢	167	123	0691	NK	巫女	70	53
0542	YN	ミニチュア	126	99	0592	J	深鉢	107	83	0642	J	鉢	148	112	0692	NK	人物	131	102
0543	YN	小型鉢	126	99	0593	Y 2	甕	107	83	0643	J	鉢	158	118	0693	NK	人物	70	53
0544	YN	ミニチュア	126	99	0594	YN	甕	107	83	0644	J	鉢	158	118	0694	NK	男子	70	53
0545	YN	紡錘車	126	99	0595	YN	小型鉢	107	83	0645	J	鉢	167	123	0695	NK	男子	70	53
0546	YN	小型鉢	128	100	0596	T	銷軸油皿	107	6	0646	J	鉢	158	118	0696	NK	鞠	70	53
0547	YN	壺	128	100	0597	YN	小型甕	105	81	0647	J	深鉢	148	112	0697	NK	鞠	70	53
0548	Y 5	小型広口鉢	128	100	0598	YN	甕?	105	81	0648	J	鉢	167	123	0698	NK	鞠	49	40
0549	YN	甕	128	100	0599	YN	甕	105	81	0649	J	管状土製品	148	112	0699	NK	人物	70	53
0550	Y 5	壺	128	100	0600	YN	壺	105	81	0650	J	鉢	158	118	0700	NK	家	71	53
0551	YN	壺	128	100	0601	YN	高坏	105	82	0651	Y 5	壺	167	123	0701	NK	桶	50	41
0552	YN	壺	128	100	0602	Y 3	壺	105	81	0652	SF	甕	169	125	0702	NK	桶	49	40
0553	YN	ミニチュア	128	100	0603	Y 3	甕	60	47	0653	J	深鉢	148	112	0703	NK	桶	49	40
0554	YN	匙	128	100	0604	Y 5	壺	60	47	0654	SD	瓶類	148	112	0704	NK	桶	70	53
0555	YN	甕	110	85	0605	Y 5	甕	60	47	0655	J	鉢?	137	108	0705	NK	馬	71	53
0556	YN	甕	110	85	0606	Y 1	壺	60	47	0656	Y 2	鉢	137	108	0706	NK	巫女?	74	52
0557	YN	甕	110	85	0607	Y 4	壺	56	44	0657	T	染付碗	136	6	0707	NK	馬	70	53
0558	YN	小型甕	110	85	0608	Y 4	壺	56	44	0658	J	鉢	136	108	0708	NK	太刀	70	53
0559	YN	鉢	110	85	0609	Y 3	甕?	56	44	0659	J	鉢	135	107	0709	NK	太刀	70	53
0560	YN	壺	110	85	0610	Y 4	甕	61	48	0660	J	深鉢	135	107	0710	NK	器材	50	41
0561	YN	広口壺	110	85	0611	YN	壺	148	112	0661	J	鉢	135	107	0711	NK	劍	57	45
0562	YN	壺	110	85	0612	YN	壺	148	112	0662	J	鉢	135	107	0712	NK	太刀?	70	53
0563	YN	高坏?	109	84	0613	YN	壺	148	112	0663	J	鉢	135	107	0713	NK	家	71	53
0564	YN	壺	109	84	0614	J	深鉢	158	118	0664	Y 2	深鉢	135	107	0714	NE	朝顔	71	54
0565	Y 5	甕	109	84	0615	HF	甕	148	112	0665	YN	壺	135	107	0715	NK	人物	70	54
0566	YN	甕?	109	84	0616	YN	大型壺	148	112	0666	YN	甕	135	107	0716	NK	駒	71	54
0567	YN	有孔鉢	110	86	0617	Y 5	甕	164	121	0667	J	鉢?	135	107	0717	NK	馬	70	54
0568	YN	壺	110	86	0618	YN	壺	148	112	0668	J	鉢?	135	107	0718	NK	駒	50	41
0569	YN	壺	109	84	0619	HF	台付甕	158	118	0669	J	鉢	135	107	0719	Y 3	甕	148	112
0570	YN	壺	110	86	0620	YN	小型壺	148	112	0670	Y 5	甕?	135	107	0720	NK	器材	50	41

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
2001	打製石斧	硬質泥岩	67	51	2014	磨り石(板状)	砂岩	72	55
2002	磨り石(小判状)	砂岩	75	57	2015	打製石斧	硬質泥岩	46	33
2003	磨り石(戈状)	砂岩	75	57	2016	打製石斧	変質安山岩	46	33
2004	磨り石(戈状)	砂岩	75	57	2017	打製石斧	緑色片岩	55	44
2005	磨り石(円錐状)	粗粒安山岩	75	57	2018	磨り石(磨製石斧状)	緑色片岩	46	34
2006	磨り石(凹石状)	黒色片岩	75	57	2019	凹石	砂岩	32	23
2007	多孔石	砂岩	74	56	2020	磨り石	砂岩	53	42
2008	打製石斧	粗粒安山岩	75	57	2021	磨り石	緑色片岩	53	42
2009	打製石斧	硬質泥岩	72	55	2022	磨り石(石包丁状)	牛伏砂岩	32	23
2010	削器	硬質泥岩	72	55	2023	磨り石(棒状)	雲母石英片岩	28	20
2011	石包丁(打製)	輝緑凝灰岩(アズキ色)	72	56	2024	磨り石(敲き石)	雲母石英片岩	26	20
2012	紡錘車	砂岩	72	55	2025	砥石	牛伏砂岩	104	81
2013	打製石斧	硬質泥岩	72	55	2026	磨り石(棒状)	雲母石英片岩	107	83

第Ⅷ章 索引

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
2027	磨り石 (球状)	粗粒安山岩	107	83	2092	打製石斧	黒色安山岩	40	28
2028	磨り石? (板状)	雲母石英片岩	107	83	2093	打製石斧	黒色片岩	40	28
2029	打製石斧	雲母石英片岩	107	83	2094	砥石	砂岩	41	28
2030	磨り石 (剣状)	牛伏砂岩	107	82	2095	磨り石 (棒状)	黒色片岩	41	28
2031	打製石斧	硬質泥岩	111	86	2096	打製石斧	粗粒安山岩	92	72
2032	五輪塔 (空風輪)	緑色片岩	110	84	2097	磨り石 (球形)	粗粒安山岩	93	72
2033	石核	硬質泥岩	111	86	2098	敲き石	粗粒安山岩	97	75
2034	打製石斧	雲母石英片岩	111	86	2099	磨り石 (棒状)	黒色片岩	97	75
2035	打製石斧	硬質泥岩	111	86	2100	磨り石 (小円盤)	牛伏砂岩	97	75
2036	磨り石? (小板状)	黒色片岩	111	86	2101	磨り石 (方形板状)	牛伏砂岩	96	74
2037	石鎌	珪質準片岩	110	84	2102	磨り石 (石包丁状)	牛伏砂岩	96	74
2038	磨り石 (円盤状)	黒色片岩	111	86	2103	多孔石	黒色片岩	96	74
2039	打製石斧	硬質泥岩	109	84	2104	打製石斧	変質安山岩	100	78
2040	磨り石 (磨製石斧状)	緑色片岩	110	84	2105	磨り石 (石包丁状)	黒色片岩	100	78
2041	磨り石 (小判形)	牛伏砂岩	110	84	2106	石剣	珪質準片岩	88	70
2042	打製石斧	硬質泥岩	109	84	2107	打製石斧	黒色片岩	87	69
2043	打製石斧	硬質泥岩	109	85	2108	磨り石 (卵形)	黒色安山岩	87	69
2044	打製石斧	硬質泥岩	110	85	2109	磨り石 (卵形)	珪質頁岩	87	69
2045	打製石斧?	硬質泥岩	110	85	2110	打製石斧	硬質泥岩	84	65
2046	打製石斧	硬質泥岩	50	41	2111	打製石斧	粗粒安山岩	84	65
2047	削器	硬質泥岩	49	40	2112	磨り石 (石包丁状)	牛伏砂岩	85	67
2048	磨り石 (把手状)	牛伏砂岩	49	40	2113	打製石斧	硬質泥岩	85	67
2049	打製石斧	硬質泥岩	49	40	2114	磨り石 (棒状)	黒色片岩	85	67
2050	凹石	雲母石英片岩	33	24	2115	砥石	牛伏砂岩	82	63
2051	多孔石	緑色片岩	33	24	2116	打製石斧	硬質泥岩	82	63
2052	磨り石 (敲き石)	雲母石英片岩	105	81	2117	磨り石 (小型棒状)	緑色片岩	119	94
2053	磨り石 (棒状)	雲母石英片岩	105	82	2118	磨り石 (石包丁状)	牛伏砂岩	76	58
2054	削器	硬質泥岩	59	46	2119	磨り石 (球形)	粗粒安山岩	126	99
2055	磨り石 (棒状)	硬質泥岩	58	46	2120	石包丁 (打製)	珪質準片岩	125	98
2056	磨り石 (板状)	黒色片岩	59	46	2121	磨製石斧 (蛤刃形)	変輝緑岩	125	98
2057	磨り石 (円盤状)	雲母石英片岩	59	46	2122	砥石	牛伏砂岩	125	98
2058	打製石斧	硬質泥岩	58	46	2123	打製石斧	珪質頁岩	125	98
2059	打製石斧	硬質泥岩	57	45	2124	磨り石 (棒状)	緑色片岩	128	100
2060	打製石斧	砂岩	57	45	2125	砥石	牛伏砂岩	128	100
2061	打製石斧	硬質泥岩	131	101	2126	打製石斧	硬質泥岩	119	94
2062	打製石斧	硬質泥岩	131	101	2127	不明アテ具	石膏?	120	95
2063	石核	硬質泥岩	30	22	2128	石包丁 (磨製)	珪質準片岩	120	95
2064	磨り石	変質安山岩	30	22	2129	紡錘車未製品	砂岩	120	95
2065	砥石	砥沢石	131	103	2130	打製石斧	変質安山岩	120	95
2066	打製石斧	粗粒安山岩	60	47	2131	磨り石 (石包丁状)	緑色片岩	120	95
2067	打製石斧	硬質泥岩	65	51	2132	砥石	牛伏砂岩	120	95
2068	敲き石	変質安山岩	36	26	2133	砥石	牛伏砂岩	120	95
2069	磨り石 (円盤状)	雲母石英片岩	35	25	2134	磨り石 (棒状)	緑色片岩	131	102
2070	磨り石? (板状)	雲母石英片岩	35	25	2135	打製石斧	硬質泥岩	131	102
2071	磨り石 (板状)	牛伏砂岩	35	25	2136	磨り石 (円筒状)	粗粒安山岩	123	98
2072	打製石斧	硬質泥岩	35	24	2137	打製石斧	硬質泥岩	123	98
2073	磨り石 (棒状)	黒色片岩	35	25	2138	砥石	流紋岩	123	98
2074	磨り石	牛伏砂岩	35	24	2139	石剣?	珪質準片岩	122	96
2075	磨り石 (棒状)	雲母石英片岩	80	62	2140	磨り石 (石包丁状)	流紋岩	43	32
2076	多孔石	緑色片岩	80	62	2141	打製石斧	珪質頁岩	43	32
2077	打製石斧	変質安山岩	80	62	2142	磨り石 (棒状)	雲母石英片岩	115	90
2078	磨り石 (棒状)	雲母石英片岩	80	62	2143	磨り石 (砥石状)	牛伏砂岩	115	90
2079	削器	硬質泥岩	80	62	2144	砥石	牛伏砂岩	115	89
2080	打製石斧	粗粒安山岩	80	62	2145	磨り石 (方形板状)	牛伏砂岩	115	89
2081	磨り石 (棒状)	黒色片岩	78	60	2146	磨り石 (剣形状)	牛伏砂岩	115	89
2082	磨り石 (小判状)	変輝緑岩	78	60	2147	削器	硬質泥岩	115	89
2083	磨り石 (棒状)	雲母石英片岩	78	60	2148	磨り石 (石包丁状)	牛伏砂岩	117	92
2084	磨り石 (棒状)	雲母石英片岩	78	60	2149	打製石斧	硬質泥岩	112	88
2085	磨り石 (棒状)	黒色片岩	78	60	2150	磨り石 (棒状)	雲母石英片岩	43	32
2086	砥石	牛伏砂岩	62	49	2151	打製石斧	変質安山岩	43	31
2087	磨り石 (板状)	雲母石英片岩	64	50	2152	打製石斧	雲母石英片岩	43	31
2088	磨り石 (扁平棒状)	雲母石英片岩	64	50	2153	打製石斧	細粒安山岩	132	104
2089	磨り石? (小型方形)	黒色片岩	64	50	2154	硯	珪質頁岩 (軟質)	135	107
2090	磨り石 (棒状)	雲母石英片岩	64	50	2155	砥石	砂岩	135	107
2091	砥石	砥沢石	40	28	2156	打製石斧	硬質泥岩	136	107

遺物索引

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
2157	打製石斧	細粒安山岩	134	106	2190	打製石斧	硬質泥岩	162	120
2158	砥石	粗粒安山岩	135	107	2191	打製石斧	雲母石英片岩	162	120
2159	打製石斧	珪質頁岩	49	40	2192	打製石斧?	硬質泥岩	162	120
2160	凹石	牛伏砂岩	72	55	2193	打製石斧	硬質泥岩	164	121
2161	打製石斧	細粒安山岩	134	106	2194	打製石斧	雲母石英片岩	164	121
2162	打製石斧	硬質泥岩	49	40	2195	打製石斧	硬質泥岩	162	120
2163	小円盤形石製品	流紋岩	134	106	2196	削器	硬質泥岩	158	118
2164	磨り石(石包丁状)	牛伏砂岩	49	40	2197	削器	硬質泥岩	158	118
2165	磨り石(棒状)	緑色片岩	135	107	2198	打製石斧	硬質泥岩	158	118
2166	砥石	黒色片岩	135	107	2199	打製石斧	硬質泥岩	158	118
2167	砥石(戈状)	牛伏砂岩	135	107	2200	打製石斧	雲母石英片岩	164	121
2168	打製石斧	硬質泥岩	53	42	2201	石核	硬質泥岩	167	123
2169	削器?	硬質泥岩	136	107	2202	打製石斧	変玄武岩	137	108
2170	打製石斧	変玄武岩	136	107	2203	打製石斧	硬質泥岩	137	108
2171	打製石斧	硬質泥岩	136	107	2204	打製石斧	硬質泥岩	137	108
2172	打製石斧	変玄武岩	136	108	2205	打製石斧	粗粒安山岩	137	108
2173	砥石	砥沢石	136	108	2206	磨り石(石包丁状)	牛伏砂岩	72	55
2174	杓	牛伏砂岩	136	108	2207	磨り石?(小型板状)	雲母石英片岩	93	72
2175	打製石斧	硬質泥岩	136	108	2208	磨り石(棒状)	雲母石英片岩	126	99
2176	打製石斧	硬質泥岩	136	108	2209	磨り石(石包丁状)	牛伏砂岩	135	107
2177	打製石斧	硬質泥岩	148	112	2210	垂飾	変質蛇紋岩	72	6
2178	打製石斧	硬質泥岩	148	112	2211	管玉	珪質頁岩	72	6
2179	磨り石(棒状)	緑色片岩	149	112	2212	管玉	珪質頁岩	54	6
2180	打製石斧	硬質泥岩	149	112	2213	管玉	滑石	64	6
2181	打製石斧	硬質泥岩	149	112	2214	白玉	蛇紋岩	137	6
2182	打製石斧	硬質泥岩	149	112	2215	紡錘車	硬質泥岩	115	89
2183	削器	硬質泥岩	149	112	2216	砥石	牛伏砂岩	115	90
2184	打製石斧	硬質泥岩	158	118	2217	磨り石(板状)	牛伏砂岩	122	96
2185	打製石斧?	変輝緑岩	158	118	2218	紡錘車	流紋岩質凝灰岩	126	99
2186	打製石斧	硬質泥岩	158	118	2219	紡錘車未製品	牛伏砂岩	119	94
2187	打製石斧	黒色安山岩	167	123	2220	磨り石(磨製石斧状)	頁岩	167	123
2188	打製石斧?	変質安山岩	167	123	2221	勾玉	珪質頁岩	64	50
2189	石核	粗粒安山岩	164	121	2222	自然剥片	珪質頁岩	120	95

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
3001	剥片	黒曜石	なし	108	3031	剥片	黒曜石	なし	108	3061	剥片	黒曜石	なし	108
3002	剥片	黒曜石	なし	108	3032	剥片	黒曜石	なし	108	3062	剥片	黒曜石	なし	108
3003	剥片	黒曜石	なし	108	3033	剥片	黒曜石	なし	108	3063	剥片	黒曜石	なし	108
3004	剥片	黒曜石	なし	108	3034	剥片	黒曜石	なし	108	3064	剥片	黒曜石	なし	108
3005	剥片	黒曜石	なし	108	3035	剥片	黒曜石	なし	108	3065	剥片	黒曜石	なし	108
3006	剥片	黒曜石	なし	108	3036	剥片	黒曜石	なし	108	3066	剥片	黒曜石	なし	108
3007	剥片	黒曜石	なし	108	3037	剥片	黒曜石	なし	108	3067	剥片	黒曜石	なし	108
3008	剥片	黒曜石	なし	108	3038	剥片	黒曜石	なし	108	3068	剥片	黒曜石	なし	108
3009	剥片	黒曜石	なし	108	3039	加工痕ある剥片	黒曜石	92	72	3069	剥片	黒曜石	なし	108
3010	剥片	黒曜石	なし	108	3040	剥片	黒曜石	なし	108	3070	剥片	黒曜石	83	64
3011	剥片	黒曜石	なし	108	3041	剥片	黒曜石	なし	108	3071	石核	黒曜石	83	64
3012	剥片	黒曜石	なし	108	3042	剥片	黒曜石	なし	108	3072	剥片	黒曜石	なし	108
3013	剥片	黒曜石	なし	108	3043	加工痕ある剥片	黒曜石	93	72	3073	剥片	黒曜石	なし	108
3014	剥片	黒曜石	なし	108	3044	剥片	黒曜石	なし	108	3074	剥片	黒曜石	なし	108
3015	剥片	黒曜石	なし	108	3045	石鏃	黒曜石	90	71	3075	剥片	黒曜石	なし	108
3016	剥片	黒曜石	なし	108	3046	剥片	黒曜石	なし	108	3076	剥片	黒曜石	なし	108
3017	剥片	黒曜石	なし	108	3047	剥片	黒曜石	なし	108	3077	剥片	黒曜石	なし	108
3018	剥片	黒曜石	なし	108	3048	剥片	黒曜石	なし	108	3078	剥片	黒曜石	なし	108
3019	剥片	黒曜石	なし	108	3049	剥片	黒曜石	なし	108	3079	剥片	黒曜石	なし	108
3020	剥片	黒曜石	なし	108	3050	剥片	黒曜石	なし	108	3080	剥片	黒曜石	なし	108
3021	剥片	黒曜石	なし	108	3051	剥片	黒曜石	なし	108	3081	剥片	黒曜石	なし	108
3022	剥片	黒曜石	なし	108	3052	剥片	黒曜石	なし	108	3082	剥片	黒曜石	なし	108
3023	剥片	黒曜石	なし	108	3053	剥片	黒曜石	なし	108	3083	剥片	黒曜石	なし	108
3024	剥片	黒曜石	なし	108	3054	加工痕ある剥片	黒曜石	100	78	3084	剥片	黒曜石	なし	108
3025	剥片	黒曜石	なし	108	3055	石鏃	黒曜石	100	78	3085	剥片	黒曜石	なし	108
3026	剥片	黒曜石	なし	108	3056	剥片	黒曜石	なし	108	3086	剥片	黒曜石	なし	108
3027	剥片	黒曜石	なし	108	3057	剥片	黒曜石	なし	108	3087	剥片	黒曜石	なし	108
3028	剥片	黒曜石	なし	108	3058	剥片	黒曜石	なし	108	3088	剥片	黒曜石	なし	108
3029	剥片	黒曜石	なし	108	3059	剥片	黒曜石	なし	108	3089	剥片	黒曜石	なし	108
3030	剥片	黒曜石	なし	108	3060	石鏃有茎	黒曜石	84	65	3090	石鏃有茎	黒曜石	115	89

第Ⅷ章 索引

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
3091	剥片	黒曜石	なし	108	3155	剥片	黒曜石	なし	40	3219	剥片	黒曜石	なし	95
3092	石鏃	黒曜石	80	62	3156	剥片	黒曜石	なし	40	3220	剥片	黒曜石	なし	95
3093	石鏃有茎	黒曜石	93	72	3157	剥片	黒曜石	なし	40	3221	剥片	黒曜石	なし	95
3094	石鏃有茎	黒曜石	83	64	3158	剥片	チャート	なし	41	3222	剥片	黒曜石	123	98
3095	石核	黒曜石	93	72	3159	剥片	黒曜石	なし	40	3223	剥片	黒曜石	なし	98
3096	石核	黒曜石	111	86	3160	剥片	チャート	なし	40	3224	剥片	黒曜石	なし	79
3097	ピエスキュー	黒曜石	149	112	3161	剥片	チャート・玉髄	なし	40	3225	剥片	黒曜石	なし	79
3098	石鏃有茎	黒曜石	72	56	3162	剥片	チャート	なし	40	3226	剥片	黒曜石	なし	79
3099	石鏃	黒曜石	53	42	3163	剥片	硬質頁岩	なし	41	3227	剥片	チャート	なし	32
3100	石鏃有茎	黒曜石	28	20	3164	剥片	黒曜石	なし	44	3228	剥片	黒曜石	なし	90
3101	石鏃	黒曜石	50	41	3165	剥片	チャート	なし	24	3229	剥片	黒曜石	なし	90
3102	石鏃	黒曜石	49	40	3166	剥片	黒曜石	なし	81	3230	剥片	黒曜石	なし	90
3103	石鏃有茎	チャート	49	40	3167	剥片	チャート	なし	81	3231	剥片	黒曜石	なし	89
3104	石鏃	黒曜石	49	40	3168	剥片	黒曜石	なし	45	3232	剥片	チャート	なし	90
3105	石鏃有茎	黒色頁岩	49	40	3169	剥片	黒曜石	なし	45	3233	剥片	チャート	なし	89
3106	石鏃	チャート	50	41	3170	剥片	チャート	なし	45	3234	剥片	チャート・ 赤色珪質岩	なし	89
3107	石匙	チャート	50	41	3171	剥片	黒曜石	なし	103	3235	剥片	黒曜石	なし	73
3108	石匙	黒曜石	57	45	3172	剥片	黒曜石	なし	47	3236	剥片	チャート	なし	73
3109	石鏃	チャート	35	24	3173	剥片	黒曜石	なし	47	3237	剥片	黒曜石	なし	37
3110	磨製石鏃	珪質準片岩	78	60	3174	剥片	チャート	なし	56	3238	剥片	チャート	なし	37
3111	石鏃	黒曜石	41	28	3175	剥片	チャート	なし	48	3239	剥片	チャート	なし	104
3112	石鏃	チャート	41	28	3176	剥片	黒曜石	なし	51	3240	剥片	チャート	なし	107
3113	石匙	チャート	92	72	3177	剥片	黒曜石	なし	51	3241	剥片	玉髄	なし	107
3114	石鏃有茎	珪質凝灰岩	85	66	3178	剥片	チャート	なし	36	3242	剥片	黒曜石	なし	107
3115	石鏃	チャート	82	63	3179	加工痕ある剥片	黒曜石	36	26	3243	剥片	黒曜石	なし	107
3116	石鏃	赤色珪質岩	82	63	3180	剥片	黒曜石	なし	26	3244	剥片	黒曜石	なし	107
3117	石鏃	黒曜石	76	58	3181	剥片	チャート	なし	25	3245	剥片	チャート	なし	107
3118	石鏃	チャート	128	100	3182	剥片	チャート	なし	24	3246	剥片	黒曜石	なし	107
3119	石鏃	黒曜石	102	79	3183	剥片	チャート	78	60	3247	剥片	黒曜石	なし	107
3120	石鏃有茎	チャート	115	90	3184	剥片	黒曜石	なし	62	3248	剥片	黒曜石	なし	56
3121	加工痕ある剥片	チャート	115	89	3185	剥片	チャート	なし	62	3249	剥片	黒曜石	なし	106
3122	ピエスキュー	チャート	115	89	3186	剥片	黒曜石	なし	50	3250	剥片	黒曜石	なし	40
3123	石鏃有茎	黒曜石	46	37	3187	石核	黒曜石	41	30	3251	剥片	黒曜石	なし	56
3124	石鏃	チャート	136	107	3188	剥片	チャート	なし	30	3252	剥片	黒曜石	なし	56
3125	石鏃	黒曜石	136	107	3189	剥片	黒曜石	なし	28	3253	剥片	黒曜石	なし	42
3126	石鏃	チャート	136	107	3190	剥片	黒曜石	なし	29	3254	剥片	黒曜石	なし	48
3127	石鏃	チャート	136	107	3191	剥片	黒曜石・玉髄・ 赤色珪質岩	なし	29	3255	剥片	チャート	なし	105
3128	石鏃	黒曜石	136	107	3192	剥片	黒曜石	なし	37	3256	剥片	黒曜石	なし	107
3129	石鏃有茎	黒曜石	136	107	3193	剥片	黒曜石	92	72	3257	剥片	黒曜石	なし	107
3130	石鏃有茎	黒曜石	67	51	3194	剥片	チャート	なし	72	3258	剥片	黒曜石	なし	46
3131	石匙	チャート	136	107	3195	磨製石斧	蛇紋岩	92	72	3259	剥片	チャート	なし	46
3132	石鏃有茎	黒曜石	28	20	3196	剥片	黒曜石	なし	72	3260	剥片	黒曜石	なし	107
3133	石鏃	黒曜石	28	20	3197	剥片	チャート	なし	75	3261	剥片	黒曜石	なし	119
3134	石鏃	赤色珪質岩	162	120	3198	剥片	チャート	なし	74	3262	加工痕ある剥片	珪質頁岩	149	112
3135	石鏃	珪質頁岩	53	42	3199	剥片	黒曜石	なし	78	3263	石匙	チャート	162	120
3136	石鏃	チャート	107	83	3200	剥片	黒曜石	なし	51	3264	剥片	チャート	なし	56
3137	剥片	黒曜石	なし	56	3201	剥片	チャート	なし	70	3265	剥片	チャート	なし	44
3138	剥片	黒曜石	なし	56	3202	剥片	赤色珪質岩	なし	69	3266	原石	チャート	なし	101
3139	剥片	黒曜石	なし	56	3203	剥片	黒曜石	なし	70	3267	剥片	チャート	なし	26
3140	剥片	チャート・珪質 頁岩・赤色珪質岩	なし	56	3204	剥片	黒曜石	なし	73	3268	剥片	黄褐色珪質岩	なし	76
3141	剥片	チャート	なし	56	3205	剥片	黒曜石	なし	65	3269	剥片	チャート	なし	73
3142	剥片	チャート	なし	33	3206	剥片	チャート	なし	65	3270	剥片	チャート	なし	100
3143	剥片	黒曜石	なし	33	3207	剥片	チャート・ 赤色珪質岩	なし	65	3271	剥片	チャート	なし	95
3144	剥片	黒曜石	なし	34	3208	剥片	黒曜石	なし	63	3272	剥片	チャート	なし	96
3145	剥片	チャート	なし	44	3209	剥片	チャート	なし	64	3273	剥片	チャート	なし	107
3146	剥片	黒曜石	なし	42	3210	剥片	チャート	なし	63	3274	剥片	珪質頁岩	なし	42
3147	石核	チャート	53	42	3211	剥片	黒曜石	なし	59	3275	石匙	チャート	85	67
3148	剥片	チャート	なし	20	3212	剥片	黒曜石	なし	59	3276	剥片	黒曜石	なし	67
3149	剥片	黒曜石	なし	20	3213	剥片	黒曜石	なし	59	3277	剥片	チャート・珪質頁岩	なし	67
3150	剥片	チャート・玉髄	なし	20	3214	剥片	黒曜石	なし	58	3278	剥片	チャート	なし	95
3151	剥片	チャート	なし	81	3215	剥片	黒曜石	なし	59	3279	剥片	黒曜石	なし	95
3152	剥片	チャート	なし	83	3216	剥片	黒曜石	なし	98	3280	剥片	赤色頁岩	なし	120
3153	剥片	チャート	なし	85	3217	石匙	チャート・ 赤色珪質岩	119	94					
3154	加工痕ある剥片	黒曜石	49	40	3218	剥片	チャート	なし	95					

遺物索引

番号	材	器形	部位・名称	本文	写真
4001	銅	銅		123	8
4002	金銅	耳環	金環	41	6
4003	銅	銭	新寛永「文」	55	44
4004	銅	銭	開元通宝	49	40
4005	銅	銭	不明	49	40
4006	銅	銭	新寛永	134	106
4007	銅	銭	開元通宝	90	71
4008	銅	銭	元裕通宝	90	71
4009	銅	銭	熙寧元宝	149	112
4010	銅	キセル	雁首	46	34
4011	銅	キセル	雁首	58	46
4012	銅	キセル	吸い口	131	101

番号	材	器形	部位・名称	本文	写真
4013	銅	キセル	吸い口?	41	29
4014	銅	キセル	雁首	46	37
4015	銅	キセル	雁首	136	108
4016	銅	キセル	雁首	134	106
4017	鉄	鎌		78	60
4018	鉄	鎌	茎部	41	29
4019	鉄	鎌	茎部	136	108
4020	鉄	鎌	茎部	136	108
4021	鉄	鎌	茎部	136	108
4022	鉄	角釘		72	56
4023	鉄	角釘?		80	62
4024	鉄	角釘	L字形	41	30

番号	材	器形	部位・名称	本文	写真
4025	鉄	不明		41	29
4026	鉄	刀子	柄部	41	29
4027	鉄	金具	L字形	46	33
4028	鉄	鎌?	柄部	136	108
4029	鉄	火打金		136	108
4030	鉄	不明		134	106
4031	鉄	不明		134	106
4032	鉄	角釘		136	108
4033		欠番			
4034	鉄	不明		72	56
4035	鉄	不明		122	96

番号	器種	樹種	本文	写真
5001	杭	アカマツ	149	113
5002	棒材	ク リ	142	110
5003	棒材	ヤマグワ	142	110
5004	杭(未)	ニワトコ	143	110
5005	構造材	ク リ	142	110
5006	杭(未)	ニワトコ	144	110
5007	杭	アカマツ	143	110
5008	杭(未)	トチノキ	143	110
5009	杭	アカマツ	143	110
5010	杭(未)	マツ属複雑管束亜属	144	110
5011	杭(未)	アカマツ	143	110
5012	構造材	カ ヤ	142	110
5013	構造材	ク リ	142	110
5014	クサビ	アオキ	153	114
5015	棒材	アカガシ亜属	142	110
5016	杭	ヤブツバキ	149	113
5017	杭	クロモジ属	149	113
5018	杭	ヤブツバキ	149	113
5019	杭状木瘤	モミ属	153	115
5020	杭状木瘤	モミ属	153	115
5021	棒材	ヤブツバキ	153	114
5022	杭状木瘤	モミ属	153	115
5023	杭状木瘤	モミ属	153	115
5024	杭状木瘤	モミ属	154	115
5025	杭状木瘤	モミ属	154	115
5026	杭状木瘤	モミ属	153	115
5027	杭状木瘤	モミ属	153	115
5028	杭状木瘤	モミ属?	154	115
5029	杭状木瘤	モミ属	154	115
5030	杭状木瘤	モミ属	154	115
5031	杭状木瘤	モミ属	154	115
5032	杭状木瘤	モミ属	154	115
5033	杭	アカガシ亜属	149	113
5034	杭	ヤブツバキ	149	113
5036	杭状木瘤	モミ属	154	115
5037	杭状木瘤	モミ属	154	115
5038	杭状木瘤	モミ属	154	115
5039	杭状木瘤	モミ属	154	115
5040	杭状木瘤	モミ属	154	115
5041	杭状木瘤	モミ属	154	115
5042	杭状木瘤	モミ属	154	115
5043	杭状木瘤	モミ属	154	115
5044	杭状木瘤	モミ属	154	115
5045	杭状木瘤	モミ属	154	115
5046	杭(未)	カエデ属	151	114
5047	杭状木瘤	モミ属	154	115
5048	杭状木瘤	モミ属	154	115
5049	棒材	エノキ属	153	114
5050	杭(未)	アカガシ亜属	149	113
5051	棒材	カエデ属	153	114
5052	杭(未)	トチノキ	144	110

番号	器種	樹種	本文	写真
5053	杭状木瘤	モミ属	154	115
5054	杭状木瘤	モミ属	154	115
5055	杭状木瘤	モミ属	154	115
5056	杭(未)	アカマツ	151	114
5057	杭(未)	アカマツ	151	114
5058	杭	アカマツ	149	113
5059	杭状木瘤	モミ属?	154	115
5060	杭状木瘤	アカマツ	154	115
5061	杭状木瘤	モミ属	154	115
5062	杭状木瘤	モミ属	154	115
5063	杭状木瘤	モミ属	154	115
5064	杭状木瘤	モミ属	154	115
5065	杭状木瘤	モミ属	154	115
5066	杭状木瘤	モミ属	154	115
5067	杭状木瘤	モミ属	154	115
5068	杭状木瘤	モミ属	154	115
5069	杭状木瘤	モミ属	154	115
5070	杭状木瘤	アカガシ亜属	154	115
5071	杭状木瘤	モミ属	155	115
5072	杭状木瘤	モミ属	155	116
5073	杭状木瘤	モミ属	155	116
5074	杭状木瘤	モミ属	155	116
5075	杭状木瘤	モミ属	155	116
5076	加工木	ケヤキ	153	114
5077	杭状木瘤	モミ属	155	116
5078	杭状木瘤	モミ属	155	116
5079	杭状木瘤	モミ属	155	116
5080	杭状木瘤	モミ属	155	116
5081	杭状木瘤	モミ属	155	116
5082	杭状木瘤	モミ属	155	116
5083	杭状木瘤	モミ属	155	116
5084	杭状木瘤	モミ属	155	116
5085	杭状木瘤	モミ属	155	116
5086	杭状木瘤	モミ属	155	116
5087	杭状木瘤	モミ属	155	116
5088	棒材	アカガシ亜属	142	110
5089	杭	アカガシ亜属	143	110
5090	杭	ヤブツバキ	143	110
5091	角材	カエデ属	142	110
5092	杭	ヤマグワ	143	110
5093	杭(未)	アカガシ亜属	144	110
5094	加工木	ムクロジ	153	114
5095	杭	アカガシ亜属	143	110
5096	杭	ムクロジ	143	110
5097	杭	アカマツ	143	110
5098	杭(未)	アカガシ亜属	144	110
5099	加工木	アカマツ	142	110
5100	杭	アカマツ	144	111
5101	杭(未)	アカガシ亜属	144	111
5102	棒材	コクサギ	153	114
5103	杭(未)	ク リ	144	111

番号	器種	樹種	本文	写真
5104	杭	ク リ	143	111
5105	杭	アカマツ	143	111
5106	杭	アカマツ	143	111
5107	杭	アカマツ	143	111
5108	杭	アサダ	149	113
5109	杭	アカガシ亜属	149	113
5110	加工木	ケヤキ	153	114
5111	杭状木瘤	モミ属	155	116
5112	杭状木瘤	モミ属	155	116
5113	杭状木瘤	モミ属	155	116
5114	杭状木瘤	モミ属	155	116
5115	杭状木瘤	モミ属	155	116
5116	杭状木瘤	モミ属	155	116
5117	杭状木瘤	モミ属	155	116
5118	杭状木瘤	モミ属	155	116
5119	杭状木瘤	モミ属	155	116
5120	杭状木瘤	モミ属	155	116
5121	杭状木瘤	モミ属	155	116
5122	棒材	カエデ属	153	114
5123	杭状木瘤	モミ属	155	116
5124	杭状木瘤	モミ属	155	116
5125	杭状木瘤	カエデ属	155	116
5126	棒材	カエデ属	153	114
5127	杭状木瘤	モミ属	155	116
5128	加工木	ケヤキ	153	114
5129	杭	サクラ属	149	113
5130	杭	ケンボナン属	150	113
5131	杭	ケンボナン属	149	113
5132	杭状木瘤	モミ属	156	116
5133	杭状木瘤	モミ属	156	116
5134	杭状木瘤	モミ属?	156	116
5135	杭状木瘤	モミ属	156	116
5136	杭状木瘤	モミ属	156	116
5137	杭状木瘤	モミ属	156	116
5138	杭状木瘤	モミ属	156	116
5139	杭	アサダ	150	113
5140	杭状木瘤	モミ属	156	116
5141	杭状木瘤	モミ属	156	116
5142	杭状木瘤	モミ属	156	116
5143	杭状木瘤	モミ属	156	116
5144	杭状木瘤	モミ属	156	116
5145	杭状木瘤	モミ属	156	116
5146	杭状木瘤	モミ属	156	116
5147	杭(未)	アカマツ	152	114
5148	杭(未)	アカマツ	152	114
5149	杭(未)	アカマツ	152	114
5150	杭	アカマツ	150	113
5151	杭(未)	アカマツ	152	114
5152	杭(未)	アカマツ	152	114
5153	杭(未)	アカマツ	152	114
5154	杭(未)	マツ属複雑管束亜属	152	114

第Ⅳ章 索引

番号	器種	樹種	本文	写真	番号	器種	樹種	本文	写真	番号	器種	樹種	本文	写真
5155	加工木	アカマツ	153	114	5199	棒材	ケヤキ	159	118	5243	加工木	カヤ	164	122
5156	杭	アカマツ	150	113	5200	杭状木瘤	モミ属	159	119	5244	加工木	カヤ	164	122
5157	杭	アカマツ	150	113	5201	杭状木瘤	モミ属	159	119	5245	加工木	カヤ	164	122
5158	杭(未)	アカマツ	152	114	5202	杭状木瘤	モミ属	159	119	5246	杭状木瘤	モミ属	165	122
5159	杭	アカマツ	150	113	5203	杭状木瘤	モミ属?	159	119	5247	加工木	カヤ	165	122
5160	杭	アカマツ	150	113	5204	杭状木瘤	モミ属	160	119	5248	加工木	カヤ	165	122
5161	杭	アカマツ	150	113	5205	杭状木瘤	モミ属	160	119	5249	加工木	カヤ	165	122
5162	杭	アカマツ	150	113	5206	杭状木瘤	モミ属	160	119	5250	杭?	アカガシ亜属	168	123
5163	杭	アカマツ	150	113	5207	杭状木瘤	モミ属?	160	119	5251	杭状木瘤	モミ属	168	124
5164	杭	アカマツ	150	113	5208	杭状木瘤	モミ属?	160	119	5252	棒材	アカガシ亜属	167	123
5165	杭	アカマツ	150	113	5209	杭状木瘤	モミ属	160	119	5253	杭状木瘤	モミ属	168	124
5166	杭	アカマツ	150	113	5210	杭状木瘤	モミ属	160	119	5254	杭状木瘤	モミ属	168	124
5167	杭	アカマツ	150	113	5211	杭状木瘤	モミ属	160	119	5255	杭状木瘤	モミ属	168	124
5168	杭	アカマツ	150	113	5212	杭状木瘤	モミ属	160	119	5256	杭状木瘤	モミ属	168	124
5169	杭(未)	アカマツ	152	114	5213	杭状木瘤	モミ属	160	119	5257	杭状木瘤	モミ属	168	124
5170	杭	アカマツ	150	113	5214	杭状木瘤	モミ属?	160	119	5258	杭状木瘤	モミ属	168	124
5171	杭	アカマツ	151	113	5215	杭状木瘤	モミ属	160	119	5259	杭状木瘤	モミ属	168	124
5172	杭	マツ属複雑管束亜属	151	113	5216	杭状木瘤	モミ属	160	119	5260	角材	トネリコ属	167	123
5173	杭	アカマツ	151	114	5217	杭状木瘤	モミ属	160	119	5261	杭	ケヤキ	167	124
5174	杭	アカマツ	151	114	5218	杭状木瘤	モミ属	160	119	5262	角材	アカガシ亜属	167	123
5175	杭	アカマツ	151	114	5219	杭状木瘤	モミ属	160	119	5263	杭状木瘤	モミ属	168	124
5176	杭	アカマツ	151	114	5220	棒材	エノキ属	159	118	5264	杭(未)	カヤ	167	124
5177	杭	アカマツ	151	114	5221	杭状木瘤	モミ属	160	119	5265	杭状木瘤	モミ属?	168	124
5178	杭	アカマツ	151	114	5222	杭状木瘤	モミ属	160	119	5266	杭状木瘤	モミ属	168	124
5179	杭状木瘤	モミ属	156	116	5223	杭状木瘤	モミ属	160	119	5267	杭状木瘤	モミ属	168	124
5180	クサビ	アカガシ亜属	153	114	5224	杭状木瘤	モミ属	160	119	5268	杭	カエデ属	167	124
5181	杭状木瘤	モミ属	159	118	5225	杭状木瘤	モミ属	160	119	5269	杭状木瘤	モミ属	168	124
5182	杭状木瘤	モミ属	159	118	5226	杭状木瘤	モミ属	160	119	5270	杭(未)	ムクロジ	167	124
5183	杭状木瘤	モミ属	159	118	5227	棒材	カエデ属	159	118	5271	杭状木瘤	モミ属	168	124
5184	杭状木瘤	モミ属	159	118	5228	杭	アカガシ亜属	159	118	5272	杭状木瘤	モミ属	170	125
5185	杭状木瘤	モミ属	159	118	5229	杭	コクサギ	162	120	5273	杭状木瘤	モミ属	170	125
5186	杭状木瘤	モミ属	159	118	5230	ヤス	モミ属	162	120	5274	杭状木瘤	モミ属	170	125
5187	杭状木瘤	モミ属	159	118	5231	杭(未)	モミ属	162	120	5275	杭状木瘤	モミ属	170	125
5188	杭状木瘤	モミ属	159	118	5232	杭状木瘤	モミ属	165	122	5276	杭状木瘤	モミ属	170	125
5189	杭状木瘤	モミ属	159	118	5233	杭状木瘤	モミ属	165	122	5277	杭状木瘤	モミ属	170	125
5190	杭状木瘤	モミ属	159	119	5234	杭状木瘤	モミ属	165	122	5278	参考	トウヒ属	166	124
5191	杭状木瘤	モミ属	159	119	5235	杭状木瘤	モミ属	165	122	5279	参考	トウヒ属	166	124
5192	杭状木瘤	モミ属	159	119	5236	板材	アカガシ亜属	164	121	5280	参考	トウヒ属	166	124
5193	杭状木瘤	モミ属	159	119	5237	杭状木瘤	モミ属	165	122	5281	参考	トウヒ属	166	124
5194	杭状木瘤	モミ属	159	119	5238	加工木	カヤ	164	121	5282	参考	トウヒ属	166	124
5195	杭状木瘤	モミ属	159	119	5239	杭状木瘤	モミ属	165	122	5283	参考	トウヒ属	166	124
5196	杭状木瘤	モミ属	159	119	5240	加工木	カヤ	164	122	5284	参考	トウヒ属	166	124
5197	杭状木瘤	モミ属	159	119	5241	加工木	カヤ	164	122					
5198	杭状木瘤	モミ属	159	119	5242	加工木	カヤ	164	122					

番号	種類	名称	本文	写真	番号	種類	名称	本文	写真
7001	骨	シカ?ヒト?	82	63	7009	炭化材	アカガシ亜属・クリ・針葉樹		58
7002	炭化材	コナラ節		86	7010	炭化材	アカガシ亜属	125	99
7003	炭化種子?	不明	34	25	7011	炭化種子	イネ・オオムギ・タデ属野生種	121	96
7004	炭化材	クリ	77	60	7012	炭化材	アサダ・散孔材・アカガシ亜属・ケヤキ	121	96
7005	炭化材	コナラ節		50	7013	炭化材	クリ	116	92
7006	炭化材	カヤ		70	7014	炭化材	クスギ節		31
7007	炭化材	モミ属	84	66	7015	炭化材	カヤ		82
7008	炭化種子	アカガシ亜属		58	7016	炭化材	不明		56

番号	種類	色	本文	写真	番号	種類	色	本文	写真	番号	種類	色	本文	写真
8001	小玉	青緑	107	8	8004	小玉	青緑	85	8	8007	小玉	青緑	122	8
8002	小円盤	薄緑	64	8	8005	小玉	青緑	76	8	8008	小玉	青緑	137	8
8003	小玉	紺青緑黄透明	41	6	8006	小玉	青緑	123	8					

S u m m a r y

1. Outline of the Site

This Amabiki-Kitsunezaki site is located at Kitsunezaki and Nishitani sections, Amabiki, Kanra town, Gunma Pref. The excavation area consists of the top of Sagiya terrace, 20 meter high from ground level and the valley of Sanzu river, a branch of Kabura river.

The archaeological excavation was held from March 1st 1990 to March 31st 1991, by our team. And recently the location of this site had changed the east part of Kanra Parking Area on the Johshin-etsu Highway.

The results of paleolithic research on this site was already published as "Amabiki-Kitsunezaki site vol.I" at 1994.

2. Number of Main Monuments

After the Middle Ages : a ruins of landslide by the earthquake at the first half of 19 century , and a cut road on the top of terrace, builded at the second half of 13th century

Kofun Period : the ruins of graves, included 4 squared ditch tomb on Early stage, 2 mound tombs on Later stage

Yayoi Period : the ruins of a village, consists of 34 hole type dwellings on Later stage with artifacts such as a bronze bracelet and 5 iron arrowheads, and ruins of weir at the old Sanzu river with a wooden fish spear

3. Characteristic Results

A. *After The Ancient Ages*

On these ages, most huge monument is a ruin of the cut road, had been used since that time until recently with 2 or 3 times restorations. Probably, this road was builded by Obata family, the feudal lord on this Kabura river area.

B. *The Kofun Period*

At the time of building for the first mound tombs on the Later stage, early 6th century AD, there were still 4 squared ditch tombs, each have lower mound and builded on 4th century. It is certain, both the two peoples regarded with each chief's tombs had not any relationship, however, the people on 6th century still had respect for the old tombs, more a hundred years ago.

C. *The Yayoi Period*

At this site too, a village on the Later stage suddenly appeared and vanished during short time as some residential sites in this area. This village had few scarce metallic items such a bronze bracelet by Korean raw materials, or iron arrowheads, and this fact means that the Kanra corridor was one of the advanced area on East Japan at this time.

Before the village, the Yayoi culture already had come up to this site on the Early stage as shown a small pottery shard from Northern Kyushu.

Other especially result on this period is a discovery of river fishery's ruins and identification of more 1,300 driftwoods. By this data, we could reconstruct botanical environment up to the surrounding area.

D. *Before The Jomon Period*

Except pottery shards and stone tools from Early to Later stage, we discovered a few wood sample, *Picea*, at old river. It seems that this area was a needleleaf trees forest on Upper Paleolithic period.

(Sakai T.)

報告書抄録

フリガナ	アマビキツネザキ
書名	天引狐崎遺跡Ⅱ
副書名	関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻	第39集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告
シリーズ番	第211集
編著者名	坂井 隆 平野進一 原 雅信 麻生敏隆 鈴木正男 戸村健児 平尾良光 榎本淳子 藤根 久 吉川純子 設楽博巳 友廣哲也
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年	1996年

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
アマビキ ツネザキ 天引狐崎	カンラゲン カンラマチオオ アザアマビキ アザキツネザキ 甘楽郡甘楽町 大字天引字狐崎	103845	10005- 00292	361413 361421	1385056 1385727	19900301～ 19910331	19,730m ²	高速道路 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
天引狐崎	生産 災害	近世近代	溝 地震跡	13 1		畠開発跡 近世後期の地滑り
	交通	中世	道路	1	竜泉窯青磁碗小片	切り通し直線路
	居住	古代	土坑	1	土器羽釜	屋外炉
	墳墓	古墳	方形周溝墓	4	埴輪・金環・ガラス玉	10～15m級 多角形状墳 前期
	居住		横穴式石室円墳 竪穴住居	2 1		
	居住	弥生	竪穴住居	34	後期銅釧1・鉄鏃5 前期北部九州土器片 後期終末蓋受け付壺	台地上の後期中葉 集落と低地の漁労 施設 集落廃棄後 墳墓出現
	墳墓		土坑	13		
	生産		壺棺墓 円形周溝墓 ヤナ状施設	1 2 1		
生産	縄文	土坑	2	前期～後期土器片	陥穴か 石器多	

財群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘報告第211集

天引狐崎遺跡Ⅱ

<A 本文編>

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第39集

平成8年12月26日 印刷

平成8年12月26日 発行

編集／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所